

長万部町

共立2遺跡・豊野4遺跡

— 北海道新幹線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

令和2年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター

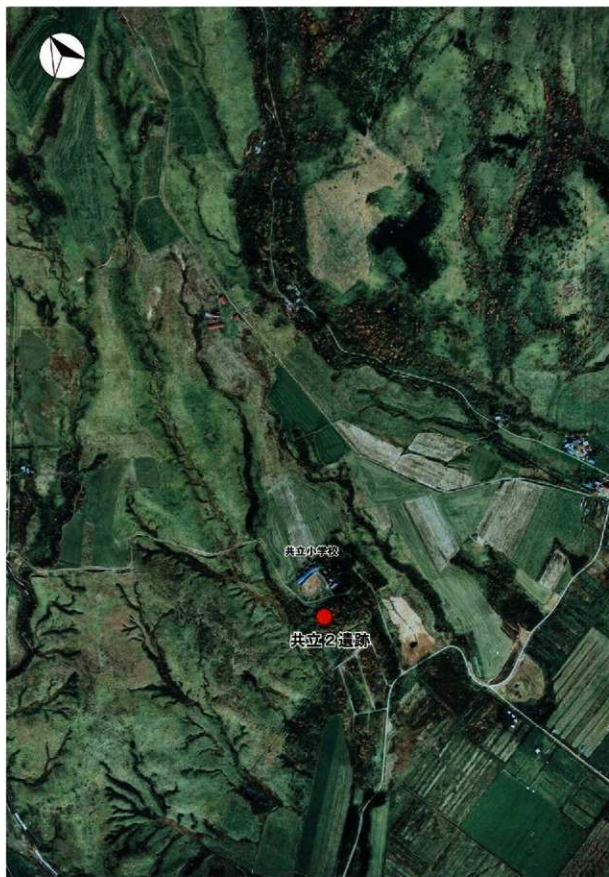
長万部町

共立 2 遺跡・豊野 4 遺跡

— 北海道新幹線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

令和 2 年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター



共立2遺跡の位置（空中写真）

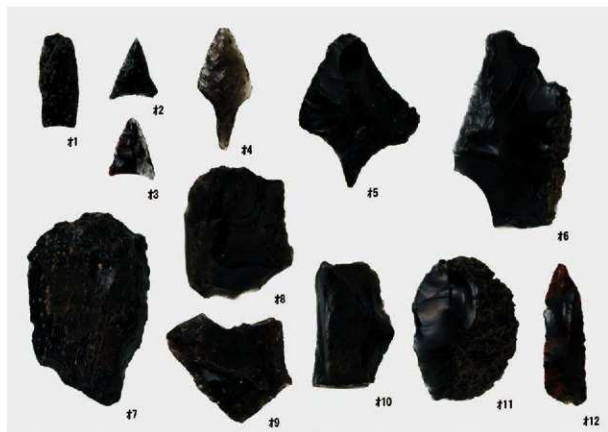
※ 国土地理院（空中写真）「C HO-76-12 C8-16」に加筆



共立 2 遺跡 調査区遠景



共立 2 遺跡 調査状況



黒曜石原産地分析試料 (S = 1 : 1)



豊浦町豊泉川採取の黒曜石 (S = 1 : 1)



豊野4遺跡 周辺の遺跡

※ 国土地理院（空中写真）「C HO-7614 C6C-13 1976年10月9日撮影」に加筆



豊野4遺跡 調査区遠景（北東から）

例 言

1. 本書は、独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構が行う北海道新幹線建設事業に伴い、公益財団法人 北海道埋蔵文化財センターが令和2（2020）年度に実施した、長万部町 共立2遺跡、豊野4遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書（『長万部町 共立2遺跡・豊野4遺跡』北埋調報366）である。
2. 令和3（2021）年に当センターが刊行した『調査年報32』で報告した内容よりも、本報告書記載の内容が優先する。
3. 本書の執筆は、新家水奈・末光正卓が分担し文責は各項目の末尾に括弧で記した。編集は末光が行った。
4. 現場の写真撮影は、豊野4遺跡は新家・広田良成、共立2遺跡は末光・菊池慈人が担当し、報告書掲載遺物は菊池慈人が撮影した。
5. 調査・報告にあたり、下記の諸機関及び各氏から御指導・御協力をいただいた。
(所属は当時・順不同・敬称略)

北海道教育庁生涯学習推進局 文化財・博物館課
長万部町教育委員会 八雲町教育委員会 今金町教育委員会
長万部町教育委員会 濱田偉大
八雲町教育委員会 平山わた 大谷茂之
有限会社 ヤマタ菊田水産

記号等の説明

1. 確認した遺構は下記の略号を用い、連番を付し本文及び図表中に用いた。

P : 土坑 TP : Tピット

PS : 土器集中 FC : フレイク集中 S : 礫集中

2. 遺構図面等の縮尺

土坑・Tピット : 40分の1 土器集中 : 20分の1

フレイク集中 : 40分の1 礫集中 : 20分の1 その他 : 80分の1

地形測量図・遺構位置図 : 原則1000分の1

各図にスケールと方位記号（座標北）を付した。遺構平面図の「+（十字）と文字列」はグリッドで、遺構平面図等の「・（ドット）と数値」はその地点の標高（m）を示す。

3. 遺物図の縮尺は次のとおりでスケールを付した。

復原土器 : 4分の1 破片土器 : 3分の1

剥片石器 : 2分の1 礫石器 : 3分の1（大型のものは4分の1）

石製品 : 2分の1または3分の1

4. 本文及び図表中で遺構の規模は次の要領で表記した。

（丸括弧）は一部破壊されているもの等について、現存する計測値を示す。

掘り込みのある遺構 :

確認面の長径×短径／床面・坑底面の長径×短径／確認面からの最大深（m）

平面的な遺構 :

範囲の長径×短径／確認面からの最大深（m）

目 次

口絵

例言

記号等の説明

目次

図目次

表目次

写真図版目次

I 章 緒 言

1. 調査要項	1
2. 調査体制	1
3. 調査の経緯	1
(1) 北海道新幹線建設事業	
(2) 範囲確認調査（試掘調査）の概要	
(3) 発掘調査の経過	
4. 調査成果の概要	5
(1) 共立 2 遺跡の調査成果	
(2) 豊野 4 遺跡の調査成果	

II 章 遺跡の立地と周辺の環境

1. 立地と環境	7
(1) 長万部町の立地	
(2) 長万部町の環境	
(3) 長万部町の交通	
2. 遺跡の周辺	9
(1) 共立 2 遺跡 共立・静狩地区	
(2) 豊野 4 遺跡 国縫・豊野地区	
(3) 地名について	
3. 旧地形図の読図	20
(1) 松浦武四郎の取調圖の地名	
(2) 明治年間の共立 2 遺跡の周辺	
(3) 大正～昭和（戦前）年間の共立 2 遺跡の周辺	
(4) 明治年間の豊野 4 遺跡の周辺	
(5) 大正～昭和（戦前）年間の豊野 4 遺跡の周辺	
4. 長万部町内の遺跡	31
(1) 調査・研究史	
(2) 河川ごとの地域	

III 章 調査の概要

1. 発掘区の設定	41
2. 基本土層	41
(1) 共立 2 遺跡の基本土層	
(2) 豊野 4 遺跡の基本土層	

3. 調査の方法	51
(1) 共立2遺跡の調査方法	
(2) 豊野4遺跡の調査方法	
4. 整理の方法	55
(1) 一次整理の方法	
(2) 二次整理の方法	
5. 遺物の分類基準	56
Ⅳ章 共立2遺跡の調査	
1. 遺構の概要	61
2. 土坑	61
P-1 P-2 P-3 P-4 P-5 P-6	
3. Tピット	67
TP-1 TP-2 TP-3 TP-4	
4. 土器集中	71
PS-1 PS-2 PS-3 PS-4 PS-5	
5. フレイク集中	75
FC-1 FC-2	
6. 礫集中	77
S-1	
7. 旧石器調査	77
8. 包含層出土遺物の概要	77
9. 土器	81
(1) 復原土器	
(2) 破片土器	
10. 石器	87
(1) 遺構出土の石器	
(2) 黒曜石原産地分析試料	
(3) 包含層出土の石器	
Ⅴ章 豊野4遺跡の調査	
1. 令和2年度の調査の概要	107
2. 出土遺物	107
Ⅵ章 結 語	
1. まとめ	111
(1) 共立2遺跡	
(2) 豊野4遺跡	
2. 共立2遺跡出土の黒曜石と豊浦町豊泉の原産地について	111
3. 寛文9年蝦夷の乱（シャクシャインの戦い）における長万部	116
付篇	
1. 共立2遺跡出土の黒曜石製石器の産地推定	129
写真図版	
引用参考文献	
報告書抄録	

目 次

図1	共立2遺跡の位置	2	図36	共立2遺跡	P-1・P-2	64
図2	豊野4遺跡の位置	4	図37	共立2遺跡	P-3・P-4	65
図3	共立2遺跡 現況図(工事図面)	10	図38	共立2遺跡	P-5・P-6	66
図4	共立2遺跡・共立2遺跡 周辺の地形合成図	11	図39	共立2遺跡	TP-1・TP-2	68
図5	豊野4遺跡 周辺の地形	12	図40	共立2遺跡	TP-3	69
図6	豊野4遺跡 現況図	13	図41	共立2遺跡	TP-4	70
図7	豊野4遺跡 現況図(工事図面)	14	図42	共立2遺跡	PS-1・PS-2	72
図8	駒ヶ岳d火山灰(Ko-d)分布図	15	図43	共立2遺跡	PS-3・PS-4	73
図9	駒ヶ岳g火山灰(Ko-g)分布図	15	図44	共立2遺跡	PS-5・FC-1・FC-2・S-1	74
図10	豊野4遺跡 周辺の地質	16	図45	共立2遺跡	旧石器調査	76
図11	豊野4遺跡周辺にみられる石油のしみ出し	17	図46	共立2遺跡	遺物出土分布図(1)	78
図12	旧国縫小学校敷地内に立つ シャクシャイン古戦場碑	18	図47	共立2遺跡	遺物出土分布図(2)	79
図13	『蝦夷地 全圖』に描かれた内浦湾	19	図48	共立2遺跡	遺物出土分布図(3)	80
図14	東西蝦夷山川地理取調 四(長万部町の部分)	21	図49	共立2遺跡	遺物出土分布図(4)	81
図15	共立2遺跡 周辺の状況(1) 明治	23	図50	共立2遺跡	遺構出土復原土器	82
図16	共立2遺跡 周辺の状況(2) 大正～昭和(戦前)	24	図51	共立2遺跡	遺構出土破片土器	82
図17	豊野4遺跡 周辺の状況(1) 明治	28	図52	共立2遺跡	包含層出土破片土器(1)	83
図18	豊野4遺跡 周辺の状況(2) 大正～昭和(戦前)	29	図53	共立2遺跡	包含層出土破片土器(2)	84
図19	長万部町内の遺跡	30	図54	共立2遺跡	包含層出土破片土器(3)	85
図20	国縫墓地井戸と駐車場	34	図55	共立2遺跡	遺構出土土器(1)	86
図21	昭和27(1952)年の豊野・国縫	35	図56	共立2遺跡	遺構出土土器(2)・黒曜石原産地分析試料	88
図22	昭和45(1970)年の豊野・国縫	36	図57	共立2遺跡	包含層出土土器(1)	89
図23	共立2遺跡 グリッド設定図	42	図58	共立2遺跡	包含層出土土器(2)	90
図24	豊野4遺跡 グリッド設定図	43	図59	共立2遺跡	包含層出土土器(3)	92
図25	長万部町 基本土層柱状図	45	図60	共立2遺跡	包含層出土土器(4)	93
図26	共立2遺跡 土層断面図	46	図61	共立2遺跡	包含層出土土器(5)	94
図27	共立2遺跡 15ライン柱状図	47	図62	共立2遺跡	包含層出土土器(6)	95
図28	共立2遺跡 E・G・Iライン柱状図	48	図63	豊野4遺跡	地形測量図	107
図29	共立2遺跡 K・Mライン柱状図	49	図64	豊野4遺跡	出土遺物分布図	108
図30	共立2遺跡 O・Qライン柱状図	50	図65	豊野4遺跡	出土土器	109
図31	豊野4遺跡 基本土層図	52	図66	豊浦町豊原黒曜石原産地		115
図32	豊野4遺跡 杭山柱状図(1)	53	図67	クンネ井砂金山 御役所		126
図33	豊野4遺跡 杭山柱状図(2)	54				
図34	表土除去後地形測量図・切株位置図	62				
図35	共立2遺跡 最終面地形測量図・遺構位置図	63				

表 目 次

表1	遺構数一覧表	6	表14	岩石(石材)の略号	60
表2	遺物点数一覧表	6	表15	共立2遺跡 土坑・Tビット一覧表	96
表3	長万部村 字名地番改正表(昭和14年)	20	表16	共立2遺跡 遺物集中一覧表	96
表4	長万部町内の遺跡一覧表	37~40	表17	共立2遺跡 遺構出土土器点数表	97
表5	発掘調査基準点一覧表	44	表18	共立2遺跡 遺構出土土器点数表	97
表6	共立2遺跡 基本土層	44	表19	共立2遺跡 包含層出土土器点数表	98
表7	豊野4遺跡 基本土層	44	表20	共立2遺跡 包含層出土土器点数表	99
表8	土器時期分類基準	57	表21	共立2遺跡 PS-5出土復原土器観察表	100
表9	土器部位分類基準	57	表22	共立2遺跡 PS-4出土復原土器観察表	100
表10	土器残存状態分類基準	57	表23	共立2遺跡 遺構出土破片土器観察表	101
表11	石器器種分類基準	58	表24	共立2遺跡 包含層出土破片土器観察表	102~104
表12	石器残存状態分類基準	58	表25	共立2遺跡 遺構出土土器観察表	105
表13	岩石分類体系表	59・60			

表26	共立2遺跡	
	旧石器調査出土石器(写真のみ)観察表	105
表27	共立2遺跡	黒曜石原産地分析試料一覧表
表28	共立2遺跡	包含層出土石器観察表
表29	豊野4遺跡	包含層出土石器点数表
表30	豊野4遺跡	掲載石器一覧
表31	共立2遺跡	黒曜石原産地分析試料観察表

表32	寛文9年蝦夷の乱における長万部	127
-----	-----------------	-----

付篇1

表1	分析対象	129
表2	東日本黒曜石産地の判別群	130
表3	測定値および産地推定結果	132
表4	出土層位、器種別の産地	132

写真図版目次

口絵1	共立2遺跡の位置(空中写真)
口絵2	共立2遺跡 調査区遠景
	共立2遺跡 調査状況
口絵3	黒曜石原産地分析試料(S=1:1)
	豊浦町豊泉川採取の黒曜石(S=1:1)
口絵4	豊野4遺跡 周辺の遺跡
	豊野4遺跡 調査区遠景(北東から)
図版1	共立2遺跡
	調査区東側表土除去作業(南から)
	調査区西側表土除去後(南東から)
図版2	共立2遺跡
	調査区北側調査状況(南から)
	調査区北側斜面部調査状況(北から)
図版3	共立2遺跡
	調査区西側調査状況(東から)
	調査区南側調査状況(南東から)
図版4	共立2遺跡
	P-1遺物出土状況
	P-2セクション
	P-2完掘
	P-3セクション
	P-3完掘
図版5	共立2遺跡
	P-4セクション
	P-4完掘
	P-5セクション
	P-6セクション
	P-6完掘
図版6	共立2遺跡
	T P-1セクション
	T P-1完掘
	T P-2セクション
	T P-2完掘
図版7	共立2遺跡
	T P-3セクション
	T P-3完掘
	T P-4セクション
	T P-4完掘
図版8	共立2遺跡
	P S-1検出
	P S-2検出
	P S-3検出
	P S-4検出

図版9	共立2遺跡
	P S-5検出
	F C-1検出
	F C-2検出
	S-1検出
図版10	共立2遺跡
	旧石器調査範囲
	旧石器調査
	旧石器出土状況
図版11	共立2遺跡
	L19・20区メインセクション
	Lライン東側メインセクション
	調査区完掘
図版12	共立2遺跡
	遺構出土復原土器
	遺構出土破片土器
図版13	共立2遺跡
	包含層出土破片土器
図版14	共立2遺跡
	遺構出土石器
	黒曜石原産地分析試料
図版15	共立2遺跡
	包含層出土石器(1)
図版16	共立2遺跡
	包含層出土石器(2)
図版17	共立2遺跡
	包含層出土石器(3)
図版18	豊野4遺跡
	調査前状況(北から)
	調査前状況(南から)
図版19	豊野4遺跡
	表土除去作業(南から)
	表土除去作業終了(北から)
図版20	豊野4遺跡
	包含層検出(北から)
	包含層検出(南から)
図版21	豊野4遺跡
	包含層調査(南西から)
	包含層調査(東から)
図版22	豊野4遺跡
	沢地形調査状況(北東から)
	沢地形土層断面(北東から)
図版23	豊野4遺跡
	地山礫出土状況(F2・3区付近)(東から)
	土層断面(G3区)(北東から)
図版24	豊野4遺跡
	調査区完掘(東から)
	出土石器

I 章 緒 言

1. 調査要項

事業名：北海道新幹線建設事業に伴う埋蔵文化財調査

委託者：独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構 北海道新幹線建設局

調査期間：令和2年4月1日～令和3年3月31日（現地調査 令和2年5月7日～8月28日）

遺跡名：共立2遺跡（B-17-52）

所在地：山越郡長万部町共立471

調査面積：4,200㎡

遺跡名：豊野4遺跡（B-17-33）

所在地：山越郡長万部町豊野130-1

調査面積：320㎡

2. 調査体制

令和2（2020）年度

第1調査部長 鈴木 信（常務理事 兼務）

第2調査部長 村田 大

第2調査部第1調査課 課長 皆川洋一（発掘担当者）

主査 新家水奈（豊野4遺跡発掘担当者）

主査 末光正卓（共立2遺跡発掘担当者）

第2調査部第2調査課 主査 広田良成（6月1日～26日）

主査 山中文雄（5月7日～29日）

第1調査部第1調査課 主任 菊池慈人（6月29日～8月28日）

3. 調査の経緯

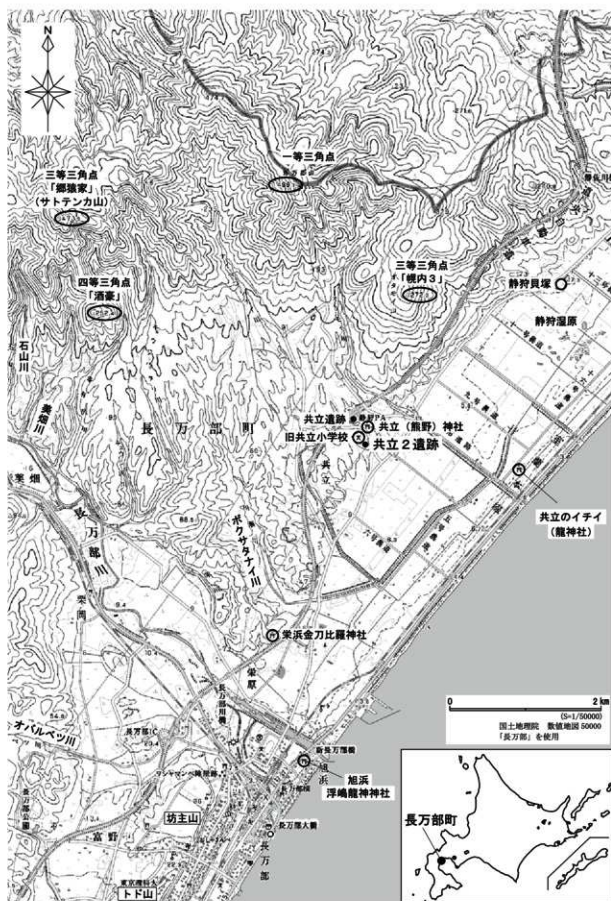
（1）北海道新幹線建設事業

昭和48（1973）年に定められた整備新幹線の一つである北海道新幹線の建設事業は、独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構（以下、JRTT）が進めており、平成28（2016）年3月26日、新青森駅～新函館北斗間の148.8kmが開業した。同区間の青函トンネル（53.85km）部分を含む本州側の新中小国信号所～北海道の木古内駅間は在来線である海峡線との共用区間で、同駅～新函館北斗駅までは新幹線独自の新路線である。この木古内駅より北側の新路線建設に伴い、平成21～23（2009～2011）年度に当センターが調査した遺跡を列記する。丸括弧内は工事区間で、STAは測点、Kmは新青森起点からの距離である。

木古内町

・木古内2遺跡（STA.1139付近）：北埋調報278・293

・木古内遺跡（114K200～400m付近）：北埋調報304



- ・蛇内2遺跡(116K000~100m付近):北埋調報281・292
- ・大平遺跡(115K100~200m付近):北埋調報280・321・328
- ・大平4遺跡(115K300~400m付近):北埋調報280・292

北斗市

- ・押上1遺跡(STA.1376~1377):北埋調報312

また、本古内駅以南の地域で本事業関連により調査した遺跡を記す。

本古内町 新道4遺跡(111K423.313~483.313m付近):平成25(2013)年度調査 北埋調報320

福島町 館崎遺跡(新幹線信号通信機器室):平成21~23(2009~2011)年度調査 北埋調報333

知内町 湯の里遺跡(101K000m付近):平成28(2016)年度調査 北埋調報334

令和2(2020)年現在、新函館北斗駅から札幌駅までの路線(約211.5km)が建設中で、令和12(2030)年度末の開業、現在試験中の新幹線車両「E956型」アルファ・エックス(ALFA-X)による最高時速360kmで営業運転される予定である。さらに北海道整備新幹線は旭川まで計画されている。

札幌までの区間の駅は新八雲(仮称)、長万部、倶知安、新小樽(仮称)で、長万部駅と倶知安駅は在来線の駅に併設され、新八雲と新小樽駅は新規に開業する。線路は現在の函館本線が走る山間部のルート(北回りルート)で、17か所あるトンネルの合計距離が168.9kmと全路線の約80%を占める。これらトンネルの掘削工事で大量の発生土が生じ、これらの土を受入れる用地が必要である。

今回調査した共立2遺跡は、「立岩トンネル工事」(長さ17,035m)の発生土受入地としてJRTTに提供された長万部町の町有地であり、豊野4遺跡は路線上で「国縫トンネル」(長さ1,340m)内の札幌寄りの地点、新青森起点から225km560~580mの場所である。

(2) 範囲確認調査(試掘調査)の概要

北海道教育委員会(以下、道教委)による範囲確認調査は次のとおりである。発生土受入地である共立2遺跡は、旧共立小学校の南側にある。調査は令和元(2019)年8月27・28日に行われ、試掘坑「B20L80」から土器と礫、「B60L100」から礫石と礫が出土した。トンネル工事の発生土は現地地形を整地してその上に厚く盛土するため、現状保存は困難で、発掘調査が必要な範囲4,200㎡が定められた。また、本地点は平成11(1999)年の高速道路「静狩パーキングエリア」の発掘調査時点においては、共立遺跡の南側部分に含まれていたが(長万部町教委 2000)、今回の範囲確認調査で共立2遺跡(52)として分けられ新規に登録された。

豊野4遺跡は国縫墓地の西側、同じ台地上で、範囲確認調査は同年11月27日に行われ、試掘坑「225K560」から頁岩と黒曜石のフレイクが出土した。本地点は、同じ段丘上で南西方向に広がる豊野4遺跡の縁辺部と考えられ、320㎡の発掘調査が必要と判断された。

(3) 発掘調査の経過

発掘調査は令和2(2020)年度の5~8月に第2調査部第1調査課が担当した。4月に準備工に着手し、現場事務所の設置、重機による表土除去作業等を実施した。5月7日に現場事務所を開所し、人力での発掘調査を開始した。現場調査事務所は共立2遺跡の北側の旧共立小学校のグラウンドにおき、豊野4遺跡へは車両で移動し、国縫墓地の駐車場を利用した。また6月3日(水)の北海道新聞道南地方版に、共立2遺跡の発掘調査の記事が掲載された。報告書作成のための整理作業は9月から開始し、同年度末に本報告書(北埋調報366)を刊行した。



図2 豊野4遺跡の位置

4. 調査成果の概要 (表1・2)

(1) 共立2遺跡の調査成果 (図34・35)

調査区の地形は中央が高く周囲へと傾斜し、概して遺物包含層の残存状態はよくない。遺構は土坑6基、Tピット4基、土器集中5か所、フレイク集中2か所、礫集中1か所を調査した。土坑は、P-1~4・6は南から南東側の斜面、P-5のみ南西側に位置する。P-1は石核と台石が出土し、P-2は楕円形で覆土は黄色土主体である。P-3とP-6は円形、P-4は楕円形でいずれも浅い。P-5は長方形で坑底が平坦である。Tピットはすべて溝状の細長い形状で、北側の斜面にみられる。TP-1から石鏃、TP-2からはU・Rレキが出土した。TP-3・4は北側の調査区際でみつかった。土器集中とフレイク集中は南から南東側に位置する。PS-1~4は縄文時代前期で、PS-5は縄文時代早期である。PS-4・5は復原個体が得られた。FC-1・2は頁岩製フレイクが出土した。S-1は北側の斜面にみられ、出土した礫石器は披熟している。また、N-13区では頁岩製のナイフ型石器らしき遺物が出土したため、周囲のIV層を掘り下げて旧石器確認調査をした。

遺物は、土器1518点、石器1520点が出土した。土器は一次整理でⅢ群に分類したが、二次整理では多くがⅡ群と判明した。剥片石器は、石鏃、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパーで、石鏃と石錐のみ黒曜石製が多く、これ以外では頁岩製が多い。礫石器は、磨製石斧、たたき石、すり石、石錘、砥石、台石で、磨製石斧は緑色泥岩、これ以外の多くは安山岩製である。石製品は凝灰岩製のものが多い。レキ(自然礫)は安山岩、ついで凝灰岩が多い。本遺跡の主體的な時期は縄文時代前期前半と考えられる。

(末光正卓)

(2) 豊野4遺跡の調査成果 (図63・64)

遺跡のある高台は、地山に凝灰岩質の礫層がみられ、また剥片石器の素材として欠かせない頁岩の原石が多くみられた。遺構は検出されなかったが、スクレイパーやたたき石などの石器・礫類が合わせて430点出土した(表29)。遺跡は台地のへりにあり、令和2(2020)年度の調査区南東側は、谷状地形となり大きく落ち込んでいる。平坦面での黒色土の発達は見られず、包含層としたⅡ層のうち、明瞭に黒色を呈しているのは谷地形部分に堆積した層のみである。また、落ち込み部分には、表土と黒色土の間に駒ヶ岳d火山灰と思われる堆積層が見られる箇所もあった(図31~33)。

(新家水奈)

表 1 遺構数一覧表

遺跡名	種別	記号	数	名称
共立 2 遺跡	土坑	P	6 基	P-1 ~ 6
	T ビット	T P	4 基	T P-1 ~ 4
	土器集中	P S	5 か所	P S-1 ~ 5
	フレイク集中	F C	2 か所	F C-1・2
	礫集中	S	1 か所	S-1
	旧石器	キ	1 か所	—
豊野 4 遺跡	—			—

表 2 遺物点数一覧表

遺跡名	出土地点 ／遺物種別	土器	石器	合計	備考
共立 2 遺跡	遺構	221	123	344	
	包含層	1,297	1,397	2,694	
	小計	1,518	1,520	3,038	
豊野 4 遺跡	遺構			0	
	包含層		430	430	
	小計	0	430	430	
合計		1,518	1,950	3,468	

Ⅱ章 遺跡の立地と周辺環境

1. 立地と環境 (図1・2・19)

(1) 長万部町の立地

北海道山越郡長万部町は渡島管内の最北端、黒松内低地帯の太平洋側に位置する。この低地帯は長万部町から黒松内町を経て寿都町までの帯状の範囲で、道南地域の北側の境界といわれる。内浦湾（噴火湾）に面する長万部町は、東側は胆振管内の虻田郡豊浦町、北側は後志管内の寿都郡黒松内町と島牧郡島牧村、西側は檜山管内の瀬棚郡今金町、南側を二海郡八雲町と接する。これらの行政区は、豊浦町とはJR室蘭本線小幌駅と礼文華峰で、黒松内町とは小幌海岸沿いの東西に長い山の連なりと、静狩峠（標高238m）から写万部山（一等三角点 499.1m）を経てJR函館本線旧麻谷駅付近までの山間部、同地点から黒松内岳の南側を西方向に続く山々である。島牧村と接する部分は狭く、町内最高峰の長万部岳（三等三角点 972.6m）の北側付近、最高標高819mの無名の頂部を含む山稜である。今金町とは、長万部岳、丸山（674.1m）、美利河峠（標高139m）、坊主山（544.1m）、ルコツ岳（532.1m）の頂の連なりで分かたれ、八雲町との境界はルコツ川である。

(2) 長万部町の環境

町内の大部分は山地が占め、山裾から海岸まで平坦地が広がり、長万部川・紋別川・国縫川などの大きな河川の流域や河口付近に集落や農地がみられる。長万部川と知来川の中・下流域では「蔵岱」付近から平坦地がみられ、「知来」、「双葉」、「美畑」、「栗岡」の集落がある。長万部川の河口付近には、「旭浜」と長万部中・高等学校が位置する中州状の地形が、直線の新流路と曲線的な旧河川により形成され、旧河川の右岸に市街地中心部が形成されている。市街地の背後は「富野」で、東京理科大学基礎工学部の全寮制の長万部キャンパスがある台地があり、そこから奥はまた平坦地が広がり、深い山間部は長万部公園付近から奥である。この辺りは比して平坦地が広く、山間部が海岸から遠いが、紋別川流域の「平里」・「中の沢」へと南側にいくにつれ海岸が近づき、平坦地は狭くなる。国縫川が流れる「国縫」ではやや広くなり、さらに「豊野」・「豊津」では海岸に近く狭い。

一方、長万部川河口から北東方向は、山地がさらに奥に位置し、静狩原野とよばれる、町内で最も広大な平坦地である。西側は「栄原」、「共立」で、東側は「静狩」である。静狩の集落は内浦湾の最奥部で、東側には「静狩峠」がある山間部が迫り、海岸線は「小幌海岸」と呼ばれる崖地形の景勝地が豊浦町まで続く。長万部町内の海岸は、この小幌海岸以外は遠浅の砂浜である。

(3) 長万部町の交通

<国道>

長万部川河口近くの「旭浜交差点」で、2本の国道が交わる。函館が起点の国道5号は森町付近から長万部市街地まで海岸線沿いを走り、この交差点から左に折れて、内陸部の黒松内方向に向かい、ニセコ、倶知安の山間部を経て日本海側に出て、余市、小樽を経由して札幌に至る。明治6（1873）年、札幌本道と呼ばれる函館－札幌間を結ぶ長距離馬車道が整備されたのが始まりである。旭浜交差点から内浦湾沿いに走るの国道37号で、同交差点を起点に伊達市を経て室蘭市までつながる。長万部町内の海岸沿いにつながる国道5・37号のうち、「国縫交差点」から虻田郡洞爺湖町の清水交差点

までは国道230号との重複区間である。国道230号線は明治3（1870）年、札幌と伊達を結ぶ本願寺道路を起源とし、虻田、喜茂別、倶知安、定山渓、中山峠などを通る路線として施行されてきた。昭和57（1982）年山越郡長万部町～瀬棚郡北檜山町（当時）の区間を編入し、札幌～瀬棚郡北檜山町（当時）を結ぶ一般国道230号線として指定施行された。起点は札幌市内で、国縫から日本海側方向に分岐し、美利河峠を越え今金町を経て現在の久遠郡せたな町に至る。

<自動車道>

長万部・国縫を通る北海道縦貫自動車道（道央自動車道）は、昭和46（1971）年の北広島インターチェンジ（以下、IC）～千歳IC間開通から始まった。長万部町内の山間部を走っており、平成9（1997）年に長万部IC～虻田洞爺湖IC（旧）が開通し、この区間に静狩パーキングエリア（以下、PA）がある。その後の平成13（2001）年に国縫IC～長万部IC、平成18（2006）年に国縫IC～八雲ICが開通し、長万部町内の高速自動車道は全区間がつながった。

<鉄道>

町内の鉄道主要駅は、JR北海道の函館本線の長万部駅で、室蘭本線の起点駅でもある。函館～長万部間は一部区間を除いて既ね複線で、北海道新幹線の開業に伴い電化された函館～新函館北斗間以外は非電化区間である。

函館からの鉄道は森町付近から内浦湾沿いを走り、長万部を出ると、函館本線は二セコ、倶知安の山間部を越えて、日本海側に出て余市、小樽を経て札幌へ至るルートで、「山線」と呼ばれる。山線は明治36（1903）年に森～熱帯間が部分開通し、長万部・国縫・二股に停車場が設置された。現在、長万部～小樽までは非電化区間の単線で地方ローカル線の雰囲気がある。同本線の町内の駅は「国縫」、「中の沢」、「二股」で、平成29（2017）年には、最も函館寄りの北豊津駅が北豊津信号所になり、寿都郡黒松内町との行政界付近の蔵谷駅が廃止された。

大正12（1923）年に長輪線が長万部駅～静狩駅間で開通する。長万部駅から内浦湾沿いを走る「海線」で、のちの室蘭本線である。長万部を起点とする長輪線は昭和3（1928）年に全線開業する。現在、洞爺～伊達紋別間の一部区間を除き、東室蘭まで複線で非電化である。現行の気動車特急「北斗」（キハ261・281系）や「レッドベア」の愛称で知られるDF200形がけん引する貨物列車は、全てこの室蘭本線を走行する。長万部の次は旭浜駅であったが、平成18（2006）年に廃止された。その次の静狩駅を出て、海岸の山間部を連続するトンネルで抜けると、鉄道でしか訪れることができない秘境駅として全国的に知られている小幌駅で、ここから先は虻田郡豊浦町である。

また昭和62（1987）年の廃止まで、函館本線国縫駅から分岐し、今金町を経由して日本海側の久遠郡せたな町までをつなぐ瀬棚線が走っていた。この線の町内の駅は、国縫駅から約5km付近にあった「茶屋川」である。瀬棚線の工事は大正15（1926）年から始まり、国縫には多くの労働者が出入りした。長輪線開通の翌年、昭和4（1929）年12月13日、函館本線から分岐する形で国縫～花石間の国有鉄道瀬棚線が新規開業した。昭和5（1930）年には花石～今金間が開通、昭和7（1932）年11月1日に今金～瀬棚間が延伸開業し、国縫駅～瀬棚駅間48.4kmが全線開通した。瀬棚線のすべての列車は長万部駅から発着していた。一時急行列車も運行された瀬棚線は、国鉄民営化の流れとともに廃止された。

北海道新幹線が札幌まで開業すると、札幌からの現行の特急「北斗」は長万部駅発着の運行になるといわれる。二つの主要線路が交わる長万部駅は、国鉄時代の昭和40年代半ば頃まで、蒸気機関車を運行するための長万部機関区があった。現在、駅ホームの山側に線路が複数本あり、広い敷地が残っている。

2. 遺跡の周辺

(1) 共立2遺跡 共立・静狩地区 (図1・3・4)

共立2遺跡はJR北海道の長万部駅から北北東に直線距離で約5km、後背の山から続く裾野の標高39m付近に位置する。近辺で最も高い頂は標高499.1mの写万部山で、町名の由来となった山である。この山の南東側に「オタモイ山」(三等三角点「幌内3」272.3m)、西側には標高474.0mの三等三角点「郷猿家」(サトテンカ山)がある。これら山間部の南西～南側の裾部は、標高100m付近より低い斜面部は等高線が幅広く比してゆるやかな傾斜で、ここに石山川、美畑川、長有沢川、栗の本岱川(キュウシ沢川)、キュウシバツトリ川、川瀬川(ボクサタナイ川)、ナイベコシナイ川、オタモイ川が流れる。キュウシバツトリ川より西側にある沢は、長万部川の左岸とこれに沿う小河川である栄川に流れ、川瀬川、ナイベコシナイ川、オタモイ川は緩やかな斜面下の低地に流れ込む。

遺跡はこの比してゆるやかな斜面の下方の標高39mの地点に位置し、北側は旧共立小学校(平成21(2009)年閉校)、道路を挟んだ東側には共立(熊野)神社がある。北側は道央自動車道が近く、静狩PAの函館方向は共立遺跡(北海道教育委員会登録番号B-17-19、以下末尾番号を記す)で、平成11(1999)年度に長万部町教育委員会により緊急調査され、Tビッドがみつかり、縄文時代早期の遺物が出土した。両遺跡は南方向へ伸びる細長い段丘上に位置し、かつては共立遺跡であったが、今回の調査範囲は共立2遺跡として別に登録された(図4)。遺跡が位置する段丘の西側の裾部には無名の沢が流れている。内浦湾の眺望がよく、駒ヶ岳と室蘭白鳥大橋がみえる。

(2) 豊野4遺跡 国縫・豊野地区 (図2・5～13・21・22・63)

<周辺の地形>

国縫地区は、長万部町内の南部、国縫川河口に位置する集落で、豊野地区と隣接する。両地区は、国縫川、茂訓縫川、ワルイ川、ポロナイ川などの大小の河川により開析された河岸段丘が発達し、段丘堆積物が低位段丘に立地する。なお、海岸に平行して形成される海岸平野部は、各河川の氾濫堆積物(砂・礫・粘土等)や縄文海進時には海面下にあった低地帯が湿原化した泥炭地により構成されている。豊野遺跡群のある台地(瀬棚層)の標高は20～30mである。豊野4遺跡に最も近い国縫川は、流路面積49.4km²、流路延長14.4kmの二級河川である。上流には平成4(1992)年に発見された「茶屋川の滝」がある。

豊野地区では現在6か所の「豊野遺跡」が指定されている(6・8・15・33・34)。今回調査した豊野4遺跡は、JR函館本線国縫駅から南西方向に直線距離約700mに位置する。三等三角点「茂国縫」(117.3m)の頂部から北北東に伸びる段丘の標高20m付近に立地し、西側は山地が広がる。当該台地上全体が遺跡として指定されている(北海道教育委員会「北の遺跡案内」)。今年度の豊野4遺跡の調査区は、瀬棚層と海岸・河岸段丘堆積物(砂礫層)により形成された台地の北側の縁に位置する。台地は北方向に緩やかに傾斜し、また調査区南東側は深く落ち込む崖状になっている(図63)。遺跡の本体は、より標高の高い台地の南側であると思われる。口絵4の空中写真は昭和51(1976)年に撮影されたものであるが、当時は豊野4遺跡が立地する台地全体が伐採され、耕作地として利用されていたことがわかる。令和2(2020)年の調査時の現状は台地上全体に樹木が生え、林野となっている。

遺跡の西側の山間部を流れ出る国縫川沿いに続く国道230号を行くと、美利河峠を経て瀬棚郡今金町の美利河地区に至り、美利河ダムが堰き止めるピリカ湖がある。このダム建設に伴い昭和56(1981)年度に美利河2砂金(採掘)跡(登録番号C-10-15)、昭和58(1983)・59(1984)年度には旧石器

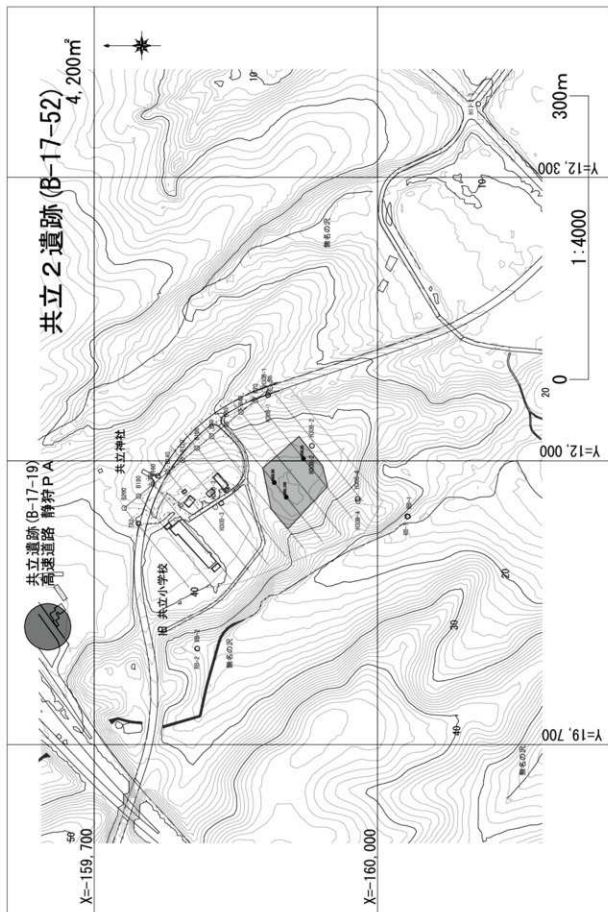


図3 共立2遺跡 現況図(工事図面)

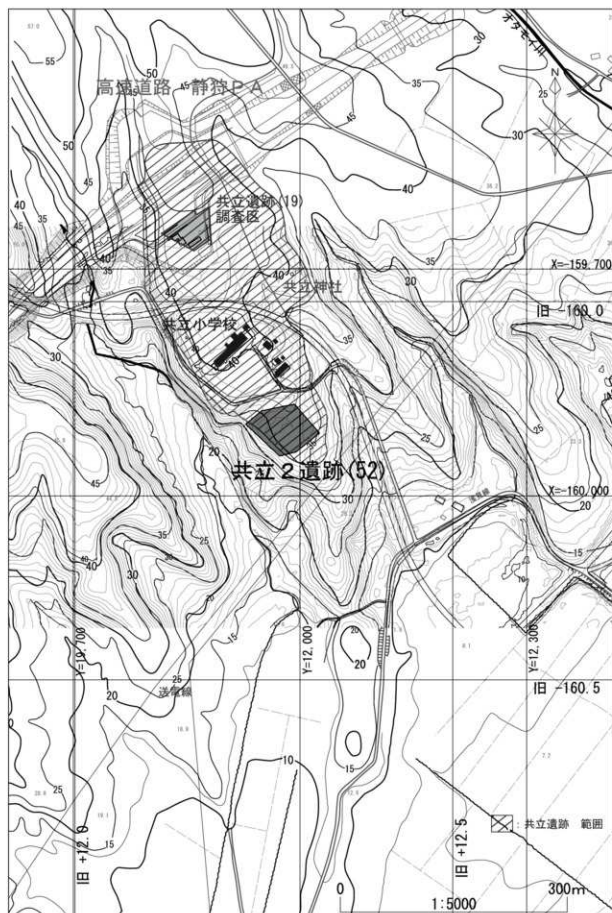


図4 共立遺跡・共立2遺跡 周辺の地形合成図

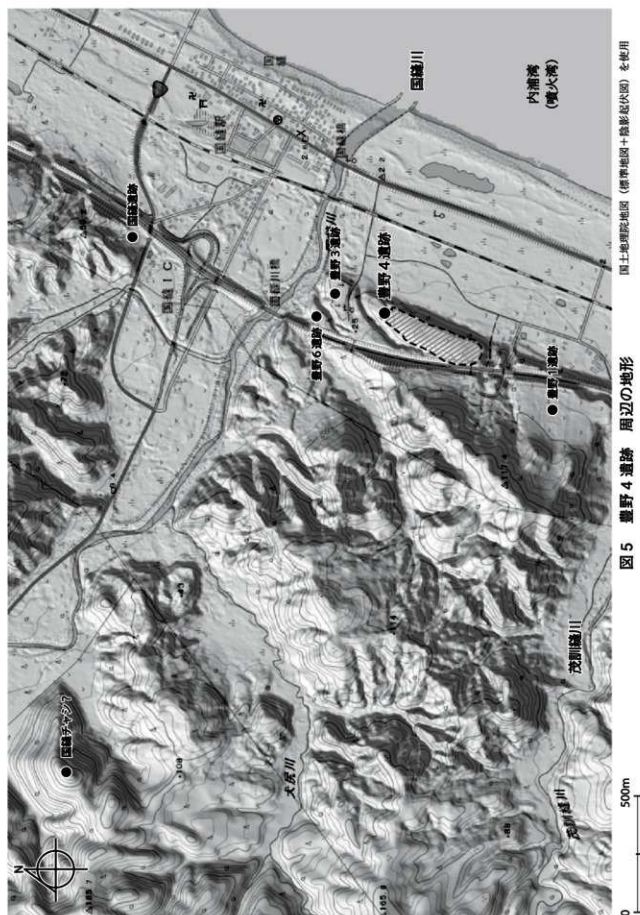


図5 豊野4道跡 周辺の地形



図6 豊野4遺跡 現況図

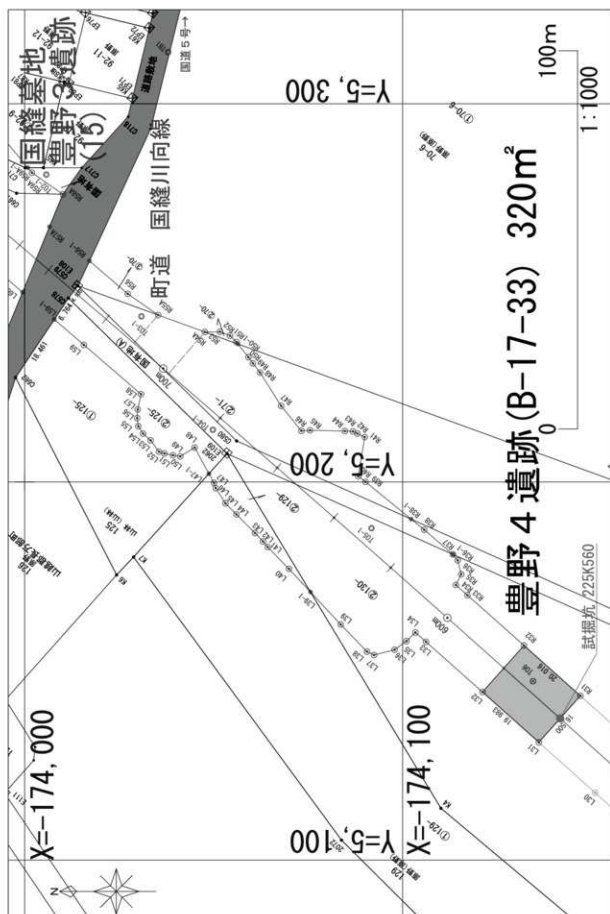


図7 豊野4遺跡 現況図(工事図面)

時代の美利河 1 遺跡 (C-10-13)、昭和63 (1988) 年度に美利河 1 砂金 (採掘) 跡 (C-10-14) の埋蔵文化財を調査した (北埋調報23・59)。国縫川の左岸の最標高点は三等三角点「中の沢」(352.5m) で、花岡地区に流れ込むワルイ川とボンワルイ川の源流部がある。右岸には標高185.6mの三等三角点「調縫」の頂があり、これから東に続く尾根上に国縫チャシ (7) がある。豊野 4 遺跡が立地する段丘の北側端の国縫墓地は、豊野 3 遺跡 (15) で、ここからみえる遺央自動車道上に、平成11 (1999) 年度に当センターが調査した豊野 6 遺跡 (40) がある。国縫川の対岸には坊主山 (標高125m) とその中腹に四等三角点「円通寺」(標高59.1m) があり、後者付近は国縫遺跡 (32) である。

<駒ヶ岳起源の火山灰>

豊野 4 遺跡では、共立 2 遺跡ではみられなかった駒ヶ岳起源の火山灰が確認された。西暦1640年に降下した駒ヶ岳 d 火山灰 (Ko-d) と、約6,500~6,600年前に降下した駒ヶ岳 g 火山灰 (Ko-g) である。Ko-d が共立 2 遺跡に降下していないとすれば、豊野地区と共立地区の間に、降下範囲の北限があると考えられる (図8)。またKo-g が顕著に堆積する範囲は駒ヶ岳周辺に限られるが、層厚0.5cmの飛散範囲は道南から広く道東にまで及ぶ (図9)。

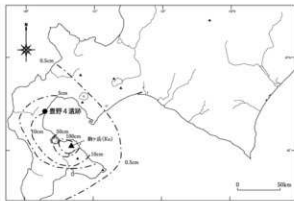


図8 駒ヶ岳d火山灰 (Ko-d) 分布図

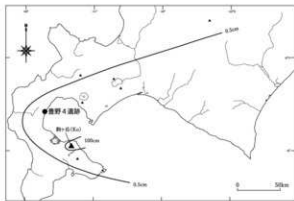


図9 駒ヶ岳g火山灰 (Ko-g) 分布図

<硬質頁岩を含む地質>

図10の地質図中では豊野 4 遺跡地点は砂岩層、砂礫層と重なっているが、調査における地山は凝灰岩を主体とし、硬質頁岩・チャート礫を多く含んでいた。これらは石器の材料となりえる強度を十分に持つ。遺跡のある台地より標高の高い西側の「Ym (八雲)」層が、風化・浸食により流出・堆積したものと思われる。硬質頁岩と凝灰岩からなる八雲層は、国縫川を境に、北側では内陸側に向かって分布しており、豊野 4 遺跡周辺は良質な頁岩素材の獲得地であった可能性がある。

<石油資源>

国縫墓地の駐車場から豊野 4 遺跡の調査区へ向かう山道の途中、少量ではあるが、水たまりに常に石油が染み出て浮いている箇所があった (図11)。今回の調査で、遺跡内からアスファルト等、石油資源を利用したと思われる痕跡はみつからなかったが、長万部町内では昭和30 (1955) 年に天然ガス・温泉の掘削・採掘がおこなわれ、昭和32 (1957) 年には天然ガス・温泉とともに原油が湧出している。天然ガスは現在も町内の都市ガス原料として利用されている。豊富な天然鉱物資源の存在はこの地域の特徴の一つであろう。

<他の鉱物資源>

調縫層・八雲層・黒松内層・瀬棚層 (古→新) の4層が観察できる長万部町国縫〜今金町美利河一帯は、西南北海道における新第三系層序の模式地といわれる。先に述べた天然ガスのほか、この地域に胚胎する



図10 豊野4遺跡 周辺の地質

鉱物資源として、ゼオライト、砂金、メノウ（地元では油メノウと呼ばれる）、砂鉄、マンガンなどがある。

ゼオライトは、緑色凝灰岩（グリーン・タフ）や凝灰角礫岩に多く含まれ、ギリシャ語で「沸騰する石」という意味で、「沸石」とも呼ばれる。加熱すると水分を放出し、また、逆に水分や陽イオンを吸着する特徴をもち、農業面では土壌改良剤や肥効剤、工業面では脱臭剤や乾燥剤・硬水軟化剤・放射性物質の吸着材、環境衛生面では脱臭剤・防臭剤・浄化剤などとして広く利用されている。

この一帯の天然のゼオライトは、上国縫川に訓縫層上部の緑色凝灰岩が広く分布しており（図10）、訓縫層中には多量のゼオライトが含まれている。資源的価値は高く、昭和41（1966）年から採掘が行われ、現在でも採掘されている。

砂金は国縫川から直接採取されたものではないが、17世紀に利別川上流の砂金場への交通路として国縫川が利用されていたことから、当時「クヌイ砂金地」と呼ばれていた。実際に砂金採掘が行われたのは現在の今金町美利河地区で、一部の砂金採掘跡が遺跡（美利河1砂金採掘跡、美利河2砂金採掘跡）として当センターにより調査されている（北埋調報59）。調査は美利河ダム建設工事に伴い、昭和56（1981）年と昭和63（1985）年の2回にわたり行われたもので、測量調査を主として採掘地の範囲や当時の現状が記録されている。

メノウは、上国縫地域や茶屋川、今金町花石が古くからの産地として知られてきた。花石地方のメノウは明治4（1871）年頃から工芸品用として使用されはじめ、上国縫・茶屋川のもはや遅れて採掘が始まり、主に山梨県甲府に出荷されたとのことである。年に40～50トンも採掘された年もあり、乱掘によって現在の賦存量はわずかとなっている。国縫川・茂訓縫川の下流域では、上流から運ばれてきたメノウの原石が採取できる。

砂鉄は、国縫～八雲～森を経て鹿部に至る海岸線沿いの平野部に濃集し、国縫川の名前の由来の一説とされるほど（後述）、内浦湾岸は日本有数の砂鉄鉱床賦存地域として古くから知られていた。このため明治末期より開発され続けた砂鉄鉱床は、第二次世界大戦後もその稼行は続き、一時は40社以上の採掘業者が携わり、昭和40年代に最盛期を迎えたが、現在では稼行、採鉱ともに行われていない。

近隣のマンガン鉱として有名なのは、今金町美利河地区で明治から昭和30年代まで稼働していたマンガン鉱山である。ピリカ型マンガン鉱床として知られ、大規模な採掘が行われていた。一方長万部町内では旧瀬棚線茶屋川駅北西約3kmの位置に茶屋川鉱山があり、マンガンを対象とする坑道採鉱が行われたが、稼行できる量が確保できず、廃山となったようである。

＜豊野・国縫周辺の歴史＞

●クヌイ砂金地と隠れキリシタン

遺跡のそばを流れる国縫川は寛文9（1669）年にアイヌが松前藩に対して蜂起した「シャクシャインの戦い」の地とされ、この川を挟み両軍が対峙した場所として知られている。平成28（2016）年、



図11 豊野4遺跡周辺にみられる石油のしみ出し

旧国縫小学校敷地内に「シャクシャイン古戦場跡碑」が建立されている(図12)。

長万部町史によれば、『津軽一統志(1731年刊)』にはシャクシャインの戦いのことが詳しくつづられており、また「国縫の浜に小屋が四〇ばかりあり、金山は三、四里ばかりも奥にあるということである・・」「国縫から金山の小屋までは馬に乗っても行けるが、金山からセタナイ(瀬棚)に行くには川を小舟で行く、川



図12 旧国縫小学校敷地内に立つシャクシャイン古戦場碑

水の多少によって一日かかることも一日半かかることもある・・」など、長万部や国縫周辺の交通路についての記述がある。1600年初めころから、松前藩の奨励により利別川上流の金山川で砂金採掘が盛んとなり、国縫は砂金地に向かう入り口として交通の要所「クンスイ砂金地」と呼ばれた。当時国縫には採掘人夫が多く集まっていたため、シャクシャインの戦いの際、松前藩側には、兵士として多くの砂金掘りの飯夫たちがかり出されたという。『津軽一統誌』には雑兵180人余りの他、「金掘三百四、五拾人はまたくぬいえ参候事」と記されている。

現地調査の折、国縫在住の70代の方から、「昔、国縫川上流に洞窟があり、隠れキリシタンが身を隠していた、と先祖から伝わっている」との話を聞いたが、蝦夷地に渡って来た隠れキリシタン関係の記事として、松前町の公式ホームページに以下の話が載っていたので、かいつまんで紹介する。慶長18(1613)年に発令されたキリシタン宗教の禁教令により、京都を中心にキリシタン弾圧が厳しくなり、棄教しない信者は迫害され北東北まで流刑された。その後隠れキリシタンは津軽藩からも弾圧されるようになった。東北地方の大飢饉を機に、元和3(1617)年には、3～5万人の砂金掘りが蝦夷地へ渡ったと言われているが、この砂金掘りのほとんどが、東北からの隠れキリシタンであったという(松前町HPより抜粋)。

当時、利別川の砂金地に先行して道南の知内川の砂金地の採掘がおこなわれていた。本土でのキリシタン禁止令による迫害から逃れて蝦夷地へ渡った多くの人が、蝦夷地の砂金山での労働に従事していたため、幾度か外国人宣教師が布教のために現地を訪れ、労働者たちを慰問したことが、彼らの残した見聞録に記されている(北埋調報59)。そこに当時の砂金山の様子が描かれている。あくまでも知内川周辺の砂金地の記録と考えられるが、国縫川上流に近い利別川にも砂金地があったことは有名であったはずなので、ここにも隠れキリシタンが連れてこられたと考えられなくもない。そうだとすると、その後この隠れキリシタンたちが、シャクシャインの戦いで兵士として松前藩側にかり出された可能性もある。シャクシャインの戦い後、利別川砂金地での大規模な砂金採掘は衰退することになる(北埋調報59)。

●古地図の中のクンスイ

天明5(1785)年に作成された林子平の『蝦夷國全圖』(図13)には、クンスイ(現国縫)、シツカリ(現静狩)、ヘンベ(現意浦)、アフタ(現虻田)、ウス(現有珠)などの地名はあるが、オシヤマンベ(ヲシヤマンベ)の地名はない。内浦湾と思われる沖内には「この入海を内浦と云ふ」、「砂金出」、「オットセイ多し」の記述がみられる。長万部町史によれば、オットセイは当時長万部のアイヌ

の人々の徳川幕府への献上品として、最も重要な特産品であった。明治23(1890)年ごろまでは、毎年150頭前後を捕獲していたが、明治30年代になると、年1〜2頭しか捕獲されなくなったとのことである。また、有珠善光寺が現在の長万部付近に書かれているのは、寛文3(1663)年の有珠の噴火により仮寺として避難していたことを示すものと思われる。

(3) 地名について(表3)

町名の「長万部」はアイヌ語起源である。雪解けの季節に、写万部山の山体の残雪の形が魚の鱗(カレイ)の形状を表し、その頃が漁をする絶好の時期であるとの言い伝えに由来するといわれる。しかし、長万部川の旧河道から「オ・



図13 『蝦夷国 全圖』に描かれた内浦湾

シャムム・ベツ」で「河尻・横になる・川」と解され、これが町名の由来と考える。河尻が横になるとは、河口近くで川が海岸と平行に流れる状態である。旧地形図をみると、町内には、かつて海岸近くで大きく屈曲し海と平行に流れていた国縫川、茂調縫川、幌内川(豊津地区)等がある。これは海岸砂丘の発達に関係すると考えられる。郡名の「山越」(ヤマコシ・ヤムコシ)はアイヌ語での解釈もみられるが、おそらく和名で山間部を越えて日本海側に至る交通路がある場所に付せられたと考えられる。具体的なルートは、八雲と熊石間、国縫とせたな間、長万部と寿都間である。

遺跡名の字名はともに和名で、漢字がもつ意味として付せられたのであろう。「共立」、「豊野」ともに昭和15(1940)年からの行政字名である。「共立」は静狩原野の「九号農道」より西側部分の地区名で、「豊野」は国縫川の1.5kmほど南を流れる茂調縫川周辺をいい、国縫川の右岸〜ボンボロナイ川の間である。これらは昭和14(1939)年の字名地番改正で名付けられた(表3)。この時の字名地番改正で、町内に99あった字名は、20に整理統合され、各旧行政区は新字名となる。

共立の旧行政区名は「牧定内」(ボクサタナイ)で、「ボクサタナイ」、「ナイベコシナイ」、「ホロナイ」、「ホロナイ1〜8線」等が整理された。これらはこの地区を流れる河川の名称で、ボクサタナイは現在の川瀬川、ホロナイは現在のオタモイ川で、1〜8線は道の名称であろう。現在も「幌内原野縦貫線」という町道名に旧河川名ホロナイが残っている。

豊野の旧行政区は「茂調縫」、「モクンネ」で、「調縫川向」と「モクンヌイ」等が整理された。遺跡へ至る町道は「国縫川向線」である。

クンヌイ(国縫)の地名の由来は諸説あるが、「クンヌイ」はアイヌ語で「クンネ・ナイ」。「黒い川」「黒いもの」という意味だという。松浦武四郎の蝦夷日記には、黒岩(現八雲町)から2kmほどのロクツ川から3kmほどのクンヌイまで、砂鉄の浜である、と書かれ、川が「黒い」理由は「砂鉄」によるものとの見方もあるようである。今回の調査時に聞いた地元漁業者の話では、今でも、鉄分を多く含んだ山水の影響で、近隣で獲れる北寄貝の殻の色は、苫小牧市や北斗市産のものに比べて黒味がかっているそうである。一方、永田方正の「北海道蝦夷語地名解(初版1891年)」では、地元に伝わる伝承をもとにした解釈がなされている。この伝承は更科源蔵の「アイヌ伝説集(1955年)」にも紹介されている。昔国縫川上流の山奥に洞窟があり、ここを隠れ家としていたフリカムイという伝説

上の巨鳥が洞窟から飛び出し、その翼を凶暴な羽音とともに雨雲のように天に広げ、強風を巻き起こし、自然を荒らし、村人に災害を与えた。この描写は台風そのものであるが、この時空も川も暗くなったため、「クンネ(暗い)・ナイ(川)」と呼ばれている、としている。また、松浦武四郎の「東西蝦夷山川地理取調圖」(1859)には、ホンクンヌイやモクンヌイの地名もある。国縫は「調縫」とも書き、国縫川から1kmほど南には現在の茂調縫川がある。武四郎の山川取調図では、モクンヌイが現国縫川、ホンクンヌイが現茂調縫川のあたりに記されているが、実際は、クンヌイが現国縫、モクンヌイ(ムクンヌイ)が現豊野のあたりを指す。2002年出版の『道南の自然を歩く』では、「この川をさかのぼると後志利別川上流域に出るが、途中の河原に黒色の岩盤があるか、あるいはマンガン鉱石の転石があることを示したものか。」と地質学の観点から推測している。

表3 長万部村 字名地番改正表 (昭和14年)

新字名	旧行政区	筆数	田	字	名
豊津	六津	一四五	幌内、ロクツ、ルツツ、調縫古ロナイ、ホロナイ一部		
豊野	茂調縫	一七八	ルコツ、ロクツ一部、調縫一部、調縫川向、モクンヌイ		
国縫	調縫	二〇五	イヌヌシ、調縫イヌヌシ、クンヌイ、調縫、調縫豊野一部、ボンワルイ、ワルイ一部、コエトエ		
茶原川	菅野	二〇九	調縫菅野、調縫バンケベツヌ、茶原川、上国縫一線、上国縫一線、調縫一部		
花岡	菅野	一八〇	コエトイ、ワルイ、ボンワルイ、ビウチ、ビウチ、ビウツ、上紋別		
中の沢	中の沢	一三九	中ノ沢、調縫一部、紋別一部		
平里	紋別	二五七	紋別、モンベツ、佐渡ヶ島、紋別佐渡ヶ島、東紋別中島、西紋別、紋別北一線、紋別南一線		
富野	学林	二四四	紋別基線、フラノベツ一部、サバルベツ一部		
大浜	長万部	六五	フラノベツ、サバルベツ、ボンオバルベツ、炭蔵、坊主山、鞍山、スミカマ		
旭浜	川向	四三八	川尻、紋別、フラノベツ、長万部一部		
栄原	中川原	一七八	中山、坊主山一部、山下、南部陣屋、土場、栗ノ木併一部、長万部		
共立	牧定内	三七二	川向、前浜、キリマ、トイハシナケ、長万部一部、牧定内一部		
栗岡	栗ノ木併	二〇九	川向一部、栗ノ木併一部、筑登山、ボクサタナイ一部、上ノ追込、下ノ追込、柳原、トベトマナイ、		
美畑	ドツタ	一七一	中川原、バンケドツタ一部		
双葉	二股	二〇六	栗ノ木併、栗ノ木併一線、四蔵、川向一部、場所街道、岩蔵一部、ボンサバルベツ一部		
知来	知来	七	ドツタ、バンケドツタ		
大峯	上長万部	二〇六	知来、チライ		
蔵谷	蔵谷	二六八	知来一部、チライ一部、蔵谷、トマベツ、トマムナイ		
静狩	静狩	四四〇	静狩、静刈、シヅカリ、静狩原野、ホロナイ一部		

3. 旧地形図の読図

(1) 松浦武四郎の取調圖の地名 (図14)

図14は、江戸時代末期、安政2(1855)年に北海道を探検した松浦武四郎が記録した「東西蝦夷山川地理取調圖 四」の長万部の部分である。海岸沿いの地名を現在の地物に特定する。

「ロクツ」：現在のロクツ川ではなく、音が似ていることと次に述べる「フイトシナイ」が現在のロクツ川と思われるので、ロクツは八雲町との行政界を流れる「ルコツ川」と考えられる。

「フイトシナイ」：アイヌ語「フイ・トシ・ナイ」で「穴(沼)があり・縄のように曲がる・川」と解す。現在のルコツ川とロクツ川は、北側にあるボロナイ川(幌内川)に比べて蛇行がみられ、さらに位置関係から、北側を流れる現在のロクツ川と考えられる。

「ホロナイ」：ボロナイ川(幌内川)と思われ、海岸で合流するボンボロナイ川も含むかもしれない。

「ホンクンヌイ」：現在の茂調縫川と判断される。

「クンヌイ」：現在の国縫川で、この上流に「ヒリカベツ」(ピリカベツ川)とある。



図14 東西蝦夷山川地理取調圖 四 (長万部町の部分)

「モクンスイ」：茂調縫川の河口は、昭和初期（戦前）頃まで国縫川近くの北側にあった（図17・18）ので、かつての河口付近に名前が残ったと推測する。

「コイトイ」：アイヌ語で波・崩れるの意味である。河川名なら、相対的な位置から現在のボンワル川であろう。

「ワルイ」：現在のワルイ川である。

「モヘツ」：現在の紋別川である。

「ヨシヤマンベ」：現在の長万部川である。

「フィタルエサン」：フィ・タル・エサンで「こぶ山のような岬」と解す。静狩海岸に岬はないが、現在の豊浦町礼文華の標高4126mの幌扶斯山（ホロブス山）が内浦湾に突き出す「イコリ岬」が眺望できる場所のことと推測する。

「ヨリキツカ」・「子ツニシヤ」：ともに次項で詳述する。

「ニクルトル」：アイヌ語「ニクル・ウトル」で「林・間」で、明治年間の地図（図15）では海岸沿いに林がみられ、現在は「共立のイチイ」が保存されている（後述）。

「シツカリ」：アイヌ語「シツ・トカリ」で「山・手前」で、静狩峠のある高い山の手前の静狩集落または静狩川である。

また、静狩原野の内陸部には「チフトラシ岳」と「ヲタニコロ」と二つの山が描かれている。この位置から推測して、チフトラシ岳は写万部山、ヲタニコロはオタモイ山と考えられ、後者は「オタ」の音が共通する。現在の町名である「オシャマンベ」は、この取調図では長万部川の河川名にあり、アイヌの伝説で神様が釣った大きなカレイをまつたとされる写万部山にはこの名称がない。これだけから判断すると、長万部の町名は河口が海岸に平行して流れる長万部川に由来すると考えられる。

さらに、主な内陸部の地名について解説する。

・国縫川流域：下流部の支流は明治年間の地形図（図17）と照合した（本章本節4項）。

「サヤ」：現在の茶屋川であろう。

・国縫川支流？

「シノマンクスイ」：アイヌ語で、山奥の国縫川あるいはその支流と考えられる。

「ホリカクスイ」：アイヌ語で、屈曲する国縫川あるいはその支流と考えられる。

・長万部川流域、漢字表記の地名「二股」からの相対的な位置で考える

「二股」：和名で、現在のJ R函館本線二股駅及び「双葉」集落付近である。

右岸

「ハンケトツタ」：現在の土津田川であろう。

「ヘンケトツタ」：現在の突田川であろう。

「イヌ・シナイ」：現在のイヌヌシナイ川である。

「ナムナイ」：現在のメムナイ川である。

「シノマンヲシヤマンベ」：山奥の長万部川である。

上流

「チライヤツ」：現在の知来川である。

「ワラビタイ」：J R函館本線旧麻岱駅付近である。

・黒松内町

「ウタサイ」：現在の歌才地区である。

「クロマトマナイ」：現在の黒松内市街地付近である。

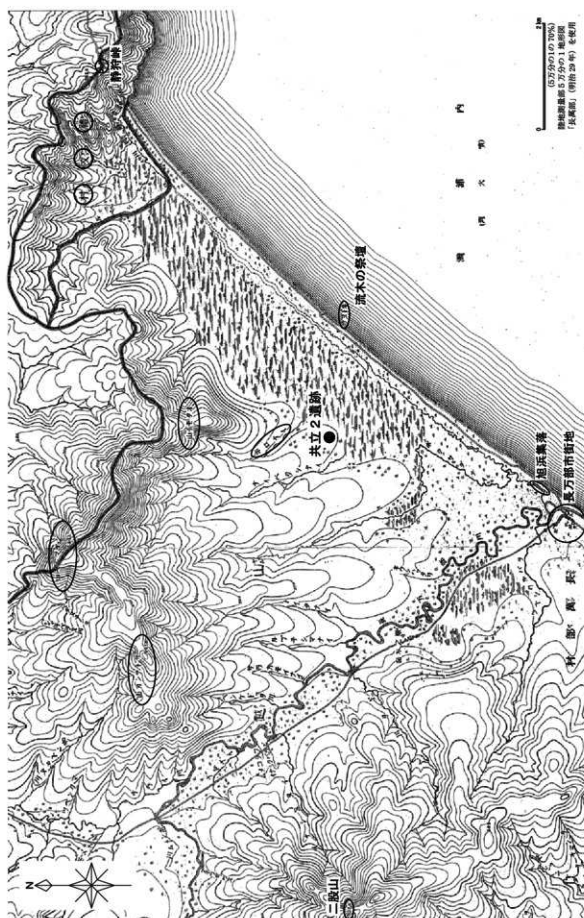


図15 共立2遺跡 周辺の状況(1) 明治

(2) 明治年間の共立2遺跡の周辺 (図15)

図15は明治29 (1896) 年の五万分の一地形図「長萬部」である。共立2遺跡はホロナイとナイベクシナイの間の標高40m付近に立地する。山間部はオタモイ山、シヤマンベ山 (541.1m)、サトテンカ山 (461.6m 三等三角点「郷狼家」) である。山の南側裾部のゆるやかな斜面を流れる河川は、オタモイ山のすぐ西側の「ホロナイ」は現在のオタモイ川、その西側は「ナイベク (コ) シナイ」、平坦な低地で大きく屈曲する「ボクサダナイ」は川瀬川である。これら以外は長万部川の左岸に流れ込む支流で、位置から現在の河川名を考える。「キウシハツタリ」は不明で、「トイタナイ」はキウシハツタリ川、「ルプ子シマナイ」は長有沢川、「サラカモイナイ」は美畑川、「パンケドック川」は石山川である。長万部川の右岸の「ヨバルウシベツ」はオバルベツ川、「ドック」は土津田川、「イヌヌシナイ」は現在も同じ名称で、「ナムナイ」はメムナイ川である。

地図記号から植生をみると、山間部斜面の一番低い裾部は広葉樹林で、低位の平坦部は、長万部川とボクサダナイの間が草地で、ここ以外は湿地が広がっていた。この低湿地には後背の山から多くの沢が流れ込むが、海に流れ出る河口部は長万部川と静狩川以外にみられず、海岸沿いの流れと道が平行する。この部分は海岸砂丘があり標高が高かったと考えられる。その名残を伝えるものに、航行の目印に利用されたといわれる樹齢300年の木が、現在のオタモイ川河口の左岸に「共立のイチイ」として保存されている。また海岸の中央付近に「ネドヌサ」と記されている。これはアイヌ語の「ネツ・ヌサ」で「流木の・祭壇」と解され、アイヌが信仰していた場所である。これについて、江戸時代の紀行文家、菅江真澄が長万部付近を旅した寛政3 (1791) 年6月7日の紀行文に記録がある。「流木をたかく積みあげたところがあり、シモヤ (和人) はこれを寄木塚といい、アキノ (アイヌ) はこれをネツノシヤという。むかしカヤへ (茅部) の湖水に蛟竜という神蛇のぬしがつねにすんでいて、ときには海をわたって、この浜にきてわだかまっていたので、行きかう人もメノコ、ヘカチ (女子供ら) はおそろしがつて、このあたりを舟にのって通ることさえしなかった。それをアキノたちはたいへん心配して、木幣をささげ、カムキノミ (神を祀って酒宴をすること) して、「オヤヲ、いまからここにけっして出でまし給うな。身をかくしてくださる料として、ここを行きかうもの、メノコ、ヘカチに至るまでみな、よせる波の浮木をひろい積み奉ることにしよう。オヤヲ、なにとぞ荒ぶる心を和 (なご) めて鎮まり給え。またアキノらのコタンを護り給え」と、大ぜい居ならんで、手をすり、レキ (ひげ) をなでて供物をささげたところ、オヤヲをそれからここにいますことが絶えてなくなったとか。この寄木塚は、みずおろち (水の神蛇) の住家であるという。海の荒れる日は、寄木はすっかり波にさらわれるが、なががつくと、またまたのように流木が山をなすといわれている (『えぞでのふり』『菅江真澄遊覧記』2 231・232頁)。

また、前項で述べた松浦武四郎の取調圖にある「子ツニシヤ」と「ヨリキツカ」は、「子 (ネ) ツニシヤ」=菅江真澄の「ネツノシヤ」=明治の地形図の「ネドヌサ」で、「ヨリキツカ」の漢字は「寄木塚」で、ネドヌサの和名である。

すなわち、「ネドヌサ」とは、海岸に自然に生じた流木の集中にアイヌの伝説が加わり、信仰の対象になった場所である。静狩海岸のほぼ中央には、自然に流木が多く集まる場所がある、そこに自然と蛇が住み着いた。蛇が姿を現すとアイヌの女性や子供はこわがったので、徒歩はいうまでもなく舟で近くを通ることもしなくなった。畏怖の念からアイヌ住民はこの蛇を神格化し、この流木が集まる場所を祀ることにした。ここにいる蛇は、噴火湾の向こう側の砂原町から海を渡って遊びにやってきた「蛟竜」で、これら流木の集まりは蛇の神聖な居場所 (住処) である。イナウをささげてカムイノミをして、蛇が姿を現さないこと、コタンを守ってくれるよう祈りを捧げた。ここを通るみんなが流

木を捧げることを約束した。以上から、流木（ネド）の祭壇（ヌサ）と名付けられ、信仰の場所になった。また海が荒れた時には、これらの木はすべて流されてしまうが、天候が回復すると再び、たくさんの流木が集まるとあり、地形や気象条件により絶えず流木が集まる場所であった。

ネドヌサの成立時期は、菅江真澄の記録から新しくても18世紀末で、松浦が記録した19世紀半ば頃には和人はこの祭壇を「寄木塚」と呼んでいた。明治29（1896）年測量の地形図に「ネドヌサ」と記され、大正の地図では同じ位置に「濱中」と記され、「ネドヌサ」の記載がなくなった。この追跡できた範囲でも100年間は伝説とともに残された地名である。ネドヌサの現在の場所は、明治年間の地形図から、オタモイ川の河口付近と考えられる。この川は戦後の静狩原野開拓工事で、人工的に造られた直線流路で内浦湾に流れ込んでいるので、当時の地形や自然条件とは異なっており、現在も昔のように流木が集中する現象があるのか定かではない。

オタモイ川の河口から内陸の北東方向へ500m、海岸からそう遠くない場所に保存記念木の「共立のイチイ」（図1）がある。かつて航行の目印となったイチイとともに、小さな祠と馬頭観世音と書かれた立板がある。ここは「龍神社」とも呼ばれ、現地看板によると「（略）いくつかの竜神さんの統合を機に由緒ある銘木に合祀した」と説明があり、アイヌ民族の「ネドヌサ」の信仰もここに移されていると思われる。

図15の北東側には禮文（レイブン）村とあり、当時はルベシベ（現在の静狩川）が長万部村の行政界であった。また、長万部川の河口付近に集落がある。右岸は海岸沿いから黒松内方面に行く主要な道があり、この道沿いに、家、役場、警察署、学校、神社、寺院がある。左岸には、砂浜とボクサダナイからの流れの間に集落がみられる。

（3）大正～昭和（戦前）年間の共立2遺跡の周辺（図16）

図16は大正6（1917）年測圖、昭和3（1928）年鉄道補入の「長万部」である。長万部町史によると、明治29（1896）年頃、ボクサタナイの水田で米作が試みられ、明治31（1898）年にはナイベコシナイの官林が解除され、大正8（1919）年頃から林業と農業で徳島県と山形県から87戸が入植したとある。国道から幌内まで長さ9kmの「ホロナイ殖民道路」が国費で造られたのもこの頃と思われる。共立2遺跡の北側に共立小学校があり、同校の歴史は古く、大正3（1914）年に前身の長万部小学校幌内特別教授所として設置された。低地の東側、静狩付近は「釧田 辨造村」（現在の豊浦町）とあるが、行政界は描かれていない。静狩地区は大正7（1918）年に長万部町に編入された。「静狩原野」の字名は山間部に記され、山越の道があり、家が散見される。明治年間の地形圖のサトテンカ山（郷猿家）と寫萬部山の標高200m以下の傾斜がゆるやかな山間部やオタモイ山の麓には山道が開通し、ホロナイ（オタモイ川）、ナイベコシナイ、ボクサタナイの川沿いの山中にも家がまばらにみられる。現在の静狩原野にはかつての名称の「幌内原野」とあり、オタモイ山近くに「幌内」、ネドヌサがあった付近に「濱中」、榮原付近に「追込」と「中川原」、旭浜には「川向」等の現在は使われていない地名がみられる。低地は湿原部分と草地部分があり、後者には道と家がみられる。長万部川の河口は現在よりも南にあり、やや内陸部に旧河道の名残である細長い沼（大沼、ジュンサイ沼）がみられる。

＜静狩原野について＞

静狩原野は、かつては幌内原野という名称であった。大正11（1922）年10月12日に泥炭形成植物群落がみられる天然記念物に指定され、国有の未開発地域は保存されることとなった。同時に指定されたものに厚岸町の霧多布泥炭形成植物群落があり、近隣の黒松内町の歌オプナ自生北限地は昭和3（1928）年に指定された。現在の静狩湿原は図1の沼の周囲が保存されており、これと思われる形状

の沼が大正年間の図16にみられる。現地の説明看板によると、北海道の最南端に位置する高層湿原（ミズゴケ湿原）で、トキソウ、イソツツジ、モウセンゴケ、サワラン、ミズトンボ、ワタスゲが咲く。かつては300ヘクタールあったが、現在は34ヘクタールとある。終戦後の食糧難に対し農業を推進すべきとの動きから静狩原野を開拓する動きが生まれ、これを進めるために、天然記念物の指定が解除された。昭和23（1948）年6・7月には、静狩原野の中央を横断するオタモイ川沿いの開拓道路（延長3320m）の工事が行われ、長万部町史によると囚人100人（函館少年刑務所？）が動員されたと記されている。昭和25（1950）年10月には、長万部に着任した高校教諭の田川賢三が静狩貝塚（2）を発掘調査した。原野への関心の高まりが発見の契機となったのであろう。静狩原野の開発工事は昭和26（1951）年5月に着工、3年後の昭和29（1954）年10月に完成した。なお、完成間近の同年2月には、静狩地区は「保安隊」（陸上自衛隊の前身）の高射砲発射演習場の候補地となったが、実現に至らなかった。この機能を有するのは新ひだか町（静内町）に昭和39（1964）年に設置された、陸上自衛隊静内駐屯地と静内対空射場である。また、昭和43（1968）年からの三年間、共立地区では「農業構造改善事業」として酪農の近代化がすすめられ、泥炭地が多い土地に対して、排水と客土による草地造成工事が行われ、昭和46（1971）年には共立・静狩地区で、地籍調査が行われた。

（4）明治年間の豊野4遺跡の周辺（図17）

図17は明治29（1896）年の「黒岩」を使用した。豊野4遺跡は国縫川の右岸、標高20mの段丘に位置する。国縫川左岸には、現在の坊主山（標高125m）の南側から海岸へ至る直線的な道路があり、坊主山の麓、川の近く、海滨の3か所に集落がみられる。現在の平里、紋別川の流域から「ルコッチ」（現在のルコツ川）までの海岸沿いの低地は、広葉樹、草地、湿地の地図記号があり、国縫川とモクヌイ（現在の茂調縫川）は海岸で一つの流れになり内浦湾に流れ込んでいた。国縫川を上流に向かうと、下流部は右岸に1本と左岸に無名の沢が8本描かれ、さらに上流の両岸には名称が記された支流が多く描かれている。これは国縫川沿いの道が、砂金地（今金町 美利河）に至る重要な道であったことを示唆している。これらの支流について下流から松浦武四郎の『報登志志辺津日誌』の名称と照合する。

- 「イヌブレウシナイ」（右岸）：イヌ・シナイで、秋に鮭をとる小屋の意味。現在の犬尻川である。
 - 「マサカリオンチコナイ」（左岸）：マサカリヲシユマで、山の労働者が鉞を落とした洞といわれる。
 - 「ヒラカワサンナイ」（右岸）：ヒラカワサンナイで、岩盤の上の流れる川である。
 - 「バンケベタン川」（右岸）：ハンケヘタスで、下流部の二股の意味で、源流部は茂国縫川に近い。
 - 「カリンバカルシ」（左岸）：カリンバウシナイ、桜の樹皮を取る場所、現在の萱の川と推測する。
 - 「クヲベタヌ」（左岸）：クヲヘタスで、仕掛け弓を設置する場所で、現在の上国縫川と推測する。
- これら以外は松浦の日誌に記載がない。

（5）大正～昭和（戦前）年間の豊野4遺跡の周辺（図6・7・18）

図18は大正6（1917）年測圖、昭和6（1931）年鉄道補入の「調縫」を使用した。国縫は、今金・瀬棚方面へつながる要所であったため、明治・大正時代は国縫～瀬棚間を定期乗合馬車が運行していた。古くから内浦湾と日本海側をつなぐ、渡島半島横断ルートとして利用されていたこの区間に、鉄道を敷設することが決まったのは大正9（1920）年である。昭和4（1929）年の瀬棚線全線の鉄道敷設を機に、同年大日本帝国陸地測量部により作成された地形図である。海岸沿いには明治36（1903）年に開通した函館本線がある。

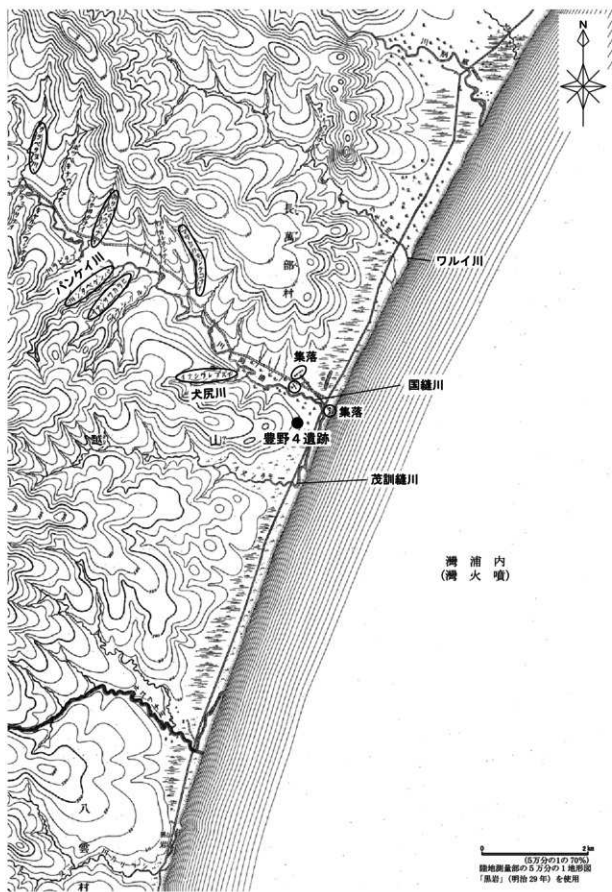


図17 豊野4遺跡 周辺の状況(1) 明治

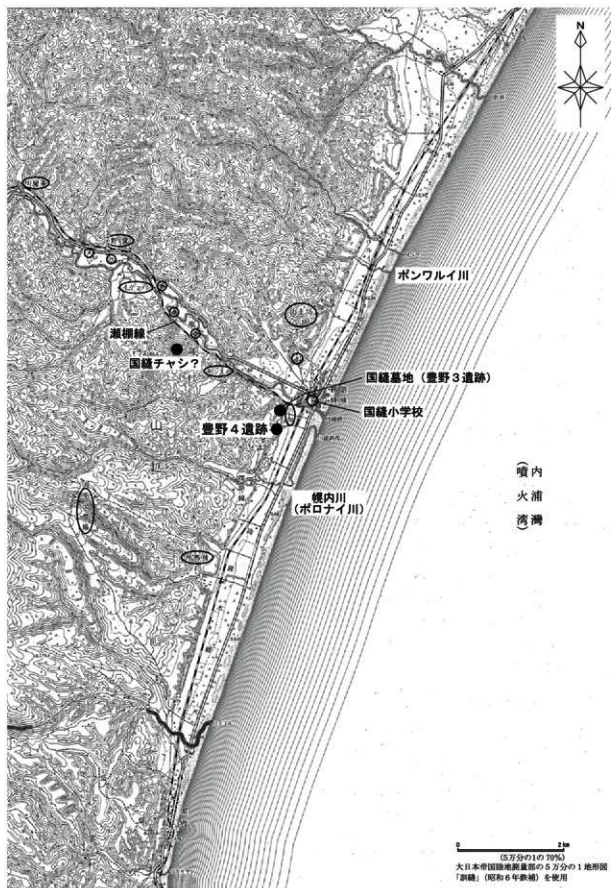


図18 豊野4遺跡 周辺の状況(2) 大正～昭和(戦前)

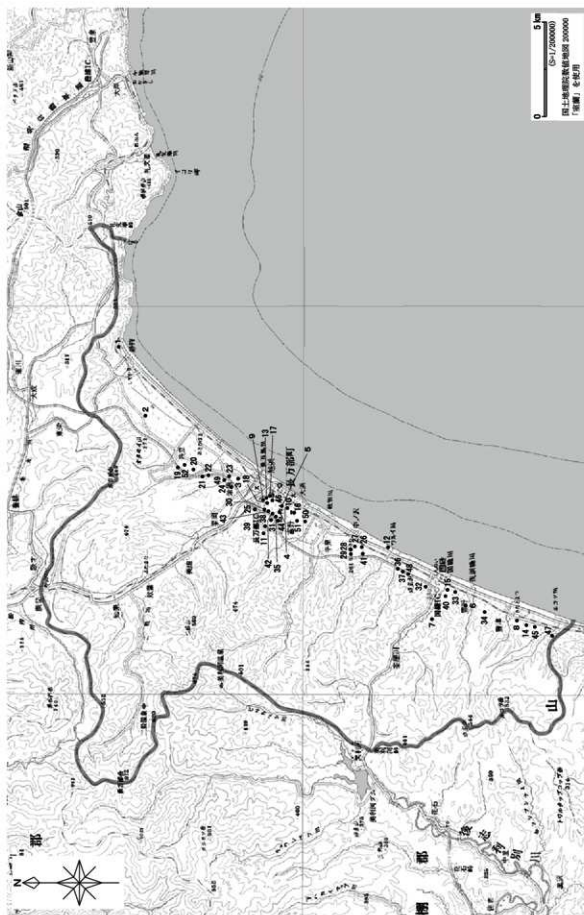


図19 長万部町内の遺跡

国縫川の右岸の地名は「川向」で、現在の町道「国縫川向線」がある（図6・7）。豊野4遺跡が位置する段丘には、国縫墓地、破線表記の山道と家がみられる。山道は海岸と平行する段丘を縦断し、茂調縫川沿いまで続く。川の河口は現在よりも北側にある。これの南にある川は現在のボロナイ川（幌内川）で、山に「種馬所」とある。これは、日露戦争後に軍馬の品質向上を目的に、明治42（1909）年に置かれた国（馬政局）の施設、「長万部（胆振）種馬所」である。そのさらに山中には「平出農場」とある。国縫駅の北東には「坊主山」と寺院の地図記号がある。国縫川沿いには下流から、「イヌシリ」、「バンケイ」、「萱野」、「茶屋川」の地名がみられ、左岸の萱野付近は平坦地が開け、学校や神社、「茶屋川駅」があり、やや下流の右岸の「バンケイ」にも広い平坦地がある。

4. 長万部町内の遺跡（図5・19～22 表4）

現在、長万部町内では58か所の遺跡がみつかり、これらについて研究・調査史の概略を述べて、河川水系や地形等の地域ごとに記述する。図19の数字と本文の遺跡名の語尾の丸括弧くくり数字は北海道教育委員会登録番号である。

（1）調査・研究史

・昭和20～30年代

戦後の昭和25（1950）年、静狩原野の農地開拓工事が静狩貝塚の発見の契機になった。同貝塚は同年9月29日～10月2日に、北海道大学文学部教授の大場利夫、長万部高校教諭の石川徹、田川賢三により学術調査された。現地には案内看板が立っている。

昭和27（1952）年に八雲高校郷土研究部が静狩川遺跡を調査したが、詳細は不明である。昭和34（1959）年には札幌医科大学が花園遺跡を調査した。

・昭和40～50年代

昭和48（1973）年8月、長万部文化財調査委員会により町内の遺跡分布調査が行われた。この調査は長万部町出身で日本考古学協会会員であった石川徹が指導した。翌年には町民センター内に「郷土資料室」が開設し、南部藩長万部陣屋跡が国史跡に指定された。昭和50（1975）年夏頃、台風通過後の海岸で全長6m弱の丸木舟が発見された（長万部町史 745頁 写真）。

また、昭和48（1973）年の長万部町開基100年の記念事業の一つとして編纂された『長万部町史』が、昭和52（1977）年に刊行された。同町史の掲載の遺物写真で出土地「中山」（27・31頁の掲載写真）は、麻込地区知来6線近くの遺跡と推定する（『国縫川』119頁掲載図）。昭和54（1979）年9月には北海道教育委員会による町内の遺跡の一般分布調査が行われた。昭和59（1984）年には長万部陣屋跡の発掘調査が行われている。

・昭和60年代頃

昭和60年代は町道改良やゴルフ場建設計画で遺跡の発見が相次いだ。昭和61（1986）年7月、東京理科大学長万部キャンパス建設予定地の開発が、埋蔵文化財事前協議を行わずに進められ、新聞報道になった（山本 1993 59頁）。これはトド山2遺跡と思われる。昭和63（1988）年5月、北海道縦貫自動車道（道央自動車道）の計画があり、町内の所在確認調査が進められた。

・平成年間

平成3（1991）年頃から、北海道縦貫自動車道の建設に伴い、町内の範囲確認調査が始まり、平成6（1994）年以降に本事業による大規模な発掘調査が開始され、以後6年間は最盛期であった。発掘調査機関は長万部町教育委員会（以下、教委）、北海道文化財保護協会（以下、保護協会）、当センターである。

平成6 (1994) 年度	長万部町教委：ナイベコシナイ 2 遺跡・栄原 2 遺跡・オバルベツ 2 遺跡
平成7 (1995) 年度	長万部町教委：ナイベコシナイ 2 遺跡・栄原 2 遺跡・オバルベツ 2 遺跡
平成8 (1996) 年度	長万部町教委：栄原 2 遺跡・オバルベツ 2 遺跡
平成9 (1997) 年度	長万部町教委：オバルベツ 2 遺跡
平成10 (1998) 年度	長万部町教委：オバルベツ 3 遺跡 (農道整備事業) オバルベツ 4 遺跡 (農道整備事業)
	保護協会：オバルベツ 2 遺跡・富野 5 遺跡 センター：富野 3 遺跡
平成11 (1999) 年度	長万部町教委：共立遺跡・オバルベツ 2 遺跡・富野 6 遺跡・富野 7 遺跡 保護協会：オバルベツ 2 遺跡 センター：花岡 2 遺跡・花岡 3 遺跡・豊野 6 遺跡
平成12・13 (2000・2001) 年度	長万部町教委：オバルベツ 2 遺跡出土の旧石器遺物の整理作業
	以上で、長万部町内の大規模発掘調査と整理作業は完了した。
平成23 (2011) 年 3 月、昭和50 (1975) 年	に海岸で発見された丸木舟 (先述) が、長万部町有形民俗文化財に指定された。

・令和年間

令和2 (2020) 年、北海道新幹線建設事業で共立 2 遺跡と豊野 4 遺跡を当センターが発掘調査し、令和3 (2021) 年 3 月に本書で報告する。

(2) 河川ごとの地域

町内を北東から南西方向へ述べる。

・静狩川流域 静狩地区 市街

静狩川遺跡 (1) は、大洞 A 式・恵山式の完形土器が出土し、焼土もみつかった。静狩川の上～中流部の旧名称は「ルベシベ川」である。

・静狩原野川流域 静狩地区 原野

静狩貝塚 (2) は昭和25 (1950) 年に学術調査された貝塚で、骨角器や獣骨、貝類が出土した。縄文時代後期初頭の「静狩式土器」の標式遺跡である。

・オタモイ川・ナイベコシナイ川流域 共立地区東側

共立遺跡 (19) は縄文時代早期で、高速道路静狩 P A 上り線部分の発掘調査では、土坑、T ビット、焼土、遺物集がみつかった。同遺跡の南側部分は共立 2 遺跡 (52) として再登載され、発掘調査では土坑、T ビット、遺物集がみつかり、主たる時期は縄文時代前期である。また、旧石器時代と考えられる遺物も出土した。

・ナイベコシナイ川流域 共立地区西側

ナイベコシナイ 1 遺跡 (20)・ナイベコシナイ 3 遺跡 (22) は縄文時代の石器が出土している。ナイベコシナイ 2 遺跡 (21) は発掘調査で縄文時代早期の竪穴住居跡や土坑がみつかった。

・川瀬川 (ボクサタナイ川)・栄川流域 栄原地区

栄原遺跡 (3) では魚形石器が出土した。栄原 2 遺跡 (23) は縄文時代早期～後期で、発掘調査では竪穴住居跡や環状に位置する遺物集がみつかり、石刃鏃も出土した。栄原 3 遺跡 (24) は土器がみつかった。栄原 4 遺跡 (49) は縄文時代早期である。

・飯生神社周辺～坊主山北東側付近 陣屋町地区～富野地区の海寄りの北側

国指定史跡の南部藩長万部陣屋跡(13)は、江戸時代の安政3～4(1856～1857)年に南部藩が設置した陣屋で、現地表に残存する土塁や空堀をみることができる。さらにこの場所から北側は飯生神社遺跡(9)、町道を挟んで南側は南部藩長万部陣屋脇遺跡(17)で、ともに縄文時代の遺跡である。坊主山2遺跡(46)は通称「坊主山」の北東側付近に位置し、富野2遺跡(18)は縄文時代のフレイクがみつかった。

・坊主山南西側～ト下山周辺 富野地区の海寄りの南側

坊主山遺跡(5)は町史編纂の頃には、土器・石器が出土する場所として知られており、堅穴住居跡の断面もみられたといわれている。ト下山遺跡(10)は石川徹が土坑墓と積石の墓を調査したと記載されているが、詳細は不明である。ト下山2遺跡(16)は縄文時代の石器が出土し、縄文時代中期である。富野10遺跡(51)は縄文時代早期の土器が出土し、富野9遺跡(50)は縄文時代早～晩期で、つまみ付きナイフがみつかった。

・オバルベツ川左岸 富野地区の山寄りの北側

オバルベツ遺跡(11)は縄文時代中期である。オバルベツ2遺跡(25)は道央自動車道長万部ICの場所で、6か年にわたり発掘調査された町内一の大遺跡である。遺構は堅穴住居跡、土坑墓、フラスコ状ピット、Tピット、埋塞、遺物集中がみつかった。土器は縄文時代早期の型式が多種類出土し、石器は通常の器種に加え異形石器、岩偶、ヒスイの太珠、環状石斧等がある。旧石器は石刃や細石刃、細石刃核、ナイフ型石器、滑石製垂飾等がみつかった。オバルベツ3遺跡(38)は縄文時代早期で、発掘調査で磨製石斧の製作場がみつかった。オバルベツ4遺跡(39)は、縄文時代早～後期の遺物と後期旧石器時代の細石刃と荒屋型彫器が出土した。

・オバルベツ川右岸 富野地区の山寄りの南側

富野遺跡(4)は富野八幡神社周辺で、縄文時代後期の堂林式土器がみつかった。富野3遺跡(30)は縄文時代の集落跡で、堅穴住居跡、土坑墓、フラスコ状ピットが発見された。富野4遺跡(31)は縄文時代早期で、石鏃とフレイクが出土した。富野5遺跡(35)は、発掘調査で縄文時代早期の物見台式・アルトリ式が出土し、石鏃の集中がみつかった。富野6遺跡(42)は縄文時代の集落跡で堅穴住居跡や土坑が調査され、無名の沢をはさんだ対岸の富野7遺跡(43)では、縄文時代早期の貝殻文土器が出土した。富野8遺跡(44)はスクレイパーとフレイクがみつかった。

・無名の沢流域 中の沢地区

中の沢1遺跡(26)は縄文時代前期と考えられる。出土遺物は、中の沢2遺跡(27)はフレイク、中の沢3遺跡(28)は石核とフレイク、中の沢4遺跡(29)はスクレイパーとフレイク、中の沢5遺跡(41)は両面調整石器の未製品である。これらの遺跡はすべてJR函館本線の沢駅の西側に位置し、平成16(2004)年頃に閉鎖された大規模なゴルフ場内とその周辺に位置すると思われる。

・ワルイ川・ボンワルイ川流域 花岡地区

花岡遺跡(12)はアイヌ文化期の墓地である。花岡2遺跡(36)は縄文時代前期の集落跡で、堅穴住居跡が調査され、円筒土器下層式が出土した。花岡3遺跡(37)では東北地方の太木8b・9式土器がみつかった。縄文時代中期の集落遺跡である。花岡4遺跡(48)ではスクレイパーがみつかった。

・国縫川流域 国縫地区

国縫遺跡(32)は国縫川左岸の高台に位置し、時代や出土遺物の詳細は不明である。国縫チャシ(7)は地点不明とされるが、国縫川右岸の標高161.4mの無名の山頂に記しがある(図5)。

・国縫川右岸 豊野地区北側

図5の陰影地形図上で見ると、正確な地点が不明な国縫チャシを除き、豊野・国縫地区の遺跡のほ

とんどが内浦湾の海岸線に並行して細長く続く段丘上に形成されていることがわかる。台地上に細長く広がる豊野4遺跡(33)は、今回、北西側の端を調査し、頁岩製の遺物が出土した。豊野4遺跡と谷を挟んで北側にある台地上には国縫墓地(図20)があり、国縫墓地は豊野3遺跡(15)で石鏃が出土した。地元の人の話によれば、昭和47(1972)年ごろまでは、この国縫墓地の駐車場が焼き場だったようである。遺体を座らせた形で神輿のように人々が担いで来て、この駐車場で座葬のまま野焼したそうである。そのため、夜になるとこの小屋に



図20 国縫墓地井戸と駐車場

ある井戸を押す幽霊がたびたび目撃されたという。この豊野3遺跡から谷を挟んで150mほど北西側に、豊野6遺跡(40)がある。平成11(1999)年に北海道縦貫自動車道(七飯～長万部間)の建設に伴う発掘調査が北海道埋蔵文化財センターにより行われている(北理調報143)。調査の結果、縄文時代前期後半の土坑1基、焼土6か所が検出され、縄文時代早期～晩期の土器片、石鏃、石錐、スクレイパー、たたき石、扁平打製石器、砥石等の石器、黒曜石製異形石器、板状の石製品など計29,144点の遺物が出土している。

・茂訓縫川流域 豊野地区

茂訓縫川左岸の豊野1遺跡(6)は縄文時代で、右岸の豊野5遺跡(34)は縄文時代中期でフレイクがみついている。

・ボンボロナイ川・ボロナイ川(幌内川)流域 豊野地区南側 豊津地区北側

豊野2遺跡(8)はボンボロナイ川左岸に位置し、同河川とボロナイ川の間の台地は縄文時代早期の豊津遺跡(14)である。豊津2遺跡(45)の時期は不明である。

・ロクツ川・ルコツ川流域 豊津地区

豊津3遺跡(47)は縄文時代中期で、ロクツ川とルコツ川の合流点付近に位置する。

(末光・新家)

<参照ホームページ・Webサイト等>

国土地理院 電子国土Web. <http://maps.gsi.go.jp>

北大北方資料データベース デジタル地図『蝦夷国 全圖』林子平 1785.

<https://www2.lib.hokudai.ac.jp>

函館市中央図書館所蔵資料 デジタル地図『東西蝦夷山川地理取調図』松浦武四郎 1859.

<http://archives.c.funac.jp/fronts/detail/reservoir/4f0ab751ea8e8a08d200009400>

長万部町公式HPサイト「長万部町山村歴史ブック オ・シャマンベ」.

<http://www.town.oshamambe.lg.jp/modules/towninfo/content0019.html>

松前町公式HPサイト「藩政時代の松前 隠れキリシタン」.

<http://www.town.matsumae.hokkaido.jp/hotnews/detailsp/00000356.html>

地質調査総合センター 5万分の1地質図幅 4.札幌.

<https://www.gsj.jp/Map/Jp/geology4-4.html#04059>

北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課「北の遺跡案内」

https://www2.wagmap.jp/hokkai_bunka/portal



図21 昭和27(1952)年の豊野・国縫



図22 昭和45(1970)年の豊野・国縫

表 4 長万部町内の遺跡一覧表(1)

遺跡番号 (市指定)	遺跡名	字名	大河川	小沢川・沢	立地	種別	主な時代	主な遺構	主な土器・他	主な石版	発掘調査 年・年度	地区 トレンチ	調査年度 (年)	調査者 調査機関	発掘調査 報告書 文庫	備考
1	神谷川遺跡	神谷	長万部 地区	—	河川 沿地	遺物調査	縄文時代 縄文時代 弥生時代 古墳時代	—	土器・土版 (弥生・古墳時代)	—	昭和47(1972)年 昭和48(1973)年 昭和49(1974)年	—	—	—	—	—
2	神谷川遺跡	神谷	長万部 地区	—	河川 沿地	遺物調査	縄文時代 中継 遺物	縄文時代 (弥生・古墳時代)	土器・土版 (弥生・古墳時代)	—	昭和47(1972)年 昭和48(1973)年 昭和49(1974)年	—	—	—	—	—
3	東原遺跡	東原	長万部 地区	—	河川 沿地	遺物調査	縄文時代 中継 遺物	縄文時代 (弥生・古墳時代)	土器・土版 (弥生・古墳時代)	—	昭和47(1972)年 昭和48(1973)年 昭和49(1974)年	—	—	—	—	—
4	高野遺跡	高野	長万部 地区	—	河川 沿地	遺物調査	縄文時代 中継 遺物	縄文時代 (弥生・古墳時代)	土器・土版 (弥生・古墳時代)	—	昭和47(1972)年 昭和48(1973)年 昭和49(1974)年	—	—	—	—	—
5	坊山遺跡	坊山	長万部 地区	—	河川 沿地	遺物調査	縄文時代 中継 遺物	縄文時代 (弥生・古墳時代)	土器・土版 (弥生・古墳時代)	—	昭和47(1972)年 昭和48(1973)年 昭和49(1974)年	—	—	—	—	—
6	豊野1遺跡	豊野	長万部 地区	—	河川 沿地	遺物調査	縄文時代 中継 遺物	縄文時代 (弥生・古墳時代)	土器・土版 (弥生・古墳時代)	—	昭和47(1972)年 昭和48(1973)年 昭和49(1974)年	—	—	—	—	—
7	豊野2遺跡	豊野	長万部 地区	—	河川 沿地	遺物調査	縄文時代 中継 遺物	縄文時代 (弥生・古墳時代)	土器・土版 (弥生・古墳時代)	—	昭和47(1972)年 昭和48(1973)年 昭和49(1974)年	—	—	—	—	—
8	豊野3遺跡	豊野	長万部 地区	—	河川 沿地	遺物調査	縄文時代 中継 遺物	縄文時代 (弥生・古墳時代)	土器・土版 (弥生・古墳時代)	—	昭和47(1972)年 昭和48(1973)年 昭和49(1974)年	—	—	—	—	—
9	豊野4遺跡	豊野	長万部 地区	—	河川 沿地	遺物調査	縄文時代 中継 遺物	縄文時代 (弥生・古墳時代)	土器・土版 (弥生・古墳時代)	—	昭和47(1972)年 昭和48(1973)年 昭和49(1974)年	—	—	—	—	—
10	ト山遺跡	ト山	長万部 地区	—	河川 沿地	遺物調査	縄文時代 中継 遺物	縄文時代 (弥生・古墳時代)	土器・土版 (弥生・古墳時代)	—	昭和47(1972)年 昭和48(1973)年 昭和49(1974)年	—	—	—	—	—
11	オムルベツ遺跡	オムルベツ	長万部 地区	—	河川 沿地	遺物調査	縄文時代 中継 遺物	縄文時代 (弥生・古墳時代)	土器・土版 (弥生・古墳時代)	—	昭和47(1972)年 昭和48(1973)年 昭和49(1974)年	—	—	—	—	—
12	花岡遺跡	花岡	長万部 地区	—	河川 沿地	遺物調査	縄文時代 中継 遺物	縄文時代 (弥生・古墳時代)	土器・土版 (弥生・古墳時代)	—	昭和47(1972)年 昭和48(1973)年 昭和49(1974)年	—	—	—	—	—
13	東谷地内遺跡 長万部町遺跡	東谷地内	長万部 地区	—	河川 沿地	遺物調査	縄文時代 中継 遺物	縄文時代 (弥生・古墳時代)	土器・土版 (弥生・古墳時代)	—	昭和47(1972)年 昭和48(1973)年 昭和49(1974)年	—	—	—	—	—
14	豊野遺跡	豊野	長万部 地区	—	河川 沿地	遺物調査	縄文時代 中継 遺物	縄文時代 (弥生・古墳時代)	土器・土版 (弥生・古墳時代)	—	昭和47(1972)年 昭和48(1973)年 昭和49(1974)年	—	—	—	—	—
15	豊野3遺跡	豊野	長万部 地区	—	河川 沿地	遺物調査	縄文時代 中継 遺物	縄文時代 (弥生・古墳時代)	土器・土版 (弥生・古墳時代)	—	昭和47(1972)年 昭和48(1973)年 昭和49(1974)年	—	—	—	—	—

表 4 最長部町内の遺跡一覧表(2)

遺跡番号 登録番号 (国・市)	遺跡名	字名	大河川	小字川	立地	種別	主な時代	主な遺構	主な土器・物	主な石造	発掘調査 年・年度	地区 トレンチ	調査 面積 (㎡)	発掘調査 期間	発掘調査 報告書 文庫	備考
16	トノ山遺跡	田所	田所の川 北岸	—	田所	遺跡調査区	縄文時代 中期	—	—	縄文時代 前期・中期	—	—	—	—	田所川(田所川)東岸 最長部町(田所川) 田所川	
17	熊野尾方部遺跡	熊野尾	熊野尾の川 南岸	—	熊野尾	遺跡調査区	縄文時代 前期	—	—	—	—	—	—	—	田所川(田所川)東岸 最長部町(田所川) 田所川	
18	蓮野2遺跡	蓮野	蓮野の川 南岸	蓮野	蓮野	遺跡調査区	縄文時代 前期	—	—	縄文時代	—	—	—	—	田所川(田所川)東岸 最長部町(田所川) 田所川	
19	内立遺跡	内立	内立の川 南岸	内立	内立	遺跡調査区	縄文時代 前期	—	—	縄文時代	—	—	—	—	田所川(田所川)東岸 最長部町(田所川) 田所川	
20	ナイベコシナイ1遺跡	内立	ナイベコシナイの川 南岸	—	内立	遺跡調査区	縄文時代 前期	—	—	縄文時代	—	—	—	—	田所川(田所川)東岸 最長部町(田所川) 田所川	
21	ナイベコシナイ2遺跡	内立	ナイベコシナイの川 南岸	内立	内立	遺跡調査区	縄文時代 前期	—	—	縄文時代	—	—	—	—	田所川(田所川)東岸 最長部町(田所川) 田所川	
22	ナイベコシナイ3遺跡	内立	ナイベコシナイの川 南岸	内立	内立	遺跡調査区	縄文時代 前期	—	—	縄文時代	—	—	—	—	田所川(田所川)東岸 最長部町(田所川) 田所川	
23	東郷2遺跡	東郷	東郷の川 南岸	東郷	東郷	遺跡調査区	縄文時代 前期	—	—	縄文時代	—	—	—	—	田所川(田所川)東岸 最長部町(田所川) 田所川	
24	東郷3遺跡	東郷	東郷の川 南岸	東郷	東郷	遺跡調査区	縄文時代 前期	—	—	縄文時代	—	—	—	—	田所川(田所川)東岸 最長部町(田所川) 田所川	
25	オノバケツ2遺跡	田所	オノバケツの川 南岸	田所	田所	遺跡調査区	縄文時代 前期	—	—	縄文時代	—	—	—	—	田所川(田所川)東岸 最長部町(田所川) 田所川	

表 4 長万部町内の遺跡一覽表(3)

[illegible]

Ⅲ章 調査の概要

1. 発掘区の設定 (図23・24 表5)

グリッドの設定と調査杭の打設

基図はJRTTから、発掘調査範囲が示された電子図面 (dwg形式) の提供を受けた。共立2遺跡は図の名称の記載が無いもので (図23)、豊野4遺跡は「北海道新幹線 (新函館北斗・札幌間) 新青森起点224km900m～226km200m 用地実測図原図 1:1000」(令和2年1月31日) である (図24)。両遺跡の調査範囲の平面直角座標の数値はCAD上で読図した (表5)。

調査グリッドは世界測地系の平面直角座標で設定した。長万部地域は「第XI系」座標原点の第四象限にあたり、縦方向のX軸は南方向へ負、横方向のY軸は東方向へ正になる。遺跡ごとに北西側の調査区外に「グリッド原点 A-0」を設定し、調査区全体を網羅するように5mごとに区画した。南北方向のX軸は、アルファベットを北から南方向へ昇順 (A→) するように付し、東西方向のY軸は算用数字で示し、西方向「0」から東方向へと値が大きくなる。各グリッドの呼称は平面直角座標原点がある「北西側」の杭名とし、アルファベットと算用数字を列記して表記する。

現地に打設した杭は、調査区形状の変化点に「範囲杭」(白色 ハ1～ハ6) を、5mごとのグリッドを示す「方眼杭」(赤色) は10mごと、方眼杭のうち標高を測った「基準杭」(黄色) は20mごとに打設した。これら調査杭の打設と水準測量は、ネットワーク型RTK-GNSS測量で設置した4級基準点 (共立2遺跡: T1・T2 豊野4遺跡: T3・T4) を与点とした。

2. 基本土層

(1) 共立2遺跡の基本土層 (図25～30 表6)

基本土層はこれまでの長万部町内での発掘調査を参考に、次のように区分した。色調及び土層の観察項目は『標準土色帖』(小山・竹原 2011) と『土壌調査ハンドブック』(ペドロジスト懇談会 1984) による。

・基本土層 (図25)

I層: 現地表土と、表土除去後に露出している各層を遺物の取り上げのため、便宜的に呼称した。

Ⅰ・B r層: 地表土の下位に位置する茶褐色の土層。

Ⅱ層: 黒色土層で主たる遺物包含層である。

Ⅲ層: 上位は黒色、下位は黄～褐色の色調を呈する漸移層で、遺物包含層である。

Ⅳ層: 褐色～橙色の固結したローム質の地山である。第三紀「瀬棚層」の最上位部分と考えられ、凝灰岩を主とする堆積岩が土壌化した層である。

・土層断面図

遺跡全体の各層の広がりや記録するため、グリッド杭の周囲を掘り残した部分 (杭山) の土層断面を作図し、この柱状図をグリッドラインごとに配置した図を作成し、必要な部分は通常の土層断面図を作成した。任意の杭山間での基本土層の状況や標高が視覚的に理解しやすい。

・15ライン柱状図 (図26)

南端から段丘上までⅢ層がみられ、最高標高のⅠ～ⅣはⅣ層が地表にある。北側斜面下のE-15はⅡ層が厚くⅢ層が明瞭にみられない。

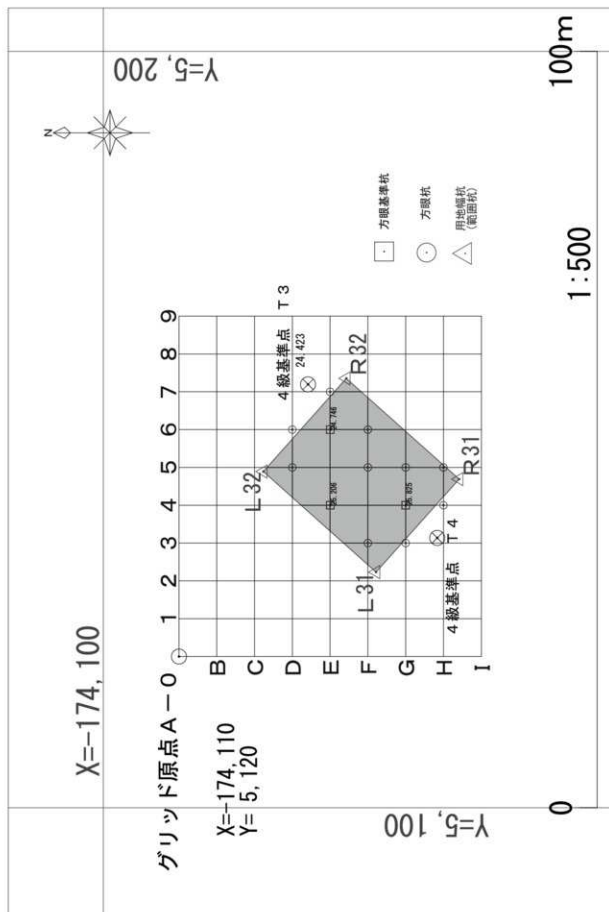


図24 豊野4遺跡 グリッド設定図

表5 発掘調査基準点一覧表

遺跡名	年度	種類	杭名	世界測地系					備考	
				平面直角座標 (m)		標高 (m)	地理座標 (° ′ ″)			
				X Y系			北緯	東経		
共立2遺跡	令和2 (2020)	グリッド座標 原点	A-0	-159,860,000	11,910,000					ネットワーク型 RTK-GNSS測量
		4級基準点	新設 T-1	-159,864,183	11,966,350	37.297				
		新設 T-2	-159,946,879	11,983,284	—					
		調査区中央付近 基準杭	M-14	-159,920,000	11,980,000	36.464	42-33-37.1	140-23-45.2		
		範囲杭	ハ1	-159,878,357	11,992,632					
			ハ2	-159,887,235	11,949,315					
			ハ3	-159,904,975	11,927,983					
			ハ4	-159,947,211	11,972,941					
			ハ5	-159,941,859	11,994,846					
			ハ6	-159,916,746	12,025,961					
豊野4遺跡	令和2 (2020)	グリッド座標 原点	A-0	-174,110,000	5,120,000					ネットワーク型 RTK-GNSS測量
		4級基準点	新設 T-3	-174,127,078	5,155,980	24.423				
		新設 T-4	-174,144,179	5,135,682	—					
		調査区中央付近 基準杭	E-4	-174,130,000	5,140,000	25.206	42-25-56.8	140-18-44.9		
		用地幅杭 (=調査区範囲杭)	L31	-174,136,080	5,131,158					
			R31	-174,147,082	5,143,454					
			L32	-174,121,164	5,144,456					
			R32	-174,132,142	5,156,774					

表6 共立2遺跡 基本土層

層名	色別 図号	土質 説明	土層名	平均 厚さ (cm)	層界	砂・粘土・シルト (厚さ2mm未満)				礫 (厚さ2mm以上)				地質図 (3000 地方計画書) との対比	備考
						砂質 土質	砂質 土質	砂質 土質	砂質 土質	礫 割合 (%)	平均	最大	単位		
1層	—	—	埋没層で最上段に 位置する土層	—	—									—	地表層に属している 層・砂層と大きく対照した 「埋没の層」として評価
2層	—	—	—	—	—									3層 「黄土層」 4層 「粘土層」	埋没層の層にのみ見られる
3層	砂質 土質	埋没土層	黄粘土	30	埋没	砂質土	砂質土	砂質土	砂質土	7.0(%)	砂	泥	泥	—	埋没層の層にのみ見られる
4層	砂質 土質	埋没土層	黄粘土	13	埋没	砂質土	砂質土	砂質土	砂質土	7.0(%)	砂	泥	泥	—	埋没層の層にのみ見られる
5層	砂質 土質	埋没土層	黄粘土	13	埋没	砂質土	砂質土	砂質土	砂質土	7.0(%)	砂	泥	泥	—	埋没層の層にのみ見られる
6層	砂質 土質	埋没土層	黄粘土	13	埋没	砂質土	砂質土	砂質土	砂質土	7.0(%)	砂	泥	泥	—	埋没層の層にのみ見られる
7層	砂質 土質	埋没土層	黄粘土	13	埋没	砂質土	砂質土	砂質土	砂質土	7.0(%)	砂	泥	泥	—	埋没層の層にのみ見られる

表7 豊野4遺跡 基本土層

層名	色別 図号	土質 説明	土層名	平均 厚さ (cm)	層界	砂・粘土・シルト (厚さ2mm未満)				礫 (厚さ2mm以上)				地質図 (3000 地方計画書) との対比	備考
						砂質 土質	砂質 土質	砂質 土質	砂質 土質	礫 割合 (%)	平均	最大	単位		
1層	—	—	埋没層で最上段に 位置する土層	—	—									—	地表層に属している 層・砂層と大きく対照した 「埋没の層」として評価
2層	砂質 土質	埋没土層	黄粘土	30	埋没	砂質土	砂質土	砂質土	砂質土	7.0(%)	砂	泥	泥	—	埋没層の層にのみ見られる
3層	砂質 土質	埋没土層	黄粘土	13	埋没	砂質土	砂質土	砂質土	砂質土	7.0(%)	砂	泥	泥	—	埋没層の層にのみ見られる
4層	砂質 土質	埋没土層	黄粘土	13	埋没	砂質土	砂質土	砂質土	砂質土	7.0(%)	砂	泥	泥	—	埋没層の層にのみ見られる
5層	砂質 土質	埋没土層	黄粘土	13	埋没	砂質土	砂質土	砂質土	砂質土	7.0(%)	砂	泥	泥	—	埋没層の層にのみ見られる
6層	砂質 土質	埋没土層	黄粘土	13	埋没	砂質土	砂質土	砂質土	砂質土	7.0(%)	砂	泥	泥	—	埋没層の層にのみ見られる
7層	砂質 土質	埋没土層	黄粘土	13	埋没	砂質土	砂質土	砂質土	砂質土	7.0(%)	砂	泥	泥	—	埋没層の層にのみ見られる

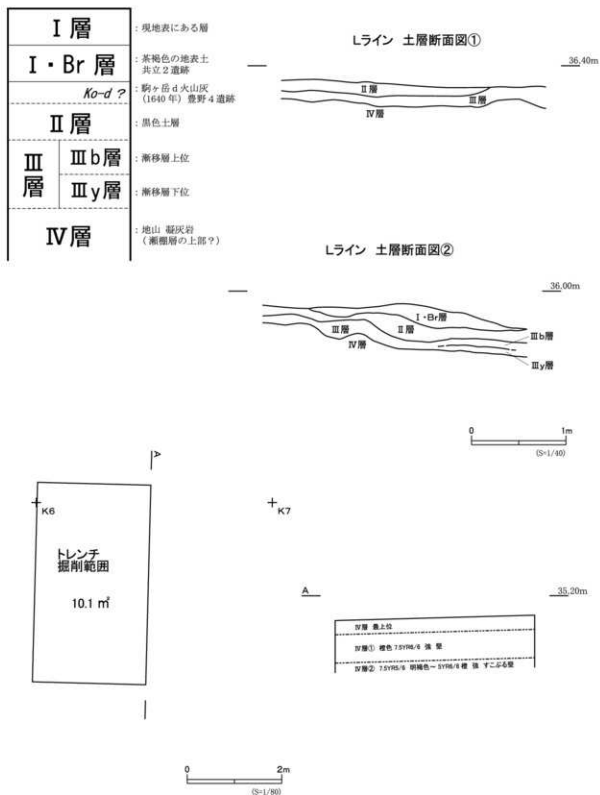


図25 長万部町 基本土層柱状図 共立 2 遺跡 土層断面図

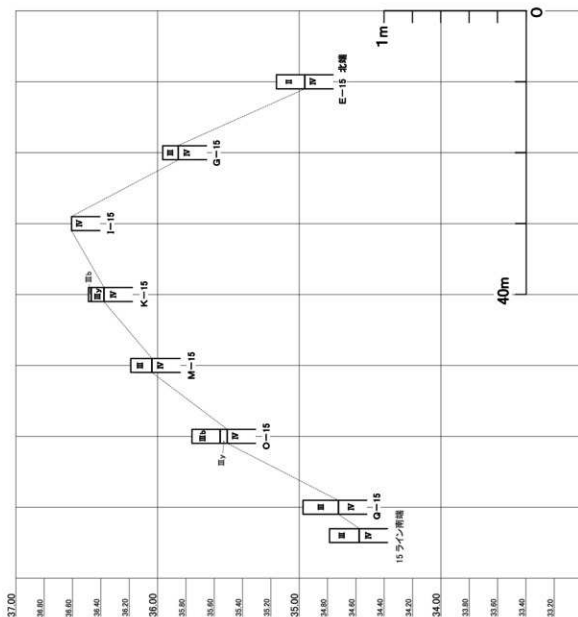


図26 共立2遺跡 15ライン柱状図

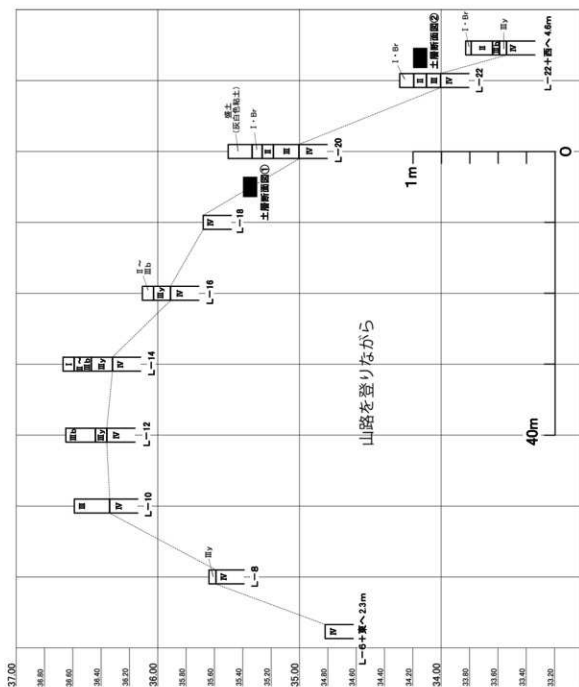


図27 共立2遺跡 Lライン柱状図

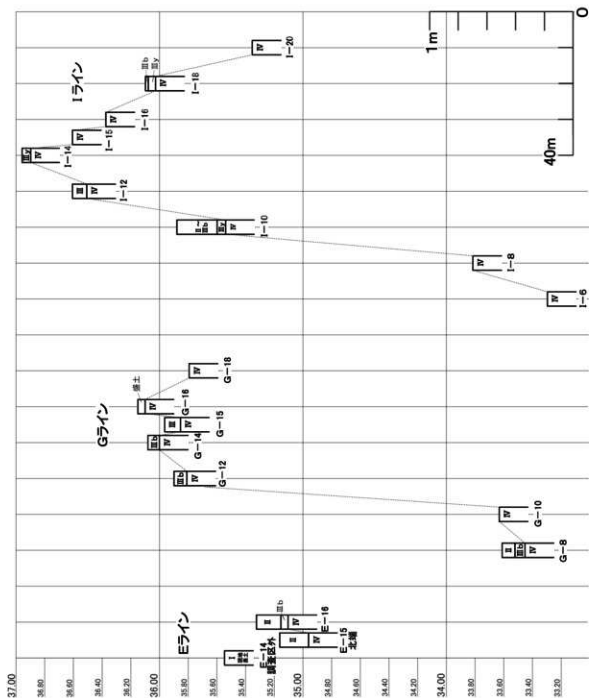


図28 共立2遺跡 E・G・Iライン柱状図

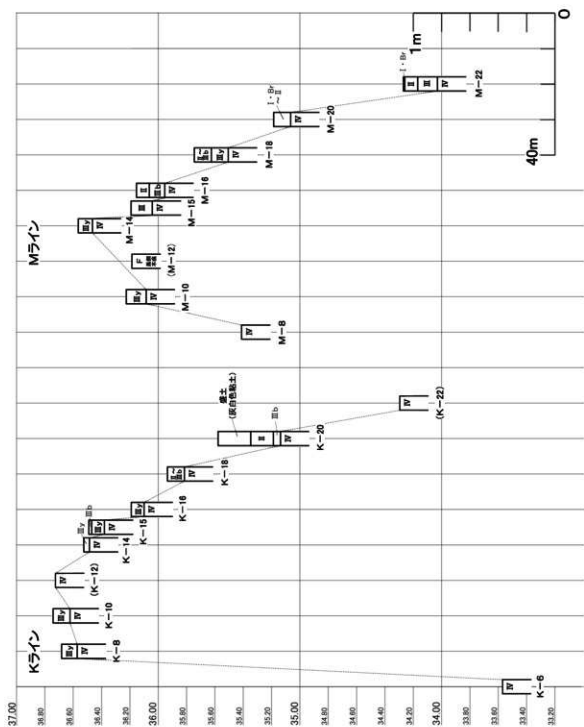


図29 共立2連跡 K・Mライン柱状図

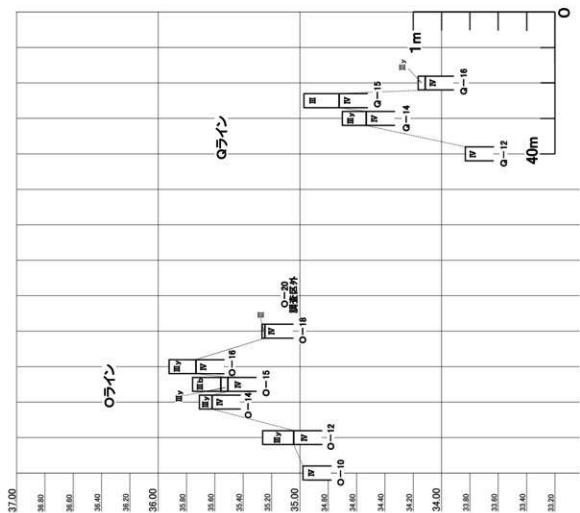


図30 共立2連跡 O・Qライン柱状図

・Lライン柱状図(図25・27)

西側斜面のL-6から台地平坦部のL-12まではⅡ層がなく、同平坦部から斜面にかけてのL-14・16ではⅢb層がみられる。東側の斜面ではⅡ層が厚く、茶褐色を呈する「I・Br層」もまとまってみられたので土層断面図①・②(図版11)を作成した。

上記の先行トレンチ沿い以外は、柱状図を東西方向のアルファベットのラインで配置し、横軸の縮尺を変更した(図28~30)。EラインはⅡ層が厚く、Gラインの標高36m付近はⅢ層が残存する。IラインはⅣ層が露出しているところが多い。Kラインの高い地点はⅢy層が露出し、Mラインは東側の斜面上位にⅡ層が残存する。Oラインは標高が35~36m程度で、QラインとともにⅡ層が残存しない。

・深掘トレンチ(図25)

旧石器の確認と地山の厚さを確認するため、深く掘り下げた部分である。遺物はなく、地山のⅣ層が1m以上厚くみられることを確認した。下位にいにつれ色調が明るくなる。共立2遺跡の立地は、地質図幅では「長万部段丘堆積物」(第四紀)と記載があるが、均質な凝灰岩の層が続くようで、第三紀「瀬棚層」と考えられる。(末光)

(2) 豊野4遺跡の基本土層(図31~33 表7)

土層の区分は、おおむね共立2遺跡のものを踏襲し、豊野4遺跡に特徴的な点を追記した。

・基本土層

I層:表土・耕作土・攪乱など。Ko-dとの間に黒色土が発達している部分もある。

駒ヶ岳d降下火山灰(Ko-d)層:

西暦1640年に噴火した駒ヶ岳の火山噴出物層。層厚0~8cm。谷状地形や地形の落ち込み部に部分的に堆積する。平成12(2000)年度に報告された豊野6遺跡でも確認されており、分析されている。下部は粒子の粗い砂状の層で、津波堆積物の可能性がある。共立2遺跡では確認されておらず、この辺りが北限か。

Ⅱ層:黒~黒褐色土層。約6,500~6,600年前から西暦1640年までに堆積した遺物包含層。谷地形では黒色土が発達する。層厚約20~60cm。

Ⅲ層:漸移層。黒褐~暗褐色土層。豊野4遺跡では部分的であり、広汎には認められない。層厚0~15cm。

駒ヶ岳g降下火山灰(Ko-g)層:

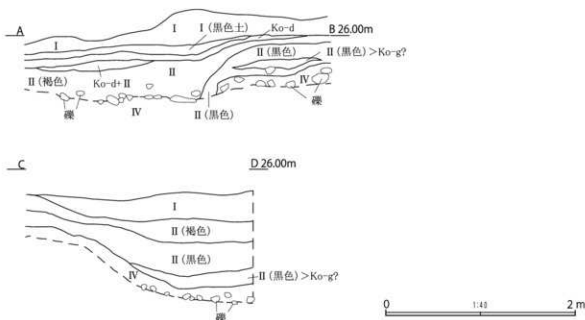
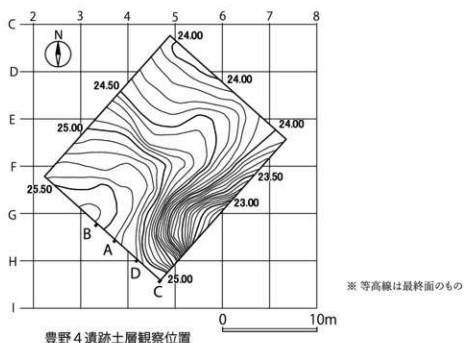
約6,500~6,600年前に噴火した駒ヶ岳の火山噴出物層。共立2遺跡では未確認。豊野4遺跡では谷状地形の断面でわずかに斑状に確認できる程度で、明瞭な層をなしていない。

Ⅳ層:地山の黄褐色ローム・凝灰岩質礫層。第三紀瀬棚層堆積岩。径1~30cm大の礫が混入。層厚不明(1m以上)。堆積面は起伏が激しい。(新家)

3. 調査の方法

(1) 共立2遺跡の調査方法

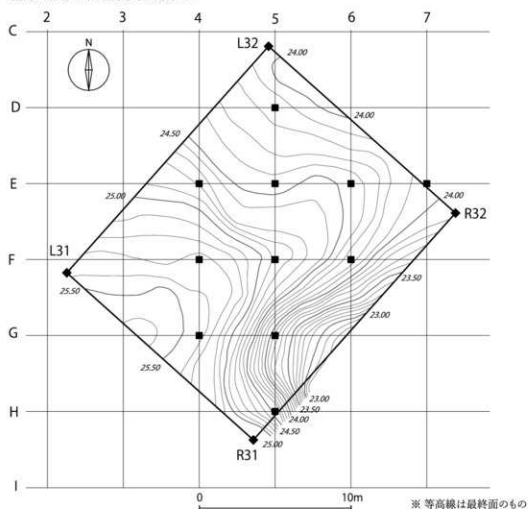
最初に、調査区内の立木を伐採した。遺構・遺物保護のため切株を残す計画であったが、下位の土層を確認するため数か所を伐根した。掘削は重機でI層下位付近までを除去し(表土除去)、残したI層を人力で掘り、遺物包含層のⅡ層上面を検出した。表土除去後の地形測量図を作成した後、土量や遺構・遺物のあり方についてより詳細な情報を調査の早い段階で得るため、南北方向Lラインと東



- I (黒色土): 10YR1.7/1. 埴壤土, 粘性中, 堅.
 Ko-d: 暗褐色土, 砂土, 粘性弱, 堅, 乾くとにぶい黄褐色 (10YR6/4).
 II (暗褐色): 10YR3/3. 埴壤土, 粘性強, 堅.
 II (黒色): 10YR1.7/1より黒い, 埴壤土, 粘性強, 堅.
 II > Ko-g?: 黒褐色土, 10YR2/3. 埴壤土, 粘性強, 堅.
 IV: 褐色土, 10YR4/4. 壤土, 粘性強, すこぶる堅, ϕ 1~30 μ m凝灰岩角礫~垂角礫2%混入.

図31 豊野4遺跡 基本土層図

豊野4遺跡 土層柱状図 観察位置



範囲杭 L31・32、R31・32

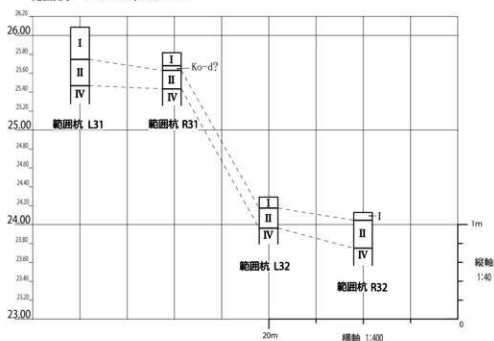
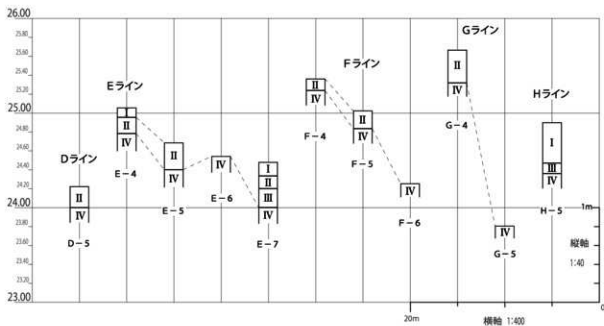


図32 豊野4遺跡 杭山柱状図(1)

東西方向 D・E・F・G・H



南北方向 4・5・6ライン

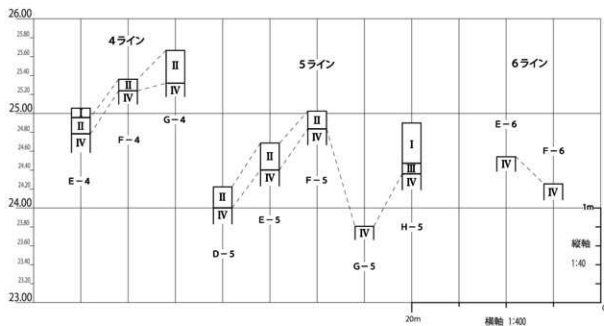


図33 豊野4遺跡 杭山柱状図(2)

西方向15ラインに先行トレンチを設け掘り進めた。結果、遺構は確認できず、土量や遺物は調査区の南東側に多いことが判明した。調査の展開はこれを踏まえ、遺構の存在が予想される調査区中央の平坦部と、南東側部分を先に行うこととした。包含層調査では、遺物の出土状況を観察して遺構確認を併せて行い、これらの確認・発見に努めた。遺構と予想した部分は半載、あるいはトレンチを設けて掘り下げ、土層断面、壁の立ち上がりや底面の形状、遺物の出土状況を精査した。調査が完了した時点の地形測量図も作成した。(末光)

(2) 豊野4遺跡の調査方法

調査範囲内の立木を伐採後、I層を重機で除去した。その際、包含層への影響を鑑み、切り株の抜根は最小限にとどめた。伐採は4月8日に行い、4月9日午後より重機による表土除去を開始した。土砂の流出を防ぐため、排土は調査区北側外にまとめ、盛土をブルーシートで養生し、翌10日に表土除去作業を終了した。4月24日にグリッド杭打設後、5月13日より人力による掘削を開始した。作業人員は、共立2遺跡の事務所から毎朝夕片道20分かけて送迎した。標高25mの調査区までは、海拔3mの国縫墓地駐車場から山道を10分歩いて登った。

人力による調査は調査区南側の山側から行い、移植ごととスコップを併用して進めた。排土はすべて調査区外北側に行った。遺構と予想される部分は半載して掘り下げた。谷状地形がかかる南側の壁面および調査区内に打設した各杭周辺の土層を観察・記録し、図・写真・表を作成した。

雨天による作業の中止が多い中、掘削調査は6月9日で終了し、調査区内清掃後、全体終了写真を撮影した。翌10日に地形測量、機材の撤収、6月15日・16日に重機による排土の埋め戻しを行い、豊野4遺跡の現地調査を終えた。

主な遺物は石器・礫で、グリッドごと、層位ごとに取り上げた。(新家)

4. 整理の方法

(1) 一次整理の方法

土器・石器等の遺物は、現場で「遺跡名：(略号 共立2遺跡：キ2 豊野4遺跡：ト4)：出土地点(遺構名・グリッド)：出土層位：遺物種別(土器：剥片石器・礫石器とレキ：その他：の四つに大別)：取り上げ番号(出土位置記録のもの)：取り上げ年月日」の情報を記したビニール袋に取り上げた。

現場事務所では袋ごとに「取り上げ台帳(水洗台帳)」に記録し、一次整理作業の流れを管理した。遺物は「水洗」・「乾燥」した後、「分類」し、出土地点・出土層位・遺物名等の遺物個別の情報を「遺物カード」に記し、チャック付きビニール袋に遺物とともに収納した。また、その遺物カードの記載事項を一覧表に書き記した(手書きの遺物登録台帳)。これをExcel文書で清書したものを「遺物登録台帳」として完成させ、二次整理作業を進めるための基本情報とした。本報告のための集計作業はこのExcelデータから作成した。土器は接合作業を行うため、遺物カードの情報の一部を直接遺物に「注記」した。内容は「遺跡名：出土地点：出土層位：取り上げた月日：遺物番号」である。遺跡名はカタカナ略号(前述)、取り上げ月日は算用数字4桁で表記した。

(2) 二次整理の方法

・遺物カード・遺物登録台帳の点検・修正

遺物カードと遺物登録台帳は相互に照合して点検した。誤りは「水洗台帳」等の他の記録で裏付け

がとれるものや、誤記等の簡易なミスを修正した。土器接合作業の結果、時期が判明したものがあるが、これら情報は修正していない。また、遺物カードは、Excel文書で再作成し、原本の手書きのものと一緒に保管する。

・土器

接合作業は、残存状態が「良好」・「剥離」のものを中心に行い、遺構出土土器の接合は遺構内、遺構間、遺構が位置するグリッド、周辺のグリッドへと展開し、包含層出土のものは破片が多いグリッドから周囲へ広げるように進めた。接合した破片は復元可能なものを接着し「バイサム」で補填して復元した。これら復元土器は立面図等の実測図を作成し、破片土器は特徴が認識しやすい口縁部や底部の破片を中心に選び出し、拓影図と垂直方向の断面図を組み合わせ図示した。すべての掲載土器は観察表を作成した。

・石器等

石器等は、残存状態が「完形」・「準完形」のものを中心に、器種や形態の多様性を示せるように掲載する石器を選び出し、実測図と観察表を作成した。

5. 遺物の分類基準

土器は表8「土器時期分類基準」・表9「土器部位分類基準」・表10「土器残存状態分類基準」で、石器は表11「石器器種分類基準」・表12「石器残存状態分類基準」で、岩石の種類は表13「岩石分類体系表」・表14「岩石（石材）の略号」に基づき分類した。

（末光）

表 8 土器時期分類基準

種別	時代	時期	群	類	土器群・型式名
土器	縄文時代	早期	Ⅰ群	a類	貝殻文・条痕文・沈線文を有する土器群
				b類	竇網路式系土器群
		前期	Ⅱ群	a類	縄文尖底土器群
				b類	円筒土器下層式 それに伴う土器群
		中期	Ⅲ群	a類	円筒土器上層式・サイベ状Ⅴ式 萩ヶ岡1式・萩ヶ岡2式に相当する土器群
				b類	萩ヶ岡3（天神山式）・柏木川式 北岡式に相当する土器群
		後期	Ⅳ群	a類	余市式・タブコブ式・入江式に相当する土器群
				b類	ウサクマイC式・手稲式・ホクケマ式に相当する土器群
				c類	堂林式・三ッ谷式・御殿山式に相当する土器群
		晩期	Ⅴ群	a類	大洞B式・大洞B'式 それに伴う土器群
				b類	大洞C1式・大洞C2式 それに伴う土器群
				c類	大洞A式・大洞A'式 それに伴う土器群
	続縄文時代	Ⅵ群	続縄文土器		
	縄文文化期	Ⅶ群	縄文土器（北大田式を含める）		
	時期不明 判断不可能なもの	不明	剥離や磨耗、小破片が多い		

表 9 土器部位分類基準

部位・名称	内容
口縁部	・口唇部が残存するもの ・口唇部は残存しないが、これに近い部位と判断できるもの
底部	・底面が残存するもの ・底面は残存しないが、これに近い部位と判断できるもの
胴部	・口縁部、底部、不明以外のもの
不明	・部位を特定できないもので、小破片に多い

表 10 土器残存状態分類基準

呼称	内容	備考
良好	・器の形状を留める個体土器 ・破片の表裏面及び割れ口の 残存状態が良いもの	・接合可能な破片 ・文様等が残り、時期判断等に有効な情報が多い
剥離	・破片の表裏面のいずれか、 あるいは両面の約1/2以上が 剥離・剥落しているもの	・接合可能な破片 ・文様が残る場合、時期判断等に有効な情報をもつ ・剥離面は粘土の観察に適する ・破片化した後、人為的に加工されたものもある（再生土製品）
磨耗	・破片が磨耗しているもの	・磨耗した割れ口は接合に耐えられない ・文様等の磨滅により、破片そのものの情報は少ない ・遺物の二次的な移動を考えると重要な情報をもつ ・破片化した後、人為的に加工されたものもある（再生土製品）
小破片	・大きさが長径2 cm程度以下 の小さな破片	・破片が小さいため接合に適さず、復原作業に与える影響も少ない ・破片そのものの情報は少ない ・小さいため注記できないものもある ・ある破片に接合した場合、接合関係についての情報が得られる

表11 石器器種分類基準

分類	器種・名称	備考	主要な 石材
剥片石器	石鏃		黒曜石 頁岩 チャート
	石槍・ナイフ		
	石鏟		
	つまみ付きナイフ	「石匙」	
	スクレイパー		
	U・Rフレイク	定型的な形態を有さないが、人為的な使用痕・加工痕が認められるフレイク U=utilized R=retouched	
	石核		
	フレイク・チップ		
	原石		
礫石器	磨製石斧		緑色泥岩 片岩
	磨製石斧原石		
	たたき石		安山岩 砂岩 凝灰岩 等
	すり石		
	北海道式石冠		
	石錘		
	砥石		
	台石・石皿		
石製品	名称・通称		—
礫	U・Rレキ	人為的な使用痕・加工痕が認められる礫 U=utilized R=retouched	各種
	レキ	自然礫で、道路に人為的に持ち込まれたと考えられるもの	
*被熱しているものは、「(被熱)+器種・名称」と表記した。			

表12 石器残存状態分類基準

分類	分類	内容
剥片石器 ・ 石製品	完形	残存する部分が90%以上のもの
	準完形	「完形」と「半形」の中間的なもの 完形に近いもの
	半形	残存する部分が50～25%程度のもの
	片	残存する部分が25%程度未満のもの
礫石器	完形	大きな割れ口が無いもの 割れ口を有しても機能部が損なわれていないもの
	準完形	割れ口があり、完形の状態を想定でき、残存する部分が75%程度のもの
	半形	割れ口があり、完形の状態を想定でき、残存する部分が50～25%程度のもの
	片	割れ口があり、完形の状態を想定し難く、残存する部分が25%程度未満のもの
礫	完形	割れ口のないもの
	片	割れ口があるもの

表13 岩石分類体系表

火成岩		優白岩（酸性）	中性岩（中性）	優黒岩（塩基性岩）	超塩基性岩
火山岩	火山噴出物（多孔質）	浮岩（軽石）	岩滓（スコリア）		—
	ガラス質（非結晶質） 石基のみ	黒曜岩（石）	—		—
	微晶（球顆）の斑状組織 石基	流紋岩	安山岩	玄武岩	—
半深成岩	細晶の斑状組織 石基	石英斑岩	ひん岩	輝緑岩	—
深成岩	等粒状組織	花崗岩	閃緑岩	斑輝岩	橄欖岩 蛇紋岩
無色・白色	ケイ酸 SiO ₂	66%以上	52~66%	52%以下	45%以下
有色	有色造岩鉱物	10%以下	10~30%	30%以上	60~70%以上
主な 造岩鉱物 の種類	無色	石英 斜長石	斜長石		—
	有色	黒雲母	輝石 角閃石 橄欖石		橄欖石 蛇紋石

堆積岩	
火山砕屑岩	: 火山噴出物から構成される
火山角礫岩	: 32mm以上の火山噴出物（火山岩塊）50%以上含む
凝灰角礫岩	: 32mm以上の火山噴出物（火山岩塊）50%未満含む
火山礫凝灰岩	: 2～32mmの火山噴出物（火山礫）から主体的に構成される
凝灰岩（溶結凝灰岩）	: 2mm以下の火山噴出物（火山灰）から主体的に構成される
砕屑岩	: 丸みを帯びた鉱物片、岩片等から構成され「層理」がみられる
礫岩	: 粒度区分上の礫を50%以上含む ・含有する礫の円磨度によりに分けられる
砂岩	: 粒度区分上の砂を50%以上含む ・砂の粒度により「粗粒」・「細粒」に、硬さにより「硬質」・「軟質」等に分けられる
泥岩	: 粒度区分上の泥（シルト・粘土）50%以上から構成される ・粒度区分から「シルト岩」と「粘土岩」に分けられる ※「シルト岩」・「粘土岩」を含む
頁岩	: 泥岩のうち固結が強く、貝殻状の割れ口を呈するもの
建質頁岩	: 頁岩で透明な石英質（ケイ酸SiO ₂ ）部分を含むもの
有機岩	
チャート	: 潜晶質石英（SiO ₂ ） ・有機質（生物遺体） ・無機質
変成岩	
接触（熱）変成岩	: 熱による変成作用を受けたもの
ホルンフェルス	
広域変成岩	: 熱・圧力による変成作用を受けたもの
片岩	: 再結晶化により「片理」がみられるもの
片麻岩	: 再結晶化が進行し、「斑状変晶」や「片麻状組織」がみられるもの

* 石英質（ケイ酸SiO₂）の岩石・鉱物の便宜的な分類体系

堆積岩	チャート	
	フリント	； チャートのうち、明瞭な貝殻状断口を呈するもの 火打ち石
	珪質頁岩	
	珪藻岩	； 珪質の岩石が熱・圧力による変成作用を受け、極微粒の石英集合体となったもの
変成岩	珪岩（珪石）	； 珪藻類のケイ酸質遺骸が堆積し生じたもの
	珪物	
鉱物	水晶	； 無色透明の石英 結晶質
	碧玉	； 隠微品質の石英で酸化鉄を多量に含む 不透明 暗緑～緑暗色
	玉髄	； 隠微品質の石英で比較的均質なもの 淡褐～灰色
	めのう	； 隠微品質 繊維状・縞状 不透明 玉髄の一種

表14 岩石（石材）の略号

大項目	小項目	岩石名	英語名	略号
火成岩	火山噴出物	軽石（浮岩）	Pumice	P u m
		岩滓（スコリア）	Scoria	S c o
	火山岩	黒曜石（黒曜岩）	Obsidian	O b s
		流紋岩	Rhyolite	R h y
		安山岩	Andesite	A n d
		玄武岩	Basalt	B a s
	深成岩	花崗岩	Granite	G r a
		閃緑岩	Diorite	D i o
		斑輝岩	Gabbro	G a b
超塩基性岩		蛇紋岩	Serpentinite	S e r
		橄欖岩	Peridotite	P e r
堆積岩	火山砕屑岩	火山礫凝灰岩	Lapilli Tuff	L t u
		凝灰岩	Tuff	T u f
	砕屑岩	礫岩	Conglomerate	C o n
		砂岩	Sandstone	S a n
		泥岩（緑色泥岩）	Mudstone (Green Mudstone)	M u d (G r . M u d)
		頁岩	Shale	S h a
	有機岩	チャート	Chert	C h e
変成岩		片岩	Schist	S c h
		片麻岩	Gneiss	G n s
上記以外		名称を表記		

IV章 共立2遺跡の調査

1. 遺構の概要 (図34・35 表15~18)

調査した遺構は、土坑6基、Tピット4基、土器集中5か所、フレイク集中2か所、礫集中1か所である。調査区は中央が高く四方へ傾斜する地形で、南から南東側にP-1~4・6があり、P-5のみ南西側に位置する。P-1は石核と、接合した台石が出土し、楕円形のP-2の覆土は黄色土主体である。P-3とP-6は小型で円形、P-4は楕円形でいずれも浅い。P-5は長方形を呈し坑底は平坦である。Tピットはすべて北側の斜面にみられ、細長い溝状である。TP-1は石鏃が、TP-2からはU・Rレキが出土した。TP-3・4の坑底面は斜面と同じ北方向へ傾斜する。土器集中とフレイク集中は南から南東側に位置する。PS-1~4は縄文時代前期で、PS-5は縄文時代早期である。PS-4・5では復原個体が得られた。FC-1・2は頁岩製のフレイクが出土した。礫集中S-1は北側の斜面にみられ出土した礫石器は被熱している。また、N-13区周辺で行った旧石器調査についても本章で記述する。

2. 土坑 (図36~38 表15)

P-1 (図36 図版4)

位置 L・M-14区 規模 $2.23 \times 1.72 / 1.86 \times 1.35 / 0.33\text{m}$

平面形態 不整な楕円形

確認・調査 包含層調査完了後、やや黒色を帯びた黄色土のひろがりが見られた。トレンチ調査を先行したところ、頁岩と安山岩が出土し、壁の立ち上がりで平坦な坑底面を確認したので、土坑と判断した。

覆土 IV層の黄色土主体である。

坑底面・壁 坑底面はゆるやかにくぼみ、壁は広く開口して立ち上がる。

遺物出土状況 中央~東側で、頁岩製石核(図55-5)と、数点が接合した安山岩製台石が出土した(図56-11)。

時期 周辺の包含層出土遺物から縄文時代前期と判断される。(末光)

P-2 (図36 図版4)

位置 K-15区 規模 $2.10 \times 1.69 / 1.38 \times 0.90 / 0.57\text{m}$ 平面形態 楕円形

確認・調査 II層調査後、II層中で黒色土がφ約1.6mの環状になっているのを検出した。当初風倒木と認識していたが、近隣でP-1が検出されたので、念のためトレンチを入れたところ、左右対称に壁が立ち上がったため、土坑とした。

覆土 上部はIV層主体の黄褐色土が大半を占め、壁際に黒色土混じりの黒褐色土が環状に入る。II層とIII層で構成される。

坑底面・壁 坑底面・壁は傾斜の緩いすり鉢状で、平坦ではない。

遺物出土状況 出土していない。

時期 周辺の包含層出土遺物から縄文時代前期と判断される。(新家)

P-3 (図37 図版4)

位置 M-16区 規模 $0.68 \times 0.63 / 0.39 \times 0.33 / 0.19\text{m}$ 平面形態 円形

確認・調査 包含層調査完了後、円形の黒色土がとレキ2点がみられた。半截したところ、壁の立ち

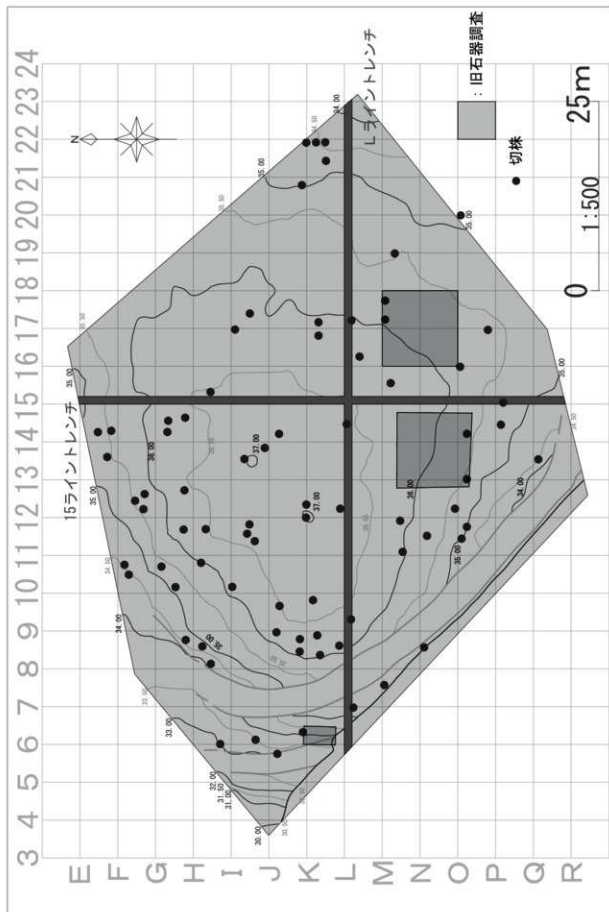


図34 共立 遺跡 表土除去後地形測量図・切株位置図

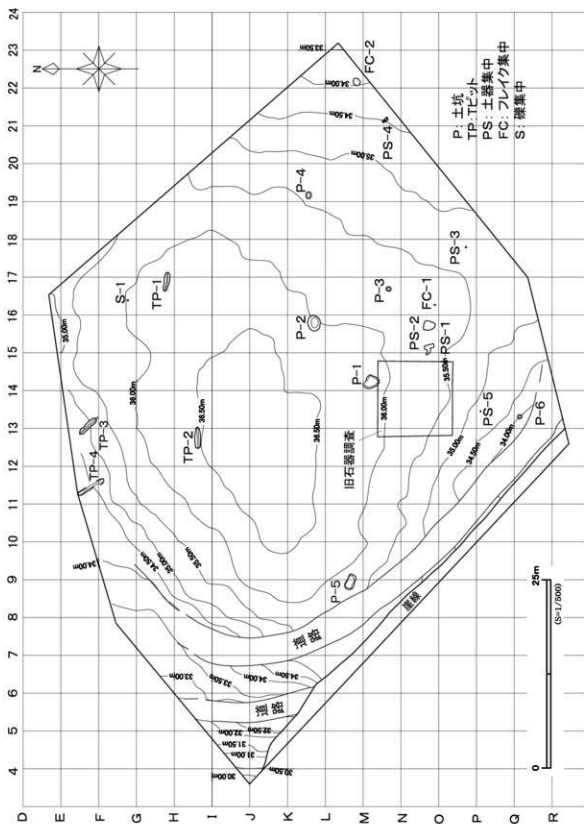


図35 共立2道跡 最終面地形測量図・遺構位置図

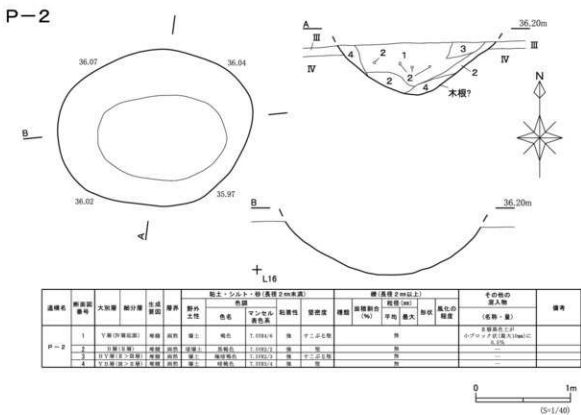
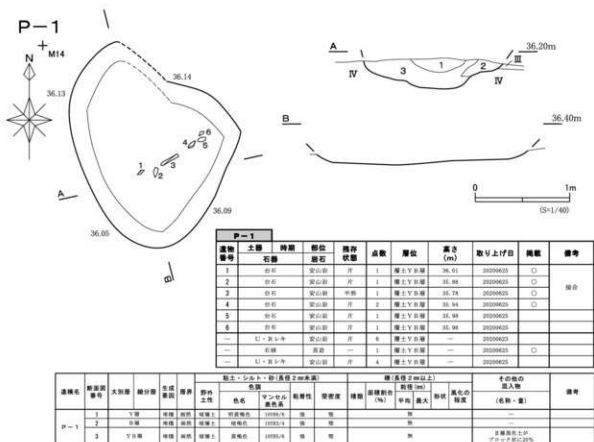
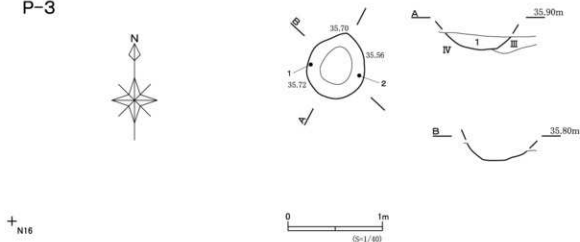


図36 共立2遺跡 P-1・P-2

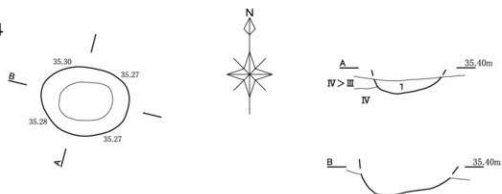
P-3



P-3										
遺物 番号	土器	時期	部位	残存 状態	点数	層位	高さ (m)	取り上げ日	掲載	備考
	石器		附石							
1	(鉋類) レキ		堀底土	完形	1	埋土B層	35.80	20030623		
2	(鉋類) レキ		堀底土	片	1	埋土B層	35.73	20030623	□	

遺構名	調査区番号	大別層	細分層	土質	野外地質	粘土・シルト・砂(表層20cm未満)				礫(表層20cm以上)				その他の埋入物 (名称・量)	備考	
						色名				数量(個)						
						色名	マンガン含有率	粘着性	硬さ	埋没割合(%)	平均	最大	形状	風化の程度		
P-3	1	B層	埋土	埋土	埋土	1100(濃褐色)	1078(7)	中	中	中	中	中	中	中	中	

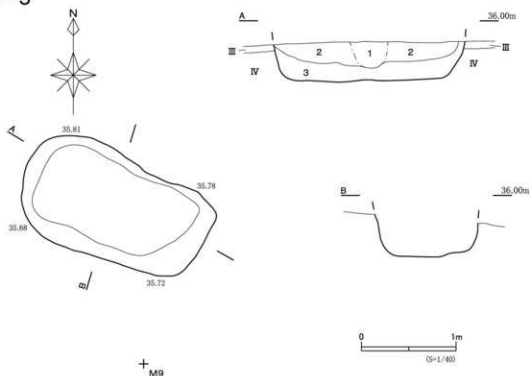
P-4



遺構名	調査区番号	大別層	細分層	土質	野外地質	粘土・シルト・砂(表層20cm未満)				礫(表層20cm以上)				その他の埋入物 (名称・量)	備考
						数量				埋没割合(%)					
						色名	マンガン含有率	粘着性	硬さ	埋没割合(%)	平均	最大	形状	風化の程度	
P-4	1	B層(B1)下(埋土)	埋土	埋土	埋土	黒褐色	100g/2	中	硬	0	0	0	0	0	—

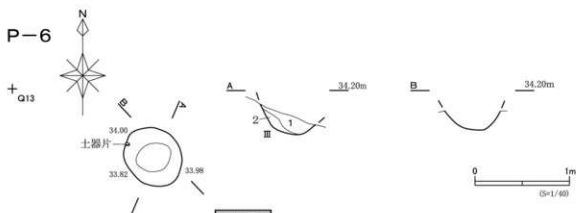
図37 共立2遺跡 P-3・P-4

P-5



遺構名	断面図番号	大形層	細分層	生成要因	層厚	粘土・シルト・砂・炭屑・砂礫層				埋土層(土砂層上)				その他の 埋入物 (石・瓦・土)	備考
						野外 土色	マンセル 色名	粘着性	堅固度	埋土 層厚	埋土 割合 (%)	高さ (cm)	形状	風化の 程度	
P-5	1	分層	分層	堆積	砂層1	灰色	10YR5/1	中	堅						
	2	分層	分層	堆積	砂層2	灰色	10YR5/1	中	堅						
	3	分層	分層	堆積	砂層3	灰色	10YR5/1	中	堅						

P-6



P-6															
遺構名	断面図番号	大形層	細分層	生成要因	層厚	粘土・シルト・砂・炭屑・砂礫層				埋土層(土砂層上)				その他の 埋入物 (石・瓦・土)	備考
						野外 土色	マンセル 色名	粘着性	堅固度	埋土 層厚	埋土 割合 (%)	高さ (cm)	形状	風化の 程度	
P-6	1	分層	分層	堆積	砂層1	灰色	10YR5/1	中	堅						
	2	分層	分層	堆積	砂層2	灰色	10YR5/1	中	堅						
	3	分層	分層	堆積	砂層3	灰色	10YR5/1	中	堅						

図38 共立2遺跡 P-5・P-6

上がりと坑底面を確認したので、土坑と判断した。

覆 土 土に黄褐色土で、炭化物を微量に含む。

坑底面・壁 坑底面は既して平坦で、壁はやや開いて立ち上がる。

遺物出土状況 覆土から被熱した礫が出土した（図55-12）。

時 期 周辺の包含層出土遺物から縄文時代前期と判断される。（末光）

P-4（図37 図版5）

位 置 K-19区 **規 模** $0.94 \times 0.74 / 0.59 \times 0.42 / 0.20\text{m}$ **平面形態** 楕円形

確認・調査 Ⅲ層調査終了後、Ⅳ層上面で黒褐色のひろがりを検出した。半截し、断面で黒色土の緩やかな立ち上がりを確認したため、土坑とした。

覆 土 Ⅱ層とⅢ層が混ざり合う1層のみである。

坑底面・壁 坑底の形状はゆるく丸みを帯び、壁も緩やかに立ち上がる。

遺物出土状況 出土していない。

時 期 周辺の包含層出土遺物から縄文時代前期と判断される。（新家）

P-5（図38 図版5）

位 置 L-8・9区 **規 模** $2.07 \times 1.19 / 1.69 \times 0.89 / 0.40\text{m}$

平面形態 （隅丸）長方形

確認・調査 Ⅱ層調査後、Ⅲ層中に長さ2mほどの黒色土の落ち込みを検出した。幅が1mほどあったので、長軸で半截した。Tピットの可能性も想定し掘り下げた結果、深さ40cm程の所で固い地山にぶつかり、広く平坦な坑底であることがわかった。

覆 土 下半分は黒色土に褐色土が若干混ざり、上半分はⅡ層黒色土が主体である。

坑底面・壁 坑底面は平らで、壁も均等な角度で立ち上がる。小さいが、形状としては竅穴住居様である。

遺物出土状況 出土していない。

時 期 周辺の包含層出土遺物から縄文時代前期と判断される。（新家）

P-6（図38 図版5）

位 置 Q-13区 **規 模** $0.69 \times 0.58 / 0.39 \times 0.31 / 0.21\text{m}$ **平面形態** 円形

確認・調査 Ⅱ層調査後、南端の斜面上のⅢ層上面で、 $\phi 50\text{cm}$ ほどの黒い円形のひろがりを検出した。半截し、浅いがしっかりと掘り込まれた壁と坑底面を確認した。

覆 土 下部はⅡ層とⅢ層が入り混じる暗褐色土層、上部はⅡ層主体の黒色土層である。どちらも堅くしまる。

坑底面・壁 斜面上に掘り込まれているため、北側がやや深く掘り込まれる。構築時は深さ30cmあったと思われる。

遺物出土状況 北西側の縁で土器片が1点出土した（図51-1）。

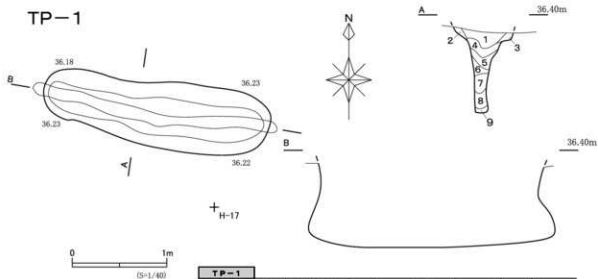
時期 出土土器から、縄文時代前期と判断される。（新家）

3. Tピット（図39-41 表15）

TP-1（図39 図版6）

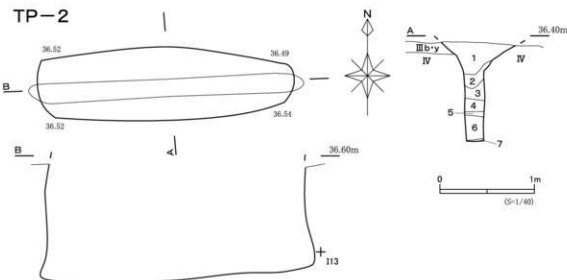
位 置 G-16・17区 **規 模** $2.42 \times 2.62 / 0.74 \times 0.27 / 0.89\text{m}$ **平面形態** 溝状／溝状

確認・調査 包含層調査完了後、細長い黒色土のひろがりを確認した。短軸方向で半截したところ、



TP-1									
遺物番号	土器	時期	部位	保存状態	点数	層位	高さ(m)	取り上げ日	備考
—	石器	—	—	—	—	—	—	20000721	○

遺物番号	新編図番号	大型器	副産品	生成原因	場所	粘土・シルト・砂 (直径2mm未満)				焼土 (直径2mm以上)				その他の遺人物 (名称・量)	備考
						色名				数量 (個)					
						色名	サンケル	粘着性	堅密度	種類	面積割合 (%)	平均	最大	形状	
TP-1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

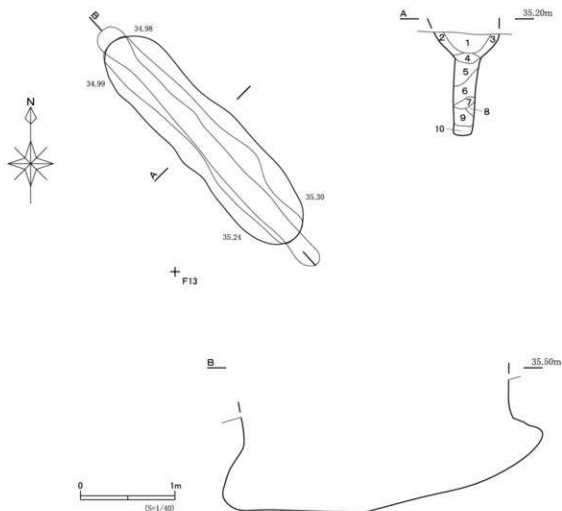


TP-2									
遺物番号	土器	時期	部位	保存状態	点数	層位	高さ(m)	取り上げ日	備考
—	石器	—	—	—	—	—	—	20000805	○

遺物番号	新編図番号	大型器	副産品	生成原因	場所	粘土・シルト・砂 (直径2mm未満)				焼土 (直径2mm以上)				その他の遺人物 (名称・量)	備考
						色名	サンケル 土層	粘着性	堅密度	種類	面積割合 (%)		形状		
											平均	最大			
T-2	1	土器	土器片	焼土	焼土	黄褐色	15752.2	中	軟	—	—	—	—	—	—
	2	土器片	土器片	焼土	焼土	黄褐色	15752.2	中	軟	—	—	—	—	—	—
	3	土器片	土器片	焼土	焼土	黄褐色	15752.2	中	軟	—	—	—	—	—	—
	4	土器片	土器片	焼土	焼土	黄褐色	15752.2	中	軟	—	—	—	—	—	—
	5	土器片	土器片	焼土	焼土	黄褐色	15752.2	中	軟	—	—	—	—	—	—
	6	土器片	土器片	焼土	焼土	黄褐色	15752.2	中	軟	—	—	—	—	—	—
	7	土器片	土器片	焼土	焼土	黄褐色	15752.2	中	軟	—	—	—	—	—	—
	8	土器片	土器片	焼土	焼土	黄褐色	15752.2	中	軟	—	—	—	—	—	—
	9	土器片	土器片	焼土	焼土	黄褐色	15752.2	中	軟	—	—	—	—	—	—

図39 共立2遺跡 TP-1・TP-2

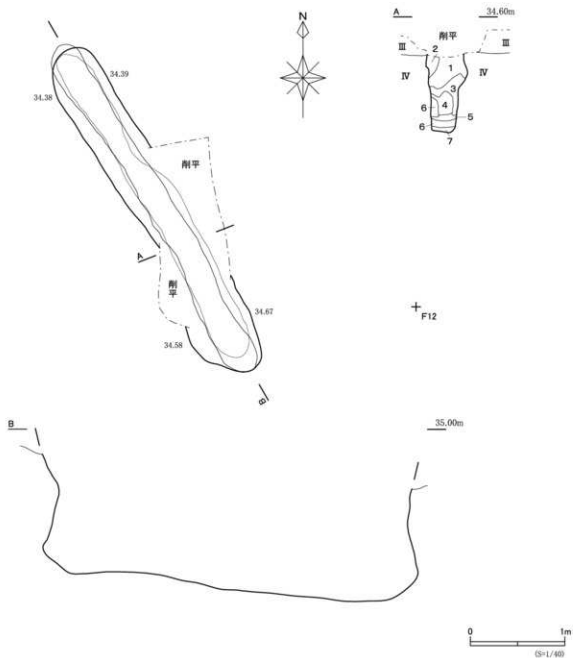
TP-3



遺構名	発掘調査 番号	掘削・シット・掘(風情)と地味表										埋(風情)と地味表				その他の 遺造物 (名称・量)	備考																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																
		大別層	細分層	土質 説明	壁跡 説明	掘削の 性質	マニピヤル 器具表		掘削深 程度	埋藏 深度	埋藏割合 (%)	平均 値	最大 値	形状	風化の 程度																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																		
							掘削 説明	シット 説明																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
TP-3	1	Ⅰ層	Ⅰ-1層	地味	前地	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削	掘削

図40 共立2遺跡 TP-3

TP-4



遺構名	発掘調査番号	大別層	細分層	生成要因	地質	土質	地土・シルト・砂(基盤・下地等)				層(基盤・下地等)				その他の遺構		備考
							色名	マンセル値	粘着性	堅固度	種類	面積割合(%)	平均	最大	形状	高さの程度	
TP-4	1	1層(土層)	地盤	自然	地盤上	粘土	1.0YR 5/1	強	粘り強	強	無	無	無	無	無	無	無
	2	2層(土層)	地盤	自然	地盤上	粘土	1.0YR 5/1	強	粘り強	強	無	無	無	無	無	無	無
	3	3層(土層)	地盤	自然	地盤上	粘土	1.0YR 5/1	強	粘り強	強	無	無	無	無	無	無	無
	4	4層(土層)	地盤	自然	地盤上	粘土	1.0YR 5/1	強	粘り強	強	無	無	無	無	無	無	無
	5	5層(土層)	地盤	自然	地盤上	粘土	1.0YR 5/1	強	粘り強	強	無	無	無	無	無	無	無
	6	6層(土層)	地盤	自然	地盤上	粘土	1.0YR 5/1	強	粘り強	強	無	無	無	無	無	無	無
	7	7層(土層)	地盤	自然	地盤上	粘土	1.0YR 5/1	強	粘り強	強	無	無	無	無	無	無	無

図41 共立2遺跡 TP-4

平坦な面と壁の立ち上がりを確認したので、Tピットと判断した。

覆 土 9層に分けた。層界は曲線で、下半分の第7・8層は黄色土主体で、最下層は黒色土主体である。

坑底面・壁 長軸方向の坑底面は概して平坦で、壁はオーバーハングして直立気味に立ち上がる。

遺物出土状況 覆土第9層から頁岩製石鏃（図55-6）が出土した。

時 期 縄文時代と考えられる。 (菊池)

TP-2 (図39 図版6)

位 置 H-12・13区 **規 模** 2.72×0.78/2.91×0.28/1.05m **平面形態** 溝状/溝状

確認・調査 遺構確認調査中、細長い黒色土のひろがりを確認した。短軸方向で半載したところ、平坦な面と壁の立ち上がりを確認したので、Tピットと判断した。

覆 土 7層に分けた。層界は上位が曲線で、下位は水平で、最下層は黒色土主体である。

坑底面・壁 長軸方向の坑底面は西側に傾斜し、壁は若干内傾して立ち上がり、そこから上は直立気味である。

遺物出土状況 覆土第3層から安山岩のU・Rレキ（図56-13）が出土した。

時 期 縄文時代と考えられる。 (末光)

TP-3 (図40 図版7)

位 置 E-12・13区 **規 模** 2.83×0.75/3.34×0.29/1.09m **平面形態** 溝状/溝状

確認・調査 遺構確認調査中、細長い黒色土のひろがりを確認した。短軸方向で半載したところ、坑底面と壁の立ち上がりを確認したので、Tピットと判断した。

覆 土 10層に分けた。層界の多くは曲線である。中位の第5・6層は片側一方からの堆積で、最下層は黒色土主体である。

坑底面・壁 長軸方向の坑底面は北側へと傾斜し、壁は明瞭にオーバーハングする。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

時 期 縄文時代と考えられる。 (菊池)

TP-4 (図41 図版7)

位 置 E・F-11区 **規 模** 3.93×0.74/4.00×0.45/1.26m **平面形態** 溝状/溝状

確認・調査 北側斜面の包含層調査中、細長い黒色土のひろがりがみられたが、沢状に自然堆積した土と思い、部分的に掘り下げてしまった。途中でTピットの可能性を考え、短軸方向で半載したところ、壁の立ち上がりと坑底面がみられた。非常に長い溝状のTピットである。

覆 土 II層の黒色土、III・IV層の黄褐色土が混ざりあう。上部は崩落等により埋まったと思われる、軟らかい。坑底面直上には黒色土層が数cm堆積（覆土第7層）しており、Tピットの典型的な層序である。

坑底面・壁 坑底は北の斜面下に向かって緩やかに傾斜する。長軸上の両端は、坑底面から30cmくらいの高さまでオーバーハングしながら立ち上がり、80cmくらいの高さでやや内側に閉じている。

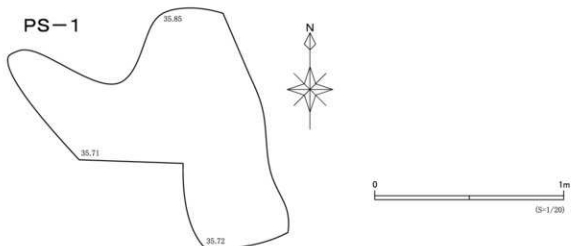
遺物出土状況 出土していない。

時 期 縄文時代と考えられる。 (新家)

4. 土器集中

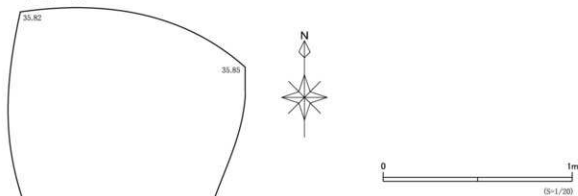
土器集中 (図42~44 表16)

PS-1 (図42 図版8)



+ O15

PS-2



PS-1										
遺物番号	土器	時期	部位	残存状態	点数	層位	高さ(m)	取り上げ日	掲載	備考
—	石器		基石							
—			小軸石	瓦葺	1	第層		20200601		
—					8	第層		20200601		
—				瓦葺	3	第層		20200601		
—					5	第層		20200602		
—					2	第層		20200602		
—			新築		2	第層	35.94	20200601		
—					4	第層	~	20200601		
—	土器 (雑群)		新築		1	第層	36.71	20200601	○	
—			新築		1	第層		20200602		
—			小破片		19	第層		20200601		
—			小破片		2	第層		20200601		
—			小破片		16	第層		20200602		
—			小破片		9	第層		20200602		

PS-2										
遺物番号	土器	時期	部位	残存状態	点数	層位	高さ(m)	取り上げ日	掲載	備考
—	石器		基石							
—				瓦葺	12	第層		20200623		
—					2	第層		20200623		
—	土器 (雑群)		新築		5	第層	35.92	20200623	○	
—			新築		7	第層		20200623		
—			小破片		16	第層		20200623		
—	瓦・瓦フシイタ		瓦葺	—	1	第層	35.77	20200623	○	
—	ブレイク		瓦葺石	—	1	第層		20200623		

+ O16

図42 共立2遺跡 PS-1・PS-2

PS-3



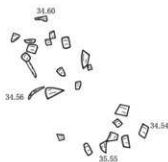
PS-3									
遺物 番号	土器 石器	時期	部位 器石	残存 状態	点数	層位	高さ (m)	取り上げ日	掲載
—	土器	平明	底面	瓦葺	1	表層	35.21	20090721	前面
—				瓦葺	2	表層	—	20090721	前面
—			側面	磨面	10	表層	—	20090717	前面
—				小破片	10	表層	35.15	20090717	前面
—	(底面)	側面	小破片	1	表層	—	—	20090717	前面
—				—	—	—	—	—	—

A 35.40m



+ P18

PS-4



PS-4									
遺物 番号	土器 石器	時期	部位 器石	残存 状態	点数	層位	高さ (m)	取り上げ日	掲載
—	土器	(表層)	底面	瓦葺	3	表層	34.53	20090721	O
—				瓦葺	1	表層	—	20090721	
—			側面	瓦葺	10	表層	—	20090721	
—				磨面	3	表層	34.60	20090721	
—	土器	(表層)	底面	瓦葺	11	表層	—	20090721	O
—				瓦葺	2	表層	—	20090721	
—			側面	磨面	4	表層	—	20090721	
—				小破片	4	表層	—	20090721	

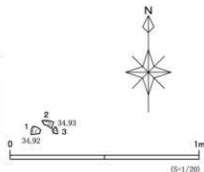
+ N21

図43 共立2遺跡 PS-3・PS-4

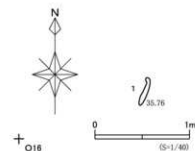
PS-5

P13

PS-5									
遺物 番号	土器 石器	時期	部位 破石	残存 状態	点数	層位	高さ (m)	取り上げ日	掲載 備考
1	土器	1期	底面	良好	1	第3層	34.92~34.95	20090731	○
2	土器	1期	底面	良好	1	第3層	34.93~34.94	20090731	○
3	土器	1期	底面	良好	1	第3層	34.92~34.94	20090731	○
—	土器	1期	底面	良好	1	第3層	—	20090731	—
—	土器	1期	底面	小破片	1	第3層	—	20090731	—
—	土器	2期	底面	良好	2	第3層	—	20090731	—

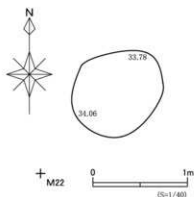


FC-1



FC-1									
遺物 番号	土器 石器	時期	部位 破石	残存 状態	点数	層位	高さ (m)	取り上げ日	掲載 備考
1	フレイタ	良好	—	5	第3層	34.75~34.77	20090731	—	—
—	フレイタ	良好	—	5	第3層	—	20090731	○	—
—	フレイタ	良好	—	2	第3層	—	20090731	—	土壌水産資源

FC-2



FC-2									
遺物 番号	土器 石器	時期	部位 破石	残存 状態	点数	層位	高さ (m)	取り上げ日	掲載 備考
—	土器	第3層	底面	良好	1	第3層	—	20090731	○
—	土器	第3層	底面	良好	1	第3層	35.04	20090731	○
—	12・Bフレイタ	良好	—	1	第3層	—	20090731	○	—
—	フレイタ	良好	—	25	第3層	34.98	20090731	—	—
—	フレイタ	良好	—	4	第3層	—	20090731	—	—
—	フレイタ	良好	—	5	第3層	—	20090731	—	—
—	フレイタ	良好	—	38 (1層)	—	—	20090731	—	土壌水産資源

S-1



S-1									
遺物 番号	土器 石器	時期	部位 破石	残存 状態	点数	層位	高さ (m)	取り上げ日	掲載 備考
1	（破片）破石	安山岩	底面	1	第3層	35.03~35.05	20090731	○	—
2	（破片）破石	安山岩	底面	1	第3層	35.04~35.05	20090731	—	—
3	（破片）破石	安山岩	底面	1	第3層	35.03~35.04	20090731	○	—

図44 共立2遺跡 PS-5・FC-1・FC-2・S-1

位 置 N-14・15区 層位 II・III層 規 模 1.44×1.17m

確認・調査 東西方向15ライン沿いの先行トレンチを調査中、II～III層で土器がまとまって出土した。周囲に掘り広げて範囲を記録して取り上げた(図51-2・3)。

時 期 縄文時代前期前半と考えられる。(末光)

P S-2 (図42 図版8)

位 置 N-15区 層位 III層 規 模 1.57×1.26m

確認・調査 包含層調査中、III層で土器がまとまって出土し、範囲を記録して取り上げた(図51-4・5、図55-7)。

時 期 出土遺物から縄文時代前期と考えられる。(末光)

P S-3 (図43 図版8)

位 置 O-17区 層位 III層 規 模 0.19×0.16/0.10m

確認・調査 包含層調査中、III層で土器がまとまって出土した。平面の範囲を記録した後、トレンチを設けて断面も確認した。遺物は非常に脆弱で土中から動かすと崩壊してしまい、取り上げることはできなかった。

時 期 縄文時代と推測する。(末光)

P S-4 (図43 図版8)

位 置 M-21区 層位 II・III層 規 模 0.85×0.45m

確認・調査 包含層調査中、II～III層で土器がまとまって出土し、破片が散在する状況を記録してから取り上げた。二次整理で復原個体となった(図50-2、図51-6・7)。

時 期 縄文時代前期前半と考えられる。(末光)

P S-5 (図44 図版9)

位 置 P-13区 層位 III層 規 模 0.14×0.07m

確認・調査 包含層調査中、III層で土器の底部破片がまとまって出土し、その状況を図化してから取り上げた。二次整理で復原個体となった(図50-1)。

時 期 縄文時代早期後半と考えられる。(末光)

5. フレイク集中

フレイク集中(図44 表16)

F C-1 (図44 図版9)

位 置 N-16区 層位 III層 規 模 0.30×0.07m

確認・調査 包含層調査中、III層で頁岩製フレイクがまとまって出土し、範囲を記録して取り上げた(図55-8・9)。

時 期 縄文時代と考えられる。(末光)

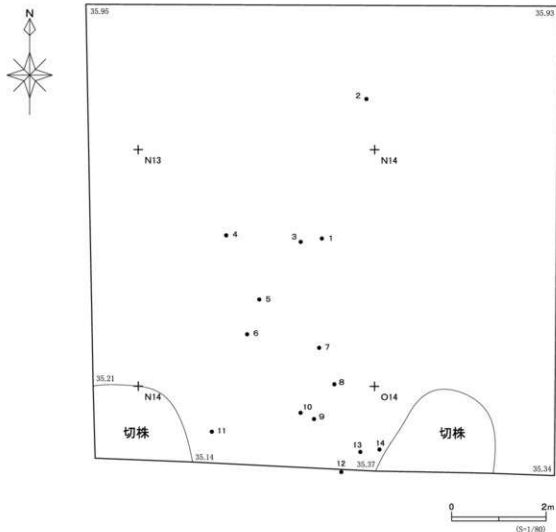
F C-2 (図44 図版9)

位 置 L-22区 層位 I層 規 模 1.03×0.90m

確認・調査 包含層調査中、I層で頁岩製フレイクがまとまって出土し、範囲を記録して取り上げた(図51-8・9、図55-10)。

時 期 出土土器から縄文時代中期と考えられる。(末光)

旧石器調査



旧石器調査表										
遺物番号	土器	時期	層位	出土状況	品数	層位	高さ(m)	取り上げ日	図録	備考
1	ナイフ型石	原始	第1層	1	1	第1層	35.79	20090721	○	
2	フレイク	原始	---	1	1	第1層	35.88	20090806	+	
3	ナイフ型石	原始	第1層	1	1	第1層	35.88	20090806	○	ナイフ型石
4	フレイク	原始	---	1	1	第1層	35.84	20090806	+	
5	フレイク	原始	---	1	1	第1層	35.89	20090806	+	
6	フレイク	原始	---	1	1	第1層	35.94	20090806	+	
7	フレイク	原始	---	1	1	第1層	35.93	20090806	+	
8	ナイフ型石	原始	---	1	1	第1層	35.93	20090806	+	
9	ナイフ型石	原始	---	1	1	第1層	35.91	20090806	○	
10	フレイク	原始	---	1	1	第1層	35.89	20090806	+	
11	フレイク	原始	---	1	1	第1層	35.91	20090806	+	
12	フレイク	原始	---	1	1	第1層	35.88	20090806	+	
13	フレイク	原始	---	1	1	第1層	35.94	20090806	+	
14	フレイク	原始	---	1	1	第1層	35.93	20090806	○	

図45 共立2遺跡 旧石器調査

6. 礫集中

礫集中

S-1 (図44 表16 図版9)

位置 F-16区 層位 II層 規模 1.44×1.17m

確認・調査 包含層調査中、II層で被熱したレキがまとまって出土した。出土状況を記録して取り上げた(図55-14・15)。

時期 縄文時代と考えられる。(末光)

7. 旧石器調査

旧石器調査(図45 表16・25 図版10)

位置 M-O-12~14区 層位 III・IV層 規模 7.89×3.56m

確認・調査 包含層調査中、N-13区のF層(風倒木痕)でナイフ型石器に類似した頁岩製石器(図55-1)が出土したので、これの出土地点から5m四方へ拡大した範囲について旧石器調査を行った。IV層の黄色ローム層を手掘りで20cm掘り下げたところ、頁岩製フレイクが13点出土しIII・IV層で取り上げた(図55-2~4 表25・26)。石器の特徴からは旧石器と断定しきれないが、出土層位がIV層ロームであることから可能性も完全に否定できない。さらに15ライトレンチを挟んだ東側、M・N-16・17区も同様に掘り下げて調査したが、ここからは遺物は出土しなかった。

時期 後期旧石器時代あるいは縄文時代であろう。(末光)

8. 包含層出土遺物の概要(図46~49 表19・20)

出土点数表(表19・20)

包含層の土器は1,297点出土した。出土層位はIII層が38%で多く、ついでII層31%、I層29%である。時期分類ではIII層が多いが、二次整理でII群と判明したものや判別できない胴部破片を含むが、II群が最も多いと考えられる。他、底部の破片が非常に少ない。包含層の石器は1,397点出土した。出土層位はI層が41%で、ついでIII層が34%、II層が20%である。内訳は剥片石器49%、礫石器17%、石製品0.2%、レキ34%である。剥片石器は頁岩が多く、73%がフレイクである。多い器種は順に、スクレイパー36点、つまみ付きナイフ20点、石鏃18点、石錐3点である。礫石器では、すり石とたたき石が多く、両者が礫石器の65%を占め、被熱したものも多い。ついで台石の片が多く、以下、石錘、磨製石斧、砥石である。石製品は3点で、レキは66%がU・Rレキで、うち28%が被熱する。礫石器の石材は安山岩が多い。

出土分布図(図46~49)

「土器合計」は、K・L-21区付近の東側が最も多く、次に南側に多い。中央付近のやや北側と北西側の斜面では出土していない。「I群」は南西側、「II群」は東と南側にみられる。「III群」は先に述べたように二次整理で多くがII群と判明した。「IV群」はLラインにみられる。残存状態は、「良好」は土器合計と概ね同じで、「剥離」は調査区の中央になく、周囲の斜面にみられる。「磨耗」は強いといえば、東側と南側にやや多い。「小破片」は一見全体にみられるが、点数が多いグリッドは東側のK-M-21区と、南側のN-15・O-24区である。「石器・レキ合計」で多いのは、I-18区、K-17区、21ラインより東側と、南側のM-O-13~16区付近、L-10~12区、北側のG-12区である。「石鏃」は13ラインより東側に散

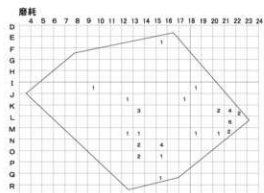
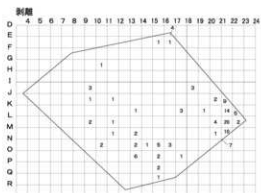
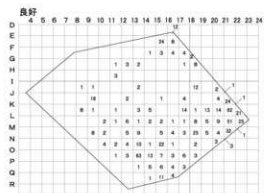
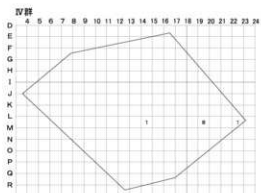
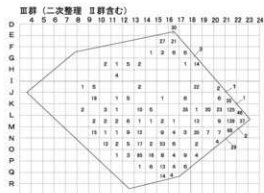
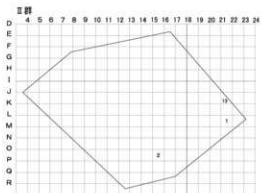
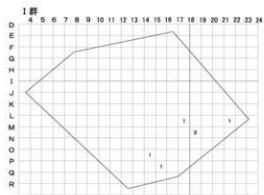
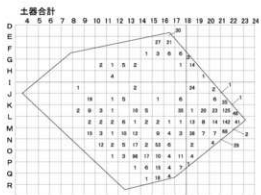


図46 共立2遺跡 遺物出土分布図(1)

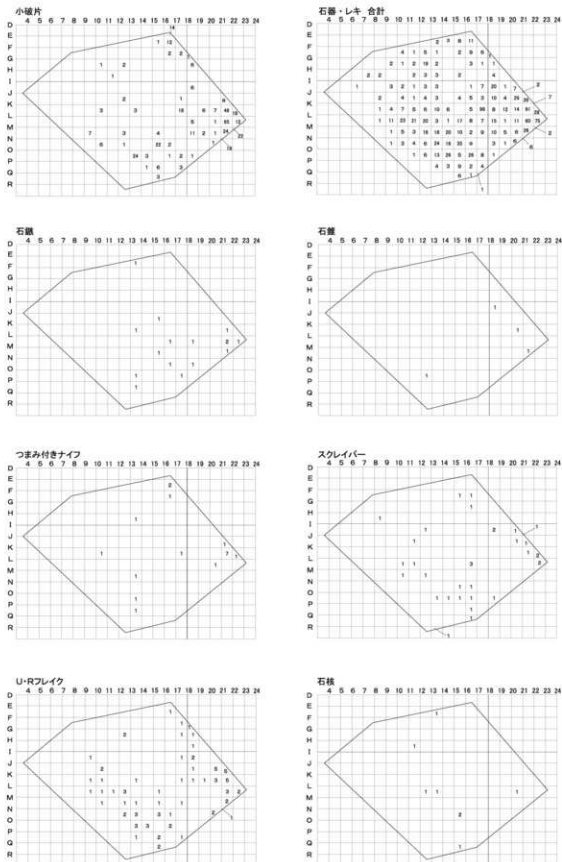


図47 共立2遺跡 遺物出土分布図(2)

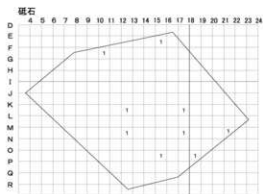
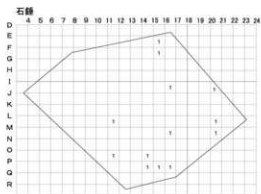
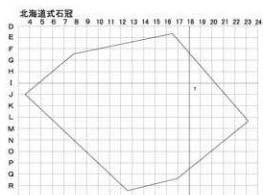
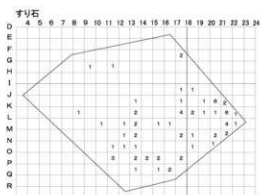
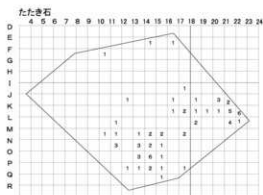
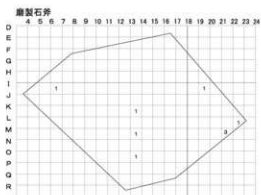
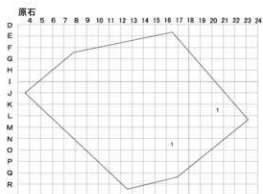
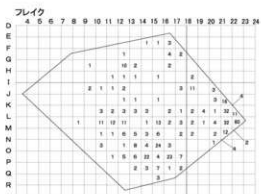


図48 共立2遺跡 遺物出土分布図(3)

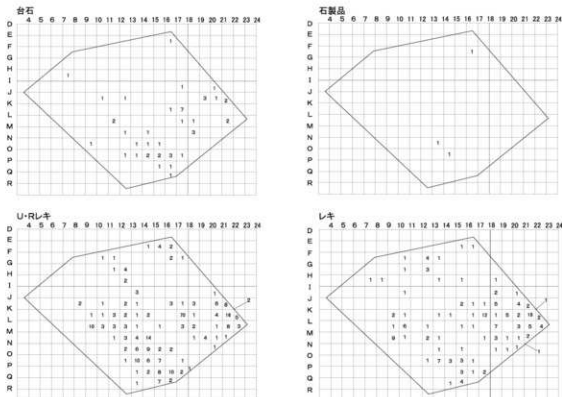


図49 共立2遺跡 遺物出土分布図(4)

的にみられる。「石錐」は東側と南側にみられる。「つまみ付きナイフ」は東側のK-21区、北側のE・F-16区に多い。「スクレイパー」は調査区の東側に多く、ここ以外にも散在的にみられ、L-16区が最も多い。「U・Rフレイク」は調査区中央にはみられず、東西側の斜面に広くみられる。「石核」は調査区の西側以外で散在的である。「フレイク」は21ラインより東側と、南側のN・O-14~16区に多く、北側の斜面ではG-12区にやや多い。「原石」は二つのグリッドからの出土である。「磨製石斧」は散在的で、M-21区に多い。「たたき石」は南東側にあり、多いグリッドはK-21・22区とO-14区である。「すり石」も南東側にみられ、多いグリッドはJ-20区とK-21区である。「北海道式石冠」はI-18区の出土である。「石錘」は西側以外に少数みられる。「砥石」は北側の斜面と南から南東側にみられる。「台石」が多いのは、J-19区付近、K-17区付近、O-14~16区付近である。「石製品」は南と北側にみられる。「U・Rレキ」はK-17区が最多で、K-21区、L-9区、M-14区、O-13区、P-16区にやや多い。「レキ」(自然礫)は概して全体にみられ、多いのはK-21区とK-17区である。

9. 土器 (図50~54 表21~24 図版12・13)

(1) 復原土器 (図50 表21・22 図版12)

遺構(PS)出土

1はPS-5出土の底部で、開く胴部から底部へとすぼまる器形である。外面には横走る条がみられ、内面はナデである。I群b類と推測する。2は推定復原した深鉢で、直立気味の口縁部から若干すぼまり、胴部はさほど膨らまない器形である。波状の口縁部で、外面は原体端部も明瞭に回転押捺したL R斜行縄文が施される。

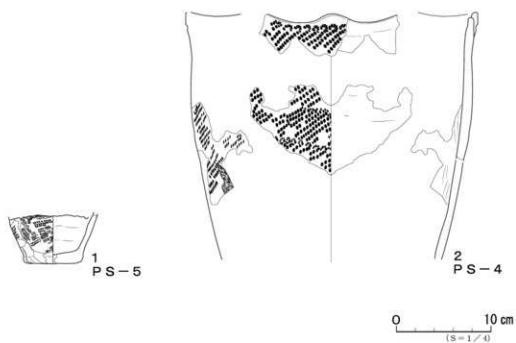


図50 共立2遺跡 遺構出土復原土器

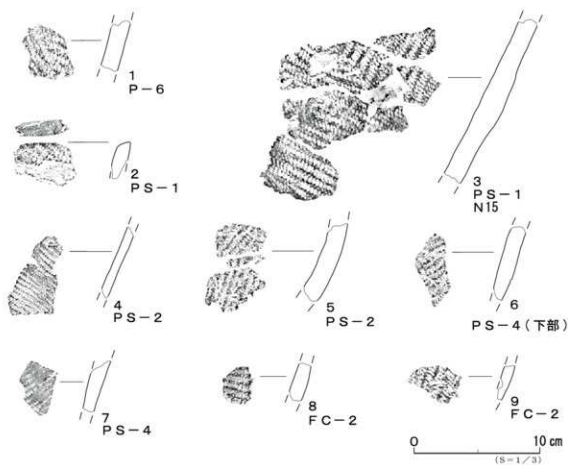


図51 共立2遺跡 遺構出土破片土器

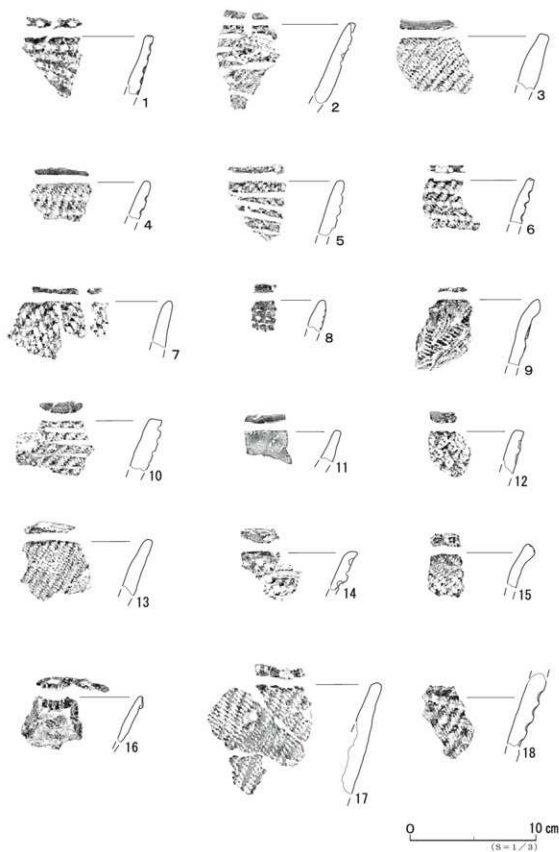


図52 共立2遺跡 包含層出土破片土器(1)

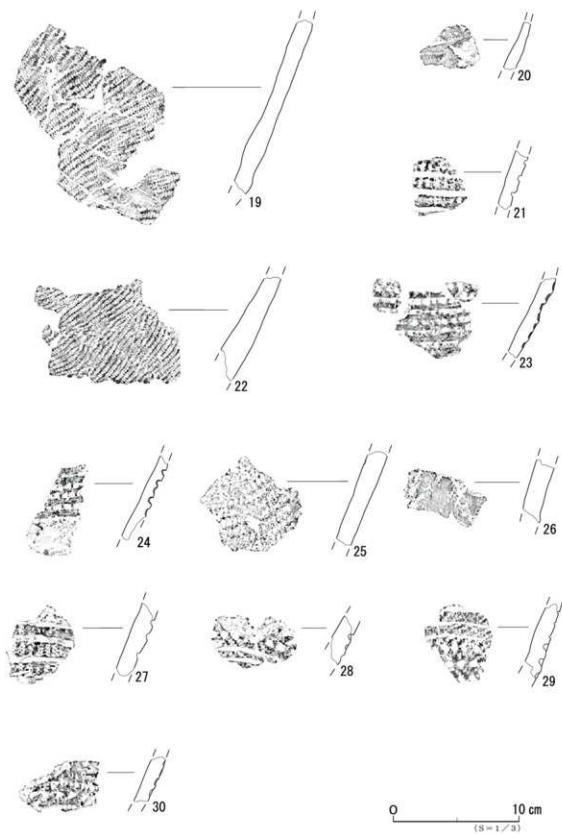


图53 共立2遺跡 包含層出土破片土器(2)

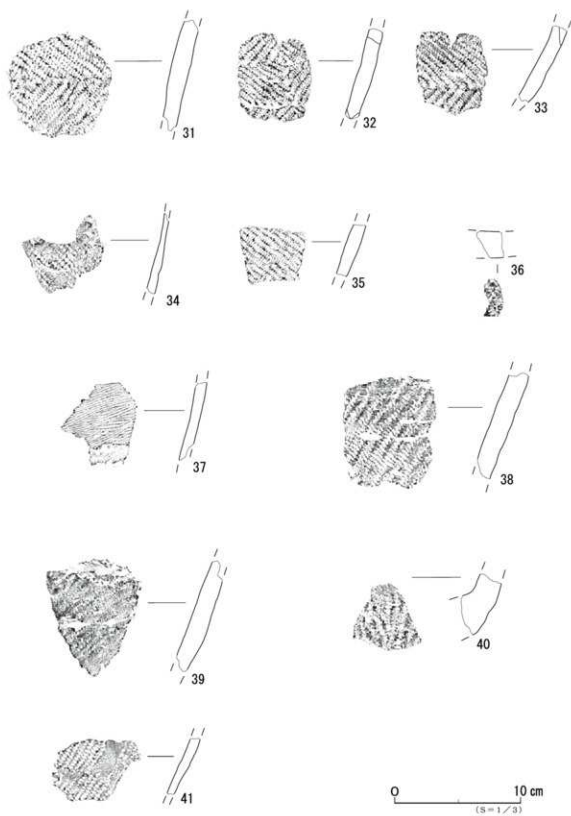


図54 共立2遺跡 包含層出土破片土器(3)

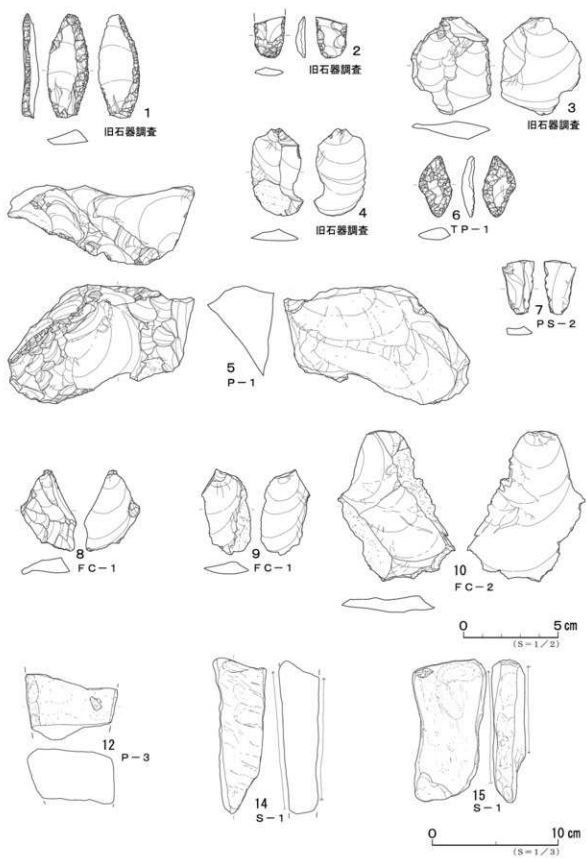


図55 共立2遺跡 遺構出土石器(1)

2の土器は波状口縁であることや器壁の厚さから、一次整理ではⅢ群と考えていたが、二次整理で復原できたことで器形や文様からⅡ群と判断した。これにより、他にⅢ群に分類したものがⅡ群である可能性を考える契機となったが、再分類する時間はなく、掲載の遺物についてのみ分類を訂正した。

(2) 破片土器

遺構出土 (図51 表23 図版12)

1はP-6出土で、RL縄文が施される。2はPS-1出土の口縁部で、外面はRL、口唇部はナデである。3は7点が接合した胴部で別原体による羽状縄文が施される。4はPS-2出土で、細かなLR原体による施文である。5はPS-2出土で、LR斜行縄文が観察される。6はPS-4出土で、綾絡文らしき文様がある。7はPS-4出土で、施文が浅い。8・9はFC-2出土で、8はRL、9はLRである。

包含層出土 (図52~54 表24 図版13)

・口縁部破片：1は口唇部に刺突文、外面に押引文が施される。2の外面は沈線文と刺突文で、口縁部近くは縦の刻みがあり、「土器片鍾」の可能性もある。3の口唇部はナデで、地文はLRである。4・6はLR縄文の後に押引文が施される。5はRL縄文と沈線文がみられる。7は外面がLR、内面はナデである。8は二股状の工具による刺突文がみられる。9は器面に貼付が施され、捻紐が押捺される。10は胎土に海綿骨針を含み、外面はLR縄文と沈線文である。11は無文である。12は円形刺突文と沈線文が観察される。13はLR縄文で、胎土に海綿骨針がみられる。14は刺突文と沈線文がみられる。15は外面に結束第1種の痕跡がみられる。16は突起部で、細い粘土紐とRの圧痕文がみられる。17の地文はRLで、内面はナデである。

・胴部・底部破片：18は4・6と同一個体と考えられ、地文施文後に押引文が施される。19は8点が接合したもので、LR縄文が施される。20は横走する条がみられる。21・27は縦走するLR縄文と沈線文が施される。22の胎土は繊維が多く、外面はLR縄文である。23・24の施文は押引文あるいは節のある沈線文がみられる。25は外面に右上がりの条が観察される。26はナデ調整で、条らしき痕跡もみられる。28・29は地文後に刺突文と沈線文が施され、28はRL縄文、29はLR縄文である。30は刺突文と押引文がみられる。31~33は燃りの異なる原体で羽状縄文が施され、32・33は外面からの挟りがあり「土器片鍾」と考えられる。34は器壁が薄く、RL縄文が施される。35はRL縄文がみられる。36は底部で、37は条痕文が施される。38は厚手でLR縄文がみられ、39は胎土に海綿骨針を含み、施文が浅い。40は丸底か尖底部分と考えられ、41は薄手でLR縄文がみられる。

10. 石器 (図55~62 表25~28 図版14~17)

(1) 遺構出土の石器

・剥片石器 (図55・56 表25・26 図版14)

旧石器調査：1は背腹両面に広い剥離面があり、両側縁に調整が施され、ナイフ型石器と考えたものである。2は曲線的な基部に両面から調整が施される。3は背面右側縁に連続する剥離痕がみられ、4は下端側に原礫面を残す。石材はすべて頁岩で、これら以外の旧石器調査の出土遺物は、表26と図版14に掲載した。

P・PS・FC出土：5はP-1出土の石核で上端と表面に剥離痕がみられる。6はTP-1出土の石核で左右非対称である。7はPS-2出土で、側縁に微細な剥離痕がみられる。8・9はFC-1出土で、表面に8は複数の剥離痕、9は原礫面が残る。10はFC-2出土で方解石の結晶がみられる。

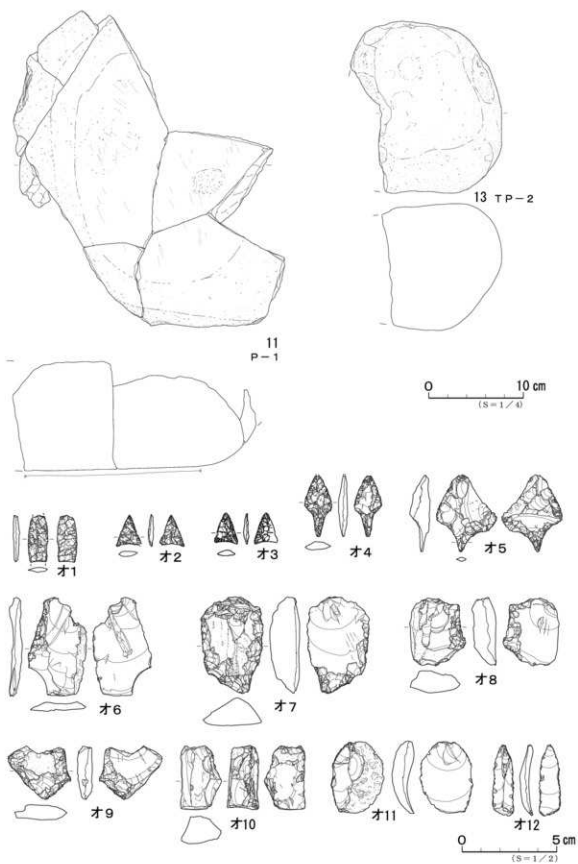


図56 共立2遺跡 遺構出土石器(2)・黒曜石原産地分析試料

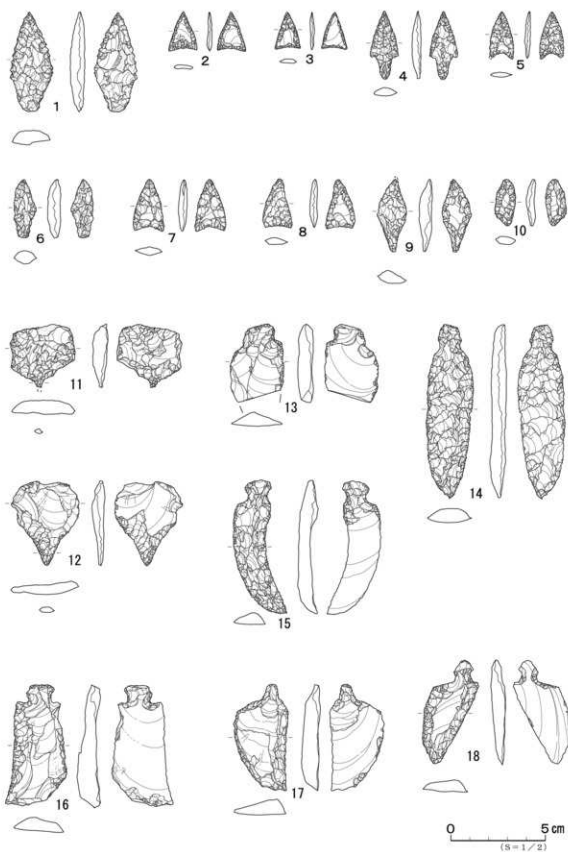


図57 共立2遺跡 包含層出土石器(1)

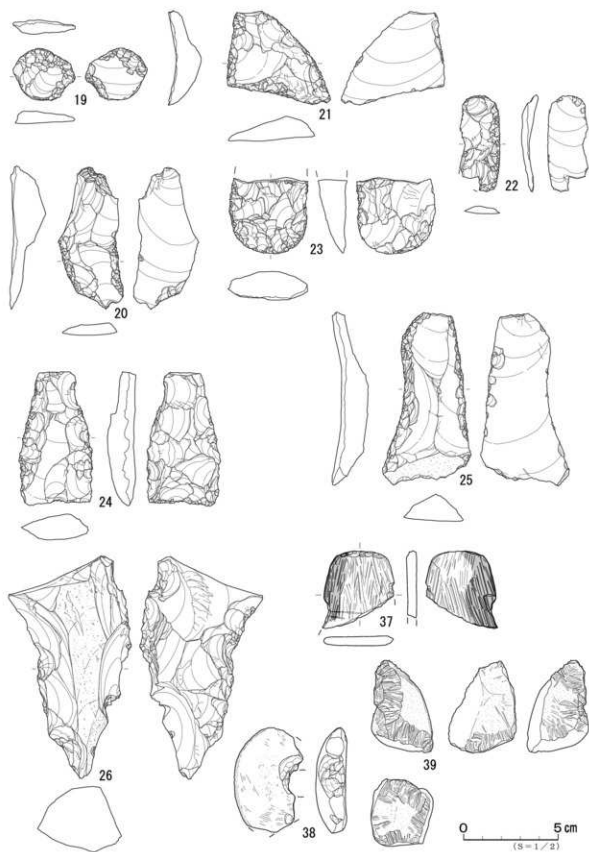


图58 共立2遺跡 包含層出土石器(2)

・礫石器 (図55・56 表25 図版14)

P・T・P・S出土: 11はP-1出土に、周辺の包含層出土のものが接合した大型の台石で、表面は平坦である。12はP-3出土で被熱する。13はT・P-2出土で、石材は安山岩である。14・15はS-1出土の砥石とともに被熱する。

(2) 黒曜石原産地分析試料 (図56 表27 口絵3・図版14)

オ1の石鏃は細粒の小球果が筋状で多量にみられ、赤井川産である。オ2の石鏃は小型で小球果はなく、上土幌産である。オ3の石鏃も小型で赤色部分があり、上土幌産である。オ4の石鏃の石基は透明で細～中粒の小球果が無作為にみられ、豊浦産(豊泉産)である。オ5は破損した石槍・ナイフの基部を利用した石鏃で、中粒の小球果が筋状にみられる。結果は赤井川産である。オ6のスクレイパーは小球果がなく、上土幌産である。オ7のスクレイパーは中～細粒の小球果が筋状に多量にみられ、赤井川産である。オ8のスクレイパーは細～微粒の小球果が筋状で、赤井川産である。オ9のスクレイパーは中～粗粒の小球果がみられ、豊浦産である。オ10の石核の小球果は中粒で筋状でなく、豊泉産である。オ11の本来の形状は円礫状と考えられ、小球果はみられない。上土幌産である。オ12は赤色部分があり、上土幌産である。

(3) 包含層出土の石器

・剥片石器 (図57・58 表28 図版15)

石鏃 (1～10)

1の石材は微粒の小球果が筋状にみられる黒曜石である。2・3は三角形で背腹両面に剥離面を残す。4は有茎で、縦断面は背面側が曲線的に高まる。5は明瞭な凹基で、両側縁は曲線的である。6は頁岩製で厚みがある。7は頁岩製で、同じ形の黒曜石製の5に比べて、厚みがある。8は左右非対称である。9は有茎で菱形に近い形状を呈する。10は先端部の尖りがみられない。

石鏃 (11・12)

11は機能部が破損し、持ち手部分は両面調整である。12は機能部を両面調整で作出している。

つまみ付きナイフ (13～18)

13は黒曜石製で下半部を破損する。14は頁岩製の両面調整である。15は曲線的な形状で、背面は全面調整である。16のつまみ部分は両面調整である。17はチャート製で、つまみ部分に明瞭な挟りがみられない。18の背面は周辺が調整され、先行剥離面を広く残す。

スクレイパー (19～25)

19は黒曜石製のラウンドスクレイパーである。20は下半分が薄く、この部分の両側縁に刃部を有する。21は三角形を呈し、剥離は背面のみにみられる。22は背面右側縁に刃部がある。23は上端部を破損し、刃部は曲線的である。24は台形を呈する両面調整で、石筥と称されるものである。25の背面は下端部に原礫面を残し、両側縁に刃部を有する。

石核 (26)

26は厚みがあり、左右両方向からの剥離痕が背原両面にみられる。

・礫石器 (図59～62 図版15～17)

直製石斧 (27～29)

27は緑色泥岩製で、上端側、裏面、刃部を破損する。28は片岩製で、横断面が楕円形で厚みがあり、下端部を破損する。29は全面に研磨痕がみられる定角式磨製石斧で、刃部側を破損する。

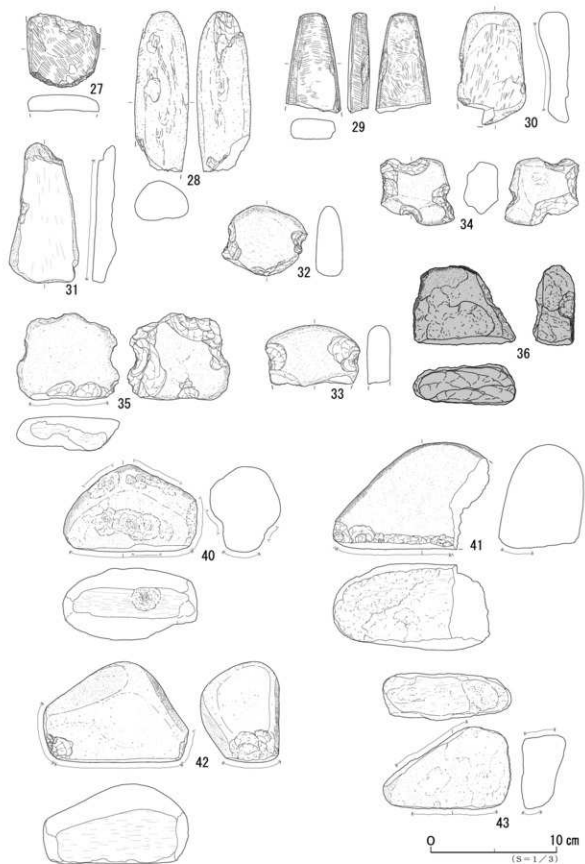


圖59 共立2遺跡 包含層出土石器(3)

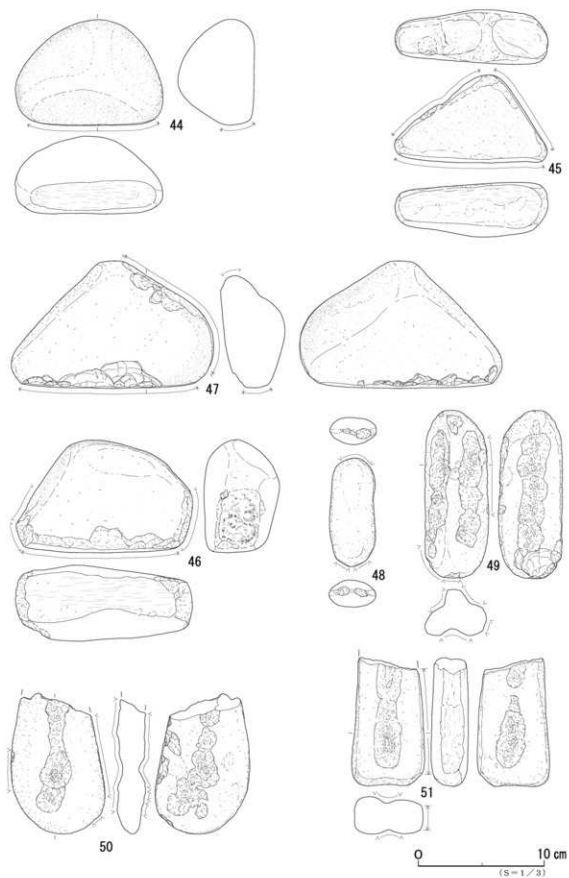


図60 共立2遺跡 包含層出土石器(4)

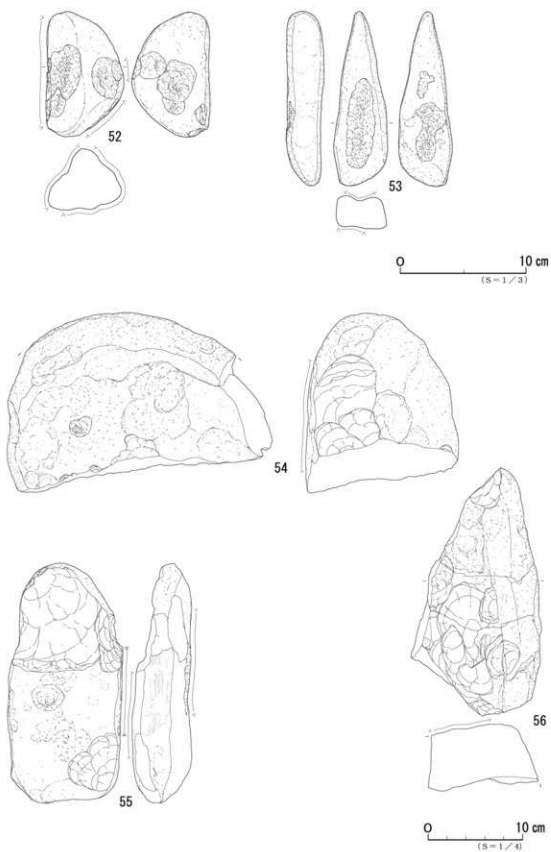


図61 共立2遺跡 包含層出土石器(5)

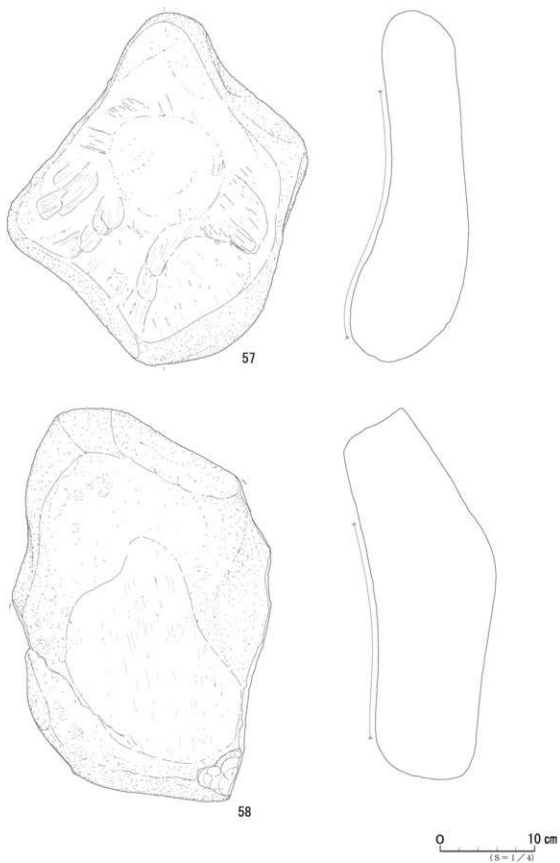


図62 共立2遺跡 包含層出土石器(6)

砥石 (30・31)

30は凝灰岩製で、表面に使用による明瞭なくはみがみられる。31は安山岩製で、表面は使用により平坦である。

石錘 (32～35)

32は凝灰岩製で横長である。33の上端部は曲線、下端部は割れ口である。34は打ち欠き部分が4か所みられる。35は下端面にすり痕がみられ、厚みもあるので、すり石の転用と考えられる。

すり石 (40～47)

40は下端面のすり痕に加え、たたき痕が複数観察される。41は厚みがあり右側を破損する。42はすり面近くの両側面にたたき痕が観察される。43は上下両端面に使用痕を有する。44は加工しない自然礫を素材とし、一縁に使用痕がみられる。45は三角形を呈し、全縁にすり痕が観察される。46は両側面に、たたき痕が観察される。47のすり面に沿ってみられる剥落痕は、使用に伴い生じたと推測する。

たたき石 (48～53)

48は上下両端面にたたき痕がみられる。49は細長い礫を素材とし、たたき痕により横断面は概して三角形で、かつ各辺がくぼんだ形状を呈する。50は扁平な楕円礫の長軸方向に使用痕があり、上端部を破損する。51は長方形の礫が素材で、表裏両面の中央にたたき痕がある。52は厚みのある素材で、横断面は三角形である。53は棒状礫で、幅状い上端側には使用痕がみられない。

台石 (54～58)

54は厚みのある素材で、表面に使用痕があり、被熱する。55は扁平で縦長の礫を素材とし、両面に使用痕を有する。56は接合したもので、表面に使用痕がみられる。57・58は大型で、表面が使用により顕著にくぼみ、石材は安山岩である。

・石製品 (図58・59 図版15)

36の下端部は平坦に割られており、形状から北海道式石冠を模したものと考えた。37～39はすべて軟質な凝灰岩製である。37の上端部はやや丸み帯び、下端部へはくびれを挟んでやや幅広くなる形状で、表裏両面に研磨痕が顕著である。石棒を模したものの先端部と考えた。38は右半分を破損する円形のもので、中央に穿孔がみられる。39は各面に細かい刻みが複数観察される。(末光)

表15 共立2遺跡 土坑・Tピット一覧表

遺構 種類	遺構名	図	面	グリッド	平面形状		規模 (m)				出土遺物			付属遺構 溝・切り合い	備考
					縦断面	横断面	縦断面		最大深	土層	石層	その他			
							長径	短径							
土坑	伊-1	36	1	A・M-10区	平盤状の円形	3.32	3.72	3.95	3.20	—	0区 砂土 31・32・34	—	—	—	
	伊-2	36	1	K-10区	楕円形	3.18	3.88	3.28	3.88	3.27	—	—	—	—	
	伊-3	37	1	M-10区	円形	3.68	3.62	3.38	3.22	3.18	—	31・32・34 (他) 31・34	—	—	
	伊-4	37	1	K-10区	円形	3.88	3.75	3.38	3.62	3.38	—	—	—	—	
	伊-5	38	1	K-10区	(横) 2 土坑部	3.67	3.28	3.88	3.88	3.88	—	—	—	—	
	伊-6	38	1	Q2-10区	円形	3.68	3.38	3.38	3.52	3.52	3.52	3.52	3.52	3.52	
Tピット	T伊-1	38	6	G-18・17区	楕円	楕円	3.42	3.62	3.75	3.88	—	砂土	—	—	
	T伊-2	38	6	G-18・15区	楕円	楕円	3.72	3.75	3.75	3.88	—	31・32・34	—	—	
	T伊-3	38	7	E-21・15区	楕円	楕円	3.42	3.75	3.75	3.88	—	—	—	—	
	T伊-4	38	7	E-21・15区	楕円	楕円	3.82	3.75	3.88	3.88	—	—	—	—	

表16 共立2遺跡 遺物集中一覧表

遺構種類	遺構名	遺物 番号	図	面	グリッド	埋蔵 深度	分布範囲 形状	規模 (m)			出土遺物		付属遺構 遺構・切り合い	関係した内容	備考
								長径	短径	最大深	土層	石層			
土器集中	伊-1	—	42	6	N-11・10区	表層	不整形	1.48	0.72	—	最表	—	—	陶器	土器・灰土・灰土・灰土で構成
	伊-2	—	42	6	N-10区	表層	不整形	1.07	1.38	—	最表	—	—	陶器	—
	伊-3	—	42	6	O-17区	表層	不整形	0.19	0.38	0.28	最表・不表	—	—	陶器	—
	伊-4	—	42	6	M-10区	表・裏層	楕円形	0.45	0.45	—	最表	—	—	陶土片・陶器	—
	伊-5	—	42	6	P-10区	表層	近方形	0.14	0.37	—	1区	—	—	陶土片	遺物付着の破片
フレイク集中	伊-1	—	42	6	N-10区	表層	近方形	0.28	0.37	—	—	—	—	フレイク	土器・灰土・灰土で構成を認め
	伊-2	—	42	6	K-10区	表層	楕円形	1.62	0.98	—	最表	—	—	陶器	土器・灰土・灰土で構成を認め
建築集中	伊-1	—	42	6	P-10区	表層	近方形	0.18	0.37	—	—	—	—	陶土片	—
	伊-2	—	42	6	M-10区	表・裏層	楕円形	1.88	0.98	—	—	—	—	陶土片・灰土・灰土 (他) フレイク (他) フレイク	土器・灰土・灰土で構成を認め

表17 共立2遺跡 遺構出土土器点数表

遺構名			P-6		P-5-1		P-5-2		P-5-3		P-5-4		P-5-5		FC-2		合計	
遺物種別/層位			遺土 は層		遺土 は層		遺土 は層		遺土 は層		遺土 は層		遺土 は層		遺土 は層			
時期	部位	残存状態	小計	Ⅱ層	Ⅲ層	小計	Ⅱ層	小計	Ⅱ層	小計	Ⅱ層	小計	Ⅱ層	小計	Ⅱ層	小計		
Ⅰ群	口縁部	良好															0	
		割離															0	
		磨耗	0			0			0			0			0		0	
	底面	良好											3				3	
		割離															0	
		磨耗	0			0			0			0		3		0	3	
	胴部	良好															0	
		割離															0	
		磨耗	0			0			0			0		3		0	3	
	不明	良好															0	
		割離															0	
		磨耗	0			0			0			0		0		0	0	
	小破片																0	
	小計			0		0		0		0		6		0			6	
	Ⅱ群	口縁部	良好			1					3	13						17
割離										1							1	
磨耗			0			1			0			19		0			20	
底面		良好									2						2	
		割離															0	
		磨耗	0			0			0			0		0			0	
胴部		良好	1		13	5		14			19				2		52	
		割離			4	4		8			3	4	44	2			57	
		磨耗	1		2			3		1							11	
不明		良好			12	22		34			16	6					34	
		割離															0	
		磨耗	0			0			0			0		0			0	
小破片																0		
小計			1		21		42		1		67		2		2		106	
不明		口縁部	良好															0
	割離																0	
	磨耗		0			0			0			0		0			0	
	底面	良好															0	
		割離															0	
		磨耗	0			0			0			0		0			0	
	胴部	良好															0	
		割離															0	
		磨耗	0			0			0			0		0			0	
	不明	良好															0	
		割離															0	
		磨耗	0			0			0			0		0			0	
	小破片																0	
	小計			0		0		0		29		0		0		0		29
	合計			1		71		42		20		67		8		2		121

表18 共立2遺跡 遺構出土石器点数表

遺構名			P-1		P-3		P-5-1		P-5-2		FC-1		FC-2		S-1		石臼調査		合計
遺物種別・分層/層位			遺土 Y 0 層		遺土 Y 0 層		遺土 Y 0 層		遺土 Y 0 層		遺土 Y 0 層		遺土 Y 0 層		遺土 Y 0 層		遺土 Y 0 層		
時期	分層	遺物状態	小計	Ⅱ層	小計	Ⅱ層	小計	Ⅱ層	小計	Ⅱ層	小計	Ⅱ層	小計	Ⅱ層	小計	Ⅱ層	小計	Ⅱ層	
新石 器	ナイフ・石臼類		磨耗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	石臼類		磨耗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	スクリュー		磨耗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	U・フレイク		磨耗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	石臼		磨耗	1	1	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	フレイク		磨耗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	磨耗石		磨耗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	(磨耗) フレイク		磨耗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
			磨耗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
			磨耗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
新石 器	新石 石臼・小計		1	0	1	0	1	0	2	12	71	0	12	0	12	0	12	0	120
	(磨耗) 石臼		磨耗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	新石 石臼		磨耗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	新石 石臼		磨耗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	新石 石臼		磨耗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	新石 石臼		磨耗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	新石 石臼		磨耗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	新石 石臼		磨耗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	新石 石臼		磨耗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	新石 石臼		磨耗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
新石 器	新石 石臼・小計		7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	(磨耗) 石臼		磨耗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	新石 石臼		磨耗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	新石 石臼		磨耗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	新石 石臼		磨耗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	新石 石臼		磨耗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	新石 石臼		磨耗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	新石 石臼		磨耗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	新石 石臼		磨耗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	新石 石臼		磨耗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
新石 器	新石 石臼・小計		10	1	0	1	0	1	2	12	71	0	12	0	12	0	12	0	120
	(磨耗) 石臼		磨耗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	新石 石臼		磨耗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	新石 石臼		磨耗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	新石 石臼		磨耗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	新石 石臼		磨耗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	新石 石臼		磨耗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	新石 石臼		磨耗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	新石 石臼		磨耗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	新石 石臼		磨耗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

表19 共立2遺跡 包含層出土土器点数表

遺物種別/層位			I 層	II 層	III 層	F 層 (風倒木痕)	その他	合計
時期	部位	残存状況						
I 群	口縁部	良好	1					1
		割断						0
		磨耗	1	0	0	0	0	1
	底部	良好						0
		割断						0
		磨耗	0	0	0	0	0	0
	胴部	良好	1	1	2			4
		割断						0
		磨耗	2	1	2	0	0	5
	不明	良好	1					1
		割断						0
		磨耗	0	0	0	0	0	0
	小破片	良好						0
		割断						0
		磨耗						0
	小計		3	1	2	0	0	6
II 群	口縁部	良好						0
		割断						0
		磨耗	0	0	0	0	0	0
	底部	良好						0
		割断						0
		磨耗	0	0	0	0	0	0
	胴部	良好		2	2			9
		割断						7
		磨耗	0	14	2	0	0	16
	不明	良好						0
		割断						0
		磨耗	0	0	0	0	0	0
	小破片	良好						0
		割断						0
		磨耗						0
	小計		0	14	2	0	0	16
III 群	口縁部	良好	14	15	13			42
		割断	2		1	0	0	3
		磨耗			15			15
	底部	良好	2	4	1			7
		割断			1			1
		磨耗	0	2	2	0	0	4
	胴部	良好	265	177	265	6	9	622
		割断	37	42	40	2	2	123
		磨耗	15	5	17	16	11	57
	不明	良好	115	125	137	8		385
		割断						0
		磨耗	0	0	0	0	0	0
	小破片	良好						0
		割断						0
		磨耗						0
	小計		350	370	476	16	11	1,223
IV 群	口縁部	良好						0
		割断						0
		磨耗	0	0	0	0	0	0
	底部	良好						0
		割断						0
		磨耗	0	0	0	0	0	0
	胴部	良好	6	1				7
		割断						0
		磨耗	9	1	0	0	0	10
	不明	良好	3					3
		割断						0
		磨耗	0	0	0	0	0	0
	小破片	良好						0
		割断						0
		磨耗						0
	小計		9	1	0	0	0	10
不明	口縁部	良好	2					2
		割断						0
		磨耗	2	0	0	0	0	2
	底部	良好		1				1
		割断	0	1	0	0	0	1
		磨耗						0
	胴部	良好	2	2	7			11
		割断		1	2			3
		磨耗	6	9	3	0	2	20
	不明	良好	2	6	10			18
		割断						0
		磨耗	0	0	0	0	0	0
	小破片	良好						0
		割断						0
		磨耗						0
	小計		8	10	22	0	2	42
合計			370	396	502	16	13	1,297

表20 共立2遺跡 包含層出土石器点数表

調査区	調査区・調査区・調査区			I層		II層		III層		IV層		調査区なし		合計	
	調査区	調査区	調査区	調査区	調査区	調査区	調査区	調査区	調査区	調査区	調査区	調査区	調査区	調査区	調査区
調査区A	調査区A	調査区A	調査区A	調査区A	調査区A	調査区A	調査区A	調査区A	調査区A	調査区A	調査区A	調査区A	調査区A	調査区A	調査区A
		調査区A	調査区A	調査区A	調査区A	調査区A	調査区A	調査区A	調査区A	調査区A	調査区A	調査区A	調査区A	調査区A	調査区A
		調査区A	調査区A	調査区A	調査区A	調査区A	調査区A	調査区A	調査区A	調査区A	調査区A	調査区A	調査区A	調査区A	調査区A
	調査区B	調査区B	調査区B	調査区B	調査区B	調査区B	調査区B	調査区B	調査区B	調査区B	調査区B	調査区B	調査区B	調査区B	調査区B
		調査区B	調査区B	調査区B	調査区B	調査区B	調査区B	調査区B	調査区B	調査区B	調査区B	調査区B	調査区B	調査区B	調査区B
		調査区B	調査区B	調査区B	調査区B	調査区B	調査区B	調査区B	調査区B	調査区B	調査区B	調査区B	調査区B	調査区B	調査区B
	調査区C	調査区C	調査区C	調査区C	調査区C	調査区C	調査区C	調査区C	調査区C	調査区C	調査区C	調査区C	調査区C	調査区C	調査区C
		調査区C	調査区C	調査区C	調査区C	調査区C	調査区C	調査区C	調査区C	調査区C	調査区C	調査区C	調査区C	調査区C	調査区C
		調査区C	調査区C	調査区C	調査区C	調査区C	調査区C	調査区C	調査区C	調査区C	調査区C	調査区C	調査区C	調査区C	調査区C
	調査区D	調査区D	調査区D	調査区D	調査区D	調査区D	調査区D	調査区D	調査区D	調査区D	調査区D	調査区D	調査区D	調査区D	調査区D
		調査区D	調査区D	調査区D	調査区D	調査区D	調査区D	調査区D	調査区D	調査区D	調査区D	調査区D	調査区D	調査区D	調査区D
		調査区D	調査区D	調査区D	調査区D	調査区D	調査区D	調査区D	調査区D	調査区D	調査区D	調査区D	調査区D	調査区D	調査区D
	調査区E	調査区E	調査区E	調査区E	調査区E	調査区E	調査区E	調査区E	調査区E	調査区E	調査区E	調査区E	調査区E	調査区E	調査区E
		調査区E	調査区E	調査区E	調査区E	調査区E	調査区E	調査区E	調査区E	調査区E	調査区E	調査区E	調査区E	調査区E	調査区E
		調査区E	調査区E	調査区E	調査区E	調査区E	調査区E	調査区E	調査区E	調査区E	調査区E	調査区E	調査区E	調査区E	調査区E
調査区F	調査区F	調査区F	調査区F	調査区F	調査区F	調査区F	調査区F	調査区F	調査区F	調査区F	調査区F	調査区F	調査区F	調査区F	
	調査区F	調査区F	調査区F	調査区F	調査区F	調査区F	調査区F	調査区F	調査区F	調査区F	調査区F	調査区F	調査区F	調査区F	
	調査区F	調査区F	調査区F	調査区F	調査区F	調査区F	調査区F	調査区F	調査区F	調査区F	調査区F	調査区F	調査区F	調査区F	
調査区G	調査区G	調査区G	調査区G	調査区G	調査区G	調査区G	調査区G	調査区G	調査区G	調査区G	調査区G	調査区G	調査区G	調査区G	
	調査区G	調査区G	調査区G	調査区G	調査区G	調査区G	調査区G	調査区G	調査区G	調査区G	調査区G	調査区G	調査区G	調査区G	
	調査区G	調査区G	調査区G	調査区G	調査区G	調査区G	調査区G	調査区G	調査区G	調査区G	調査区G	調査区G	調査区G	調査区G	
調査区H	調査区H	調査区H	調査区H	調査区H	調査区H	調査区H	調査区H	調査区H	調査区H	調査区H	調査区H	調査区H	調査区H	調査区H	
	調査区H	調査区H	調査区H	調査区H	調査区H	調査区H	調査区H	調査区H	調査区H	調査区H	調査区H	調査区H	調査区H	調査区H	
	調査区H	調査区H	調査区H	調査区H	調査区H	調査区H	調査区H	調査区H	調査区H	調査区H	調査区H	調査区H	調査区H	調査区H	
調査区I	調査区I	調査区I	調査区I	調査区I	調査区I	調査区I	調査区I	調査区I	調査区I	調査区I	調査区I	調査区I	調査区I	調査区I	
	調査区I	調査区I	調査区I	調査区I	調査区I	調査区I	調査区I	調査区I	調査区I	調査区I	調査区I	調査区I	調査区I	調査区I	
	調査区I	調査区I	調査区I	調査区I	調査区I	調査区I	調査区I	調査区I	調査区I	調査区I	調査区I	調査区I	調査区I	調査区I	
調査区J	調査区J	調査区J	調査区J	調査区J	調査区J	調査区J	調査区J	調査区J	調査区J	調査区J	調査区J	調査区J	調査区J	調査区J	
	調査区J	調査区J	調査区J	調査区J	調査区J	調査区J	調査区J	調査区J	調査区J	調査区J	調査区J	調査区J	調査区J	調査区J	
	調査区J	調査区J	調査区J	調査区J	調査区J	調査区J	調査区J	調査区J	調査区J	調査区J	調査区J	調査区J	調査区J	調査区J	
調査区K	調査区K	調査区K	調査区K	調査区K	調査区K	調査区K	調査区K	調査区K	調査区K	調査区K	調査区K	調査区K	調査区K	調査区K	
	調査区K	調査区K	調査区K	調査区K	調査区K	調査区K	調査区K	調査区K	調査区K	調査区K	調査区K	調査区K	調査区K	調査区K	
	調査区K	調査区K	調査区K	調査区K	調査区K	調査区K	調査区K	調査区K	調査区K	調査区K	調査区K	調査区K	調査区K	調査区K	
調査区L	調査区L	調査区L	調査区L	調査区L	調査区L	調査区L	調査区L	調査区L	調査区L	調査区L	調査区L	調査区L	調査区L	調査区L	
	調査区L	調査区L	調査区L	調査区L	調査区L	調査区L	調査区L	調査区L	調査区L	調査区L	調査区L	調査区L	調査区L	調査区L	
	調査区L	調査区L	調査区L	調査区L	調査区L	調査区L	調査区L	調査区L	調査区L	調査区L	調査区L	調査区L	調査区L	調査区L	
調査区M	調査区M	調査区M	調査区M	調査区M	調査区M	調査区M	調査区M	調査区M	調査区M	調査区M	調査区M	調査区M	調査区M	調査区M	
	調査区M	調査区M	調査区M	調査区M	調査区M	調査区M	調査区M	調査区M	調査区M	調査区M	調査区M	調査区M	調査区M	調査区M	
	調査区M	調査区M	調査区M	調査区M	調査区M	調査区M	調査区M	調査区M	調査区M	調査区M	調査区M	調査区M	調査区M	調査区M	
調査区N	調査区N	調査区N	調査区N	調査区N	調査区N	調査区N	調査区N	調査区N	調査区N	調査区N	調査区N	調査区N	調査区N	調査区N	
	調査区N	調査区N	調査区N	調査区N	調査区N	調査区N	調査区N	調査区N	調査区N	調査区N	調査区N	調査区N	調査区N	調査区N	
	調査区N	調査区N	調査区N	調査区N	調査区N	調査区N	調査区N	調査区N	調査区N	調査区N	調査区N	調査区N	調査区N	調査区N	
調査区O	調査区O	調査区O	調査区O	調査区O	調査区O	調査区O	調査区O	調査区O	調査区O	調査区O	調査区O	調査区O	調査区O	調査区O	
	調査区O	調査区O	調査区O	調査区O	調査区O	調査区O	調査区O	調査区O	調査区O	調査区O	調査区O	調査区O	調査区O	調査区O	
	調査区O	調査区O	調査区O	調査区O	調査区O	調査区O	調査区O	調査区O	調査区O	調査区O	調査区O	調査区O	調査区O	調査区O	
調査区P	調査区P	調査区P	調査区P	調査区P	調査区P	調査区P	調査区P	調査区P	調査区P	調査区P	調査区P	調査区P	調査区P	調査区P	
	調査区P	調査区P	調査区P	調査区P	調査区P	調査区P	調査区P	調査区P	調査区P	調査区P	調査区P	調査区P	調査区P	調査区P	
	調査区P	調査区P	調査区P	調査区P	調査区P	調査区P	調査区P	調査区P	調査区P	調査区P	調査区P	調査区P	調査区P	調査区P	
調査区Q	調査区Q	調査区Q	調査区Q	調査区Q	調査区Q	調査区Q	調査区Q	調査区Q	調査区Q	調査区Q	調査区Q	調査区Q	調査区Q	調査区Q	
	調査区Q	調査区Q	調査区Q	調査区Q	調査区Q	調査区Q	調査区Q	調査区Q	調査区Q	調査区Q	調査区Q	調査区Q	調査区Q	調査区Q	
	調査区Q	調査区Q	調査区Q	調査区Q	調査区Q	調査区Q	調査区Q	調査区Q	調査区Q	調査区Q	調査区Q	調査区Q	調査区Q	調査区Q	
調査区R	調査区R	調査区R	調査区R	調査区R	調査区R	調査区R	調査区R	調査区R	調査区R	調査区R	調査区R	調査区R	調査区R	調査区R	
	調査区R	調査区R	調査区R	調査区R	調査区R	調査区R	調査区R	調査区R	調査区R	調査区R	調査区R	調査区R	調査区R	調査区R	
	調査区R	調査区R	調査区R	調査区R	調査区R	調査区R	調査区R	調査区R	調査区R	調査区R	調査区R	調査区R	調査区R	調査区R	
調査区S	調査区S	調査区S	調査区S	調査区S	調査区S	調査区S	調査区S	調査区S	調査区S	調査区S	調査区S	調査区S	調査区S	調査区S	
	調査区S	調査区S	調査区S	調査区S	調査区S	調査区S	調査区S	調査区S	調査区S	調査区S	調査区S	調査区S	調査区S	調査区S	
	調査区S	調査区S	調査区S	調査区S	調査区S	調査区S	調査区S	調査区S	調査区S	調査区S	調査区S	調査区S	調査区S	調査区S	
調査区T	調査区T	調査区T	調査区T	調査区T	調査区T	調査区T	調査区T	調査区T	調査区T	調査区T	調査区T	調査区T	調査区T	調査区T	
	調査区T	調査区T	調査区T	調査区T	調査区T	調査区T	調査区T	調査区T	調査区T	調査区T	調査区T	調査区T	調査区T	調査区T	
	調査区T	調査区T	調査区T	調査区T	調査区T	調査区T	調査区T	調査区T	調査区T	調査区T	調査区T	調査区T	調査区T	調査区T	
調査区U	調査区U	調査区U	調査区U	調査区U	調査区U	調査区U	調査区U	調査区U	調査区U	調査区U	調査区U	調査区U	調査区U	調査区U	
	調査区U	調査区U	調査区U	調査区U	調査区U	調査区U	調査区U	調査区U	調査区U	調査区U	調査区U	調査区U	調査区U	調査区U	
	調査区U	調査区U	調査区U	調査区U	調査区U	調査区U	調査区U	調査区U	調査区U	調査区U	調査区U	調査区U	調査区U	調査区U	
調査区V	調査区V	調査区V	調査区V	調査区V	調査区V	調査区V	調査区V	調査区V	調査区V	調査区V	調査区V	調査区V	調査区V	調査区V	
	調査区V	調査区V	調査区V	調査区V	調査区V	調査区V	調査区V	調査区V	調査区V	調査区V	調査区V	調査区V	調査区V	調査区V	
	調査区V	調査区V	調査区V	調査区V	調査区V	調査区V	調査区V	調査区V	調査区V	調査区V	調査区V	調査区V	調査区V	調査区V	
調査区W	調査区W	調査区W	調査区W	調査区W	調査区W	調査区W	調査区W	調査区W	調査区W	調査区W	調査区W	調査区W	調査区W	調査区W	
	調査区W	調査区W	調査区W	調査区W	調査区W	調査区W	調査区W	調査区W	調査区W	調査区W	調査区W	調査区W	調査区W	調査区W	
	調査区W	調査区W	調査区W	調査区W	調査区W	調査区W	調査区W	調査区W	調査区W	調査区W	調査区W	調査区W	調査区W	調査区W	
調査区X	調査区X	調査区X	調査区X	調査区X	調査区X	調査区X	調査区X	調査区X	調査区X	調査区X	調査区X	調査区X	調査区X	調査区X	
	調査区X	調査区X	調査区X	調査区X	調査区X	調査区X	調査区X	調査区X	調査区X	調査区X	調査区X	調査区X	調査区X	調査区X	
	調査区X	調査区X	調査区X	調査区X	調査区X	調査区X	調査区X	調査区X	調査区X	調査区X	調査区X	調査区X	調査区X	調査区X	
調査区Y	調査区Y	調査区Y	調査区Y	調査区Y	調査区Y	調査区Y	調査区Y	調査区Y	調査区Y	調査区Y	調査区Y	調査区Y	調査区Y	調査区Y	
	調査区Y	調査区Y	調査区Y	調査区Y	調査区Y	調査区Y	調査区Y	調査区Y	調査区Y	調査区Y	調査区Y	調査区Y	調査区Y	調査区Y	
	調査区Y	調査区Y	調査区Y	調査区Y	調査区Y	調査区Y	調査区Y	調査区Y	調査区Y	調査区Y	調査区Y	調査区Y	調査区Y	調査区Y	
調査区Z	調査区Z	調査区Z	調査区Z	調査区Z	調査区Z	調査区Z	調査区Z	調査区Z	調査区Z	調査区Z	調査区Z	調査区Z	調査区Z	調査区Z	
	調査区Z	調査区Z	調査区Z	調査区Z	調査区Z	調査区Z	調査区Z	調査区Z	調査区Z	調査区Z	調査区Z	調査区Z	調査区Z	調査区Z	
	調査区Z	調査区Z	調査区Z	調査区Z	調査区Z	調査区Z	調査区Z	調査区Z	調査区Z	調査区Z	調査区Z	調査区Z	調査区Z	調査区Z	
調査区AA	調査区AA	調査区AA	調査区AA	調査区AA	調査区AA	調査区AA	調査区AA	調査区AA	調査区AA	調査区AA	調査区AA	調査区AA	調査区AA	調査区AA	
	調査区AA	調査区AA	調査区AA	調査区AA	調査区AA	調査区AA	調査区AA	調査区AA	調査区AA	調査区AA	調査区AA	調査区AA	調査区AA	調査区AA	
	調査区AA	調査区AA	調査区AA	調査区AA	調査区AA	調査区AA	調査区AA	調査区AA	調査区AA	調査区AA	調査区AA	調査区AA	調査区AA	調査区AA	
調査区AB	調査区AB	調査区AB	調査区AB	調査区AB	調査区AB	調査区AB	調査区AB	調査区AB	調査区AB	調査区AB	調査区AB	調査区AB	調査区AB	調査区AB	
	調査区AB	調査区AB	調査区AB	調査区AB	調査区AB	調査区AB	調査区AB	調査区AB	調査区AB	調査区AB	調査区AB	調査区AB	調査区AB	調査区AB	
	調査区AB	調査区AB	調査区AB	調査区AB	調査区AB	調査区AB	調査区AB	調査区AB	調査区AB	調査区AB	調査区AB	調査区AB	調査区AB	調査区AB	
調査区AC	調査区AC	調査区AC	調査区AC	調査区AC	調査区AC	調査区AC	調査区AC	調査区AC	調査区AC	調査区AC	調査区AC	調査区AC	調査区AC	調査区AC	
	調査区AC	調査区AC	調査区AC	調査区AC	調査区AC	調査区AC	調査区AC	調査区AC	調査区AC	調査区AC	調査区AC	調査区AC	調査区AC	調査区AC	
	調査区AC	調査区AC	調査区AC	調査区AC	調査区AC	調査区AC	調査区AC	調査区AC	調査区AC	調査区AC	調査区AC	調査区AC	調査区AC	調査区AC	
調査区AD	調査区AD	調査区AD	調査区AD	調査区AD	調査区AD	調査区AD	調査区AD	調査区AD	調査区AD	調査区AD	調査区AD	調査区AD	調査区AD	調査区AD	
	調査区AD	調査区AD	調査区AD	調査区AD	調査区AD	調査区AD	調査区AD	調査区AD	調査区AD	調査区AD	調査区AD	調査区AD	調査区AD	調査区AD	
	調査区AD	調査区AD	調査区AD	調査区AD	調査区AD	調査区AD	調査区AD	調査区AD	調査区AD	調査区AD	調査区AD	調査区AD	調査区AD	調査区AD	
調査区AE	調査区AE	調査区AE	調査区AE	調査区AE	調査区AE	調査区AE	調査区AE	調査区AE	調査区AE	調査区AE	調査区AE	調査区AE	調査区AE	調査区AE	
	調査区AE	調査区AE	調査区AE	調査区AE	調査区AE	調査区AE	調査区AE	調査区AE	調査区AE	調査区AE	調査区AE	調査区AE	調査区AE	調査区AE	
	調査区AE	調査区AE	調査区AE	調査区AE	調査区AE	調査区AE	調査区AE	調査区AE	調査区AE	調査区AE	調査区AE	調査区AE	調査区AE	調査区AE	
調査区AF	調査区AF	調査区AF	調査区AF	調査区AF	調査区AF	調査区AF	調査区AF	調査区AF	調査区AF	調査区AF	調査区AF	調査区AF	調査区AF	調査区AF	
	調査区AF	調査区AF	調査区AF	調査区AF	調査区AF	調査区AF	調査区AF	調査区AF	調査区AF	調査区AF	調査区AF	調査区AF	調査区AF	調査区AF	
	調査区AF	調査区AF	調査区AF	調査区AF	調査区AF	調査区AF	調査区AF	調査区AF	調査区AF	調査区AF	調査区AF	調査区AF	調査区AF	調査区AF	
調査区AG	調査区AG	調査区AG	調査区AG	調査区AG	調査区AG	調査区AG	調査区AG	調査区AG	調査区AG	調査区AG	調査区AG	調査区AG	調査区AG	調査区AG	
	調査区AG	調査区AG	調査区AG	調査区AG	調査区AG	調査区AG	調査区AG	調査区AG	調査区AG	調査区AG	調査区AG	調査区AG	調査区AG	調査区AG	
	調査区AG	調査区AG	調査区AG	調査区AG	調査区AG	調査区AG	調査区AG	調査区AG	調査区AG	調査区AG	調査区AG	調査区AG	調査区AG	調査区AG	
調査区AH	調査区AH	調査区AH	調査区AH	調査区AH	調査区AH	調査区AH	調査区AH	調査区AH	調査区AH	調査区AH	調査区AH	調査区AH	調査区AH	調査区AH	
	調査区AH	調査区AH	調査区AH	調査区AH	調査区AH	調査区AH	調査区AH	調査区AH	調査区AH	調査区AH	調査区AH	調査区AH	調査区AH	調査区AH	
	調査区AH	調査区AH	調査区AH	調査区AH	調査区AH	調査区AH	調査区AH	調査区AH	調査区AH	調査区AH					

表21 共立2遺跡 PS-5出土復原土器觀察表

国	番号	国産	出土地点	層位	日付	遺物 番号	計 測 値 (cm)			重量 (g)	部位	器種	備考 (分類・型式)		
							器高	口径	底径						
50	1	12	PS-5	正層	0721	3	1	(5.0)	—	6.4	121	胴部下位 ～底部	深鉢	1層目類または皿群	
接合破片 総点数						接合		出土地点・層位・ 日付・遺物番号 (点数)		PS-5・正層 → 0721・No.1(1)・No.2(1) → 121				合計	4
5						未接合		出土地点・層位・ 日付・遺物番号 (点数)		—				合計	—
胎土 (泥和材)		織機	無	粒径	細粒	量	中～多量		種類	彫物主体		備考	有色彫物多量 石製		
外 面	文様・調整		色調	使用の痕跡	その他	部位 (残存率)		文様・調整		色調	使用の痕跡	その他	内 面		
	R.L.S.L.R.や 横太気味の条		にぶい黄褐色 (10YR5/3)	黒色化	—	胴部下位 (20%)		ヨコナデ		瓶灰色 (10YR5/1)	黒色化	微腐江塩			
	ナデ		浅い黄褐色 (10YR5/3)	黒色化	微腐江塩	底部 (50%)		ヨコナデ		瓶灰色 (10YR5/1)	黒色化	微腐江塩			
	—		浅い黄褐色 (10YR5/3)	黒色化	—	底部 (80%)		—		—	浅い黄褐色 (7.5YR6/4)	—		—	

表22 共立2遺跡 PS-4出土復原土器觀察表

国	番号	国産	出土地点	層位	日付	通物番号	破片 点数	計測値 (cm)			重量 (g)	部位	器種	備考 (分類・型式)	
								器高	口径	底径					
50	2	12	PS-4	2層	0721	—	16	(26.0)	(26.8)	—	1,677	口縁へ 胴部下手	深鉢	Ⅱ群	
接合破片 総点数						接合		出土地点・層位・ 日付・通物番号 (点数)						合計	29
同一個体 破片						未接合 (復原残片)		出土地点・層位・ 日付・通物番号 (点数)						合計	105
45								P.8a-1 (下段)・黒曜石・0721a-1 (→ 1721) L-1 (→ 1721)・黒曜石・0721a-1 (→ 1721) M-1 (→ 1721)・黒曜石・0721a-1 (→ 1721) M-2 (→ 1721)・黒曜石・0721a-1 (→ 1721) N-1 (→ 1721)・黒曜石・0721a-1 (→ 1721)・黒曜石・0721a-1 (→ 1721) P.8a-1 (→ 1721)・黒曜石・0721a-1 (→ 1721) L-1 (→ 1721)・黒曜石・0721a-1 (→ 1721)・黒曜石・0721a-1 (→ 1721) M-1 (→ 1721)・黒曜石・0721a-1 (→ 1721)・黒曜石・0721a-1 (→ 1721) N-1 (→ 1721)・黒曜石・0721a-1 (→ 1721)						合計	105
胎土 (遺和材)		繊維	中へ多量		粒径	細粒	量	少量		種類	鉱物主体		備考		
外	文様・調整		色調	使用の痕跡	その他	部位 (残存率)				文様・調整	色調	使用の痕跡	その他		
	ヨコミガキ		棕色 (5YR6/6)	黒色化	突起部 4ヶ所	口唇部 (5~10%)									
	ヨコナデ		(黒褐色)	黒色化 炭化物付着	端折孔 一对	口縁部 (5~10%)		ヨコミガキ							
	L.R新行縄文 原体端部の 剥離正紋文		(黒褐色)	黒色化 炭化物付着	—	胴部上半 (5~10%)		タゲミガキ							
	L.R新行縄文 原体端部の 剥離正紋文		(黒褐色)	黒色化 炭化物付着	—	胴部下半 (5%未満)		タゲミガキ							

表23 共立2遺跡 遺構出土破片土器観察表

図	番号	図版	出土地点	層位	取上日	遺物番号	破片数		破片部位	重量(g)	器種	分類	備考	
							小計	合計						
胎土(混和材)						文様・調整				色調		使用の痕跡		土器型式
組織	粒度・量	種類	外面		内面	(部位)	外面	内面	外面	内面	外面	内面		
51	1	12	P-6	Ⅱ層	0803	1	1	胴部	14.7	図録	Ⅱ群			
中～多量	細粒・多量	若石・胎物ともあり(重円筒状の胎石)		R.L. 縄文	ナデ	—		にぶい・黄褐色(7. 3006/4)		(黒褐色)	—	黒色化		
51	2	12	PS-1	Ⅱ層	0601	—	1	口縁部	9.9	図録	Ⅱ群			
多量	細粒・微量	胎物主体		R.L. 縄文	ナデ	(口唇部) ナデ		にぶい・黄褐色(101917/4)		にぶい・黄褐色(101917/4)	—	—		
51	3	12	PS-1	Ⅱ層	0602	—	5	胴部	152.6	図録	Ⅱ群			
				Ⅱ層	0601	—	1							7
				N-15区	Ⅱ層	0521	—							1
多量	細粒・少量	胎物主体		L.R.・R.L. 縄文	ナデ	—		棕色(7. 3030/6)		にぶい・黄褐色(101936/4)	褐色化 赤色化?	—		
51	4	12	PS-2	Ⅱ層	0623	—	2	胴部	33.7	図録	Ⅱ群			
無	細粒・多量	胎物主体(若色胎物・石葉)		L.R. 縄文	ナデ	—		にぶい・棕色(7. 3036/4)		にぶい・黄褐色(101936/3)	赤色化?	黒色化		
51	5	12	PS-2	Ⅱ層	0623	—	3	胴部	24.6	図録	Ⅱ群			
少量	粗粒・多量	若石主体(重円筒状の胎石)		L.R. 縄文	ナデ	—		棕色(7. 3037/6)		にぶい・黄褐色(101936/3)	赤色化?	—		
51	6	12	PS-4(下部)	Ⅱ層	0722	—	1	胴部	32.4	図録	Ⅱ群			
無	粗粒・多量	若石主体(白色胎片)		L.R. 縄文 縄絡文	ナデ	—		にぶい・褐色(7. 3035/3)		(黒褐色)	赤色化?	黒色化		
51	7	12	PS-4	Ⅱ層	0721	—	1	胴部	7.8	図録	Ⅱ群?			
無	粗粒・中量	若石・胎物ともあり(白色胎片)		L.R. 縄文	ナデ	—		黒灰色(101935/1)		にぶい・灰黄褐色(2. 3036/2)	灰化物付着	—		
51	8	12	FC-2	I層	0716	—	1	胴部	5.7	図録	Ⅱ群			
無	細粒・中量	若石・胎物ともあり		R.L. 縄文	ナデ	—		にぶい・褐色(7. 3036/4)		灰黄褐色(101934/2)	赤色化?	黒色化		
51	9	12	FC-2	I層	0715	—	1	胴部	5.4	図録	Ⅱ群			
多量	中粒・少量	若石・胎物ともあり		L.R. 縄文	ナデ	—		灰黄褐色(101936/4)		にぶい・黄褐色(101936/3)	—	—		

表24 共立2遺跡 包含層出土破片土器観察表(1)

図	番号	図版	出土地点	層位	取上日	遺物 番号	破片数		破片部位	重量 (g)	器種	分類		備考
							小計	合計				外面	内面	
胎土(混和材)						文様・調整				色調		使用の痕跡		土器 型式
種類	粘性・量	種類	外面		内面		(部位)		外面	内面	外面	内面		
52	1	13	F-17区	Ⅱ層	0728	—	3	口縁部	8.6	深鉢	Ⅱ群	黒色化 炭化物付着	春日町式	
少量	細粒・少量	岩石・灰物 ともにあり	仰引文		ナデ		(口唇部) 刺突文		(黒褐色)	(黒褐色)	黒色化 炭化物付着	黒色化	春日町式	
52	2	13	I-20区	Ⅱ層	0624	—	2	口縁部	19.3	深鉢	Ⅱ群	土器片群 ：外面からの鉄り1か所		
中量	細粒・少量	岩石・灰物 ともにあり	沈線文 刺突文		ナデ		(口唇部) ナデ		にぶい黄褐色 (10136/4)	灰黄褐色 (10135/2)	黒色化 炭化物付着	黒色化	春日町式	
52	3	13	J-20区	Ⅰ層	0820	—	1	口縁部	22.4	深鉢	Ⅱ群	黒色化		
多量	細粒・少量	岩石主体 (赤色粘土)	L・R調文		ナデ		(口唇部) ナデ		にぶい褐色 (7, 535/4)	にぶい赤褐色 (535/2)	黒色化	黒色化		
52	4	13	J-20区	Ⅰ層	0824	—	1	口縁部	8.8	深鉢	Ⅱ群	黒色化		
少量	細粒・少量	岩石・灰物 ともにあり	L・R調文 仰引文		ナデ		(口唇部) ナデ		(黒灰色)	(黒灰色)	黒色化	黒色化	春日町式	
52	5	13	J-21区	Ⅱ層	0703	—	1	口縁部	11.6	深鉢	Ⅱ群	黒色化		
多量	細粒・少量	岩石・灰物 ともにあり	L・R調文 沈線文		ナデ		(口唇部) ナデ		(黒褐色)	にぶい褐色 (7, 535/3)	黒色化	黒色化		
52	6	13	K-20区	Ⅱ層	0715	—	1	口縁部	8.8	深鉢	Ⅱ群	黒色化		
			L-21区	Ⅱ層	0715	—	1	口縁部	8.8	深鉢	Ⅱ群	黒色化		
中量	細粒・少量	岩石・灰物 ともにあり	L・R調文 仰引文		ミダキ		(口唇部) 刺突文		にぶい褐色 (7, 535/4)	(黒褐色)	—	黒色化		
52	7	13	K-21区	Ⅱ層	0706	—	1	口縁部	11.9	深鉢	Ⅱ群	黒色化		
			Ⅱ層	0703	—	1	口縁部	11.9	深鉢	Ⅱ群	黒色化	黒色化		
			Ⅱ層	0708	—	1	口縁部	11.9	深鉢	Ⅱ群	黒色化	黒色化		
中～多量	細～中粒 ・中量	岩石主体	L・R調文		ナデ		(口唇部) ナデ		にぶい褐色 (7, 535/3)	緑～ にぶい黄褐色 (535/3)～ (10136/2)	黒色化 炭化物付着	黒色化		
52	8	13	L-21区	Ⅰ層	0714	—	1	口縁部	3.3	深鉢	Ⅱ群	黒色化		
少量	中粒・少量	岩石・灰物 ともにあり	刺突文		ナデ		(口唇部) ナデ		灰黄褐色 (10136/2)	にぶい黄褐色 (10136/3)	—	—		
52	9	13	M-17区	Ⅰ層	0624	—	2	口縁部	14.3	深鉢	Ⅱ群	黒色化		
少量	細粒・少量	岩石主体 「商船寺」	屈折 L・R調文		ミダキ		(口唇部) ナデ (底付) L・R調文		にぶい黄褐色 (10137/4)	にぶい黄褐色 (10135/3)	黒色化	炭化物付着	丹波土器 上層式?	
52	10	13	M-18区	Ⅱ層	0709	—	1	口縁部	21.9	深鉢	Ⅱ群	黒色化		
多量	粗粒・ 中～多量	岩石・灰物 ともにあり 重厚な 底付 「商船寺」 石炭 「商船寺」	L・R調文 沈線文		ナデ		(口唇部) ナデ		灰黄色 (2, 536/2)	にぶい黄褐色 (10136/4)	—	—		
52	11	13	M-20区	Ⅱ層	0715	—	1	口縁部	6.0	深鉢	Ⅱ群?	黒色化		
少～中量	中～中粒 ・中量	岩石・灰物 ともにあり	ミダキ		ナデ		(口唇部) ナデ		灰黄褐色 (10135/2)	にぶい褐色 (7, 535/4)	黒色化	黒色化		
52	12	13	N-12区	Ⅱ層	0729	—	1	口縁部	6.7	深鉢	Ⅱ群	黒色化		
中量	細～中粒 ・中量	岩石・灰物 ともにあり	L・R調文 沈線文 四角刺突文		ナデ		(口唇部) ナデ		にぶい黄褐色 (2, 536/2)	黒灰色 (10131/1)	黒色化	黒色化		
52	13	13	N-15区	Ⅱ層	0622	—	1	口縁部	18.2	深鉢	Ⅱ群	黒色化		
中～多量	粗粒・多量	岩石・灰物 ともにあり 重厚な 底付 「商船寺」 石炭 「商船寺」	L・R調文		ナデ		(口唇部) ナデ		にぶい黄褐色 (10137/4)	にぶい黄褐色 (10137/4)	—	—		
52	14	13	O-13区	Ⅱ層	0617	—	2	口縁部	6.9	深鉢	Ⅱ群	黒色化		
多量	中粒・中量	岩石・灰物 ともにあり	沈線文 刺突文		ナデ		(口唇部) ナデ		褐色 (7, 535/3)	灰褐色 (7, 535/2)	黒色化	黒色化		

表24 共立2遺跡 包含層出土破片土器観察表(2)

図	番号	図版	出土地点	層位	取上日	遺物 番号	破片数		破片部位	重量 (g)	器種	分類		備考	
							小計	合計							
胎土(泥和材)						文様・調整				色調		使用の痕跡		土器 型式	
焼結・量						種類		外面		(部位)		外面			内面
S2	15	13	P-17区	Ⅱ層	0714	—	3	口縁部	7.1	深緑	Ⅱ群	—			
中量						細粒・少量	胎土・彫物 ともにあり	R.L.陶文 跡第1種?	ミガキ 横組圧痕文?	にぶい黄褐色 (10195/2)	緑色 (7.5196/6)	黒色化	—		
S2	16	13	Q-15区	Ⅱ層	0706	—	1	口縁部	8.9	浅緑	V群	—			
少～中量						細粒・多量	胎土・彫物 ともにあり	胎付 R.L.陶文	(口唇部) (胎付) R.L.輪縁部	(褐色色)	灰黄色 (2.5196/2)	黒色化	—		
S2	17	13	M-9区	Ⅱ層	0804	—	6	口縁部	41.2	深緑	Ⅱ群	—			
多量						中粒・ 中～多量	胎土・彫物 ともにあり	R.L.陶文	ナデ	(口唇部) ナデ	にぶい黄褐色 (10197/2)	(褐色色)	黒色化 炭化物付着	黒色化	
S2	18	13	I-17区	Ⅱ層	0706	—	2	胴部	18.3	深緑	Ⅱ群	—			
多量						細粒・中量	胎石主体?	R.L.陶文 内凹文	ナデ	—	(黒褐色)	にぶい黄褐色 (10196/2)	黒色化 炭化物付着	黒色化	春日町式
S3	19	13	J-9区	Ⅱ層	0805	—	8	胴部	134.2	深緑	Ⅱ群	—			
中～多量						粗粒・中量	胎石主体 重円状の チャート 面付?	R.L.陶文 波瀾文状の群	ナデ	—	にぶい黄褐色 (10196/4)	(黒褐色)	赤色化 褐色 (5196/6)	黒色化 炭化物付着	黒色化
S3	20	13	K-8区	Ⅱ層	0805	—	2	胴部	8.2	深緑	I群?	—			
無						胎～中粒 ・中量	胎石主体 着色胎物	R.L.の条? 横条文?	ナデ	—	にぶい黄褐色 (10196/4)	にぶい黄褐色 (10197/4)	—	—	
S3	21	13	K-14区	Ⅱ層	0608	—	2	胴部	14.3	深緑	Ⅱ群	—			
多量						中粒・少量	胎石主体	R.L.陶文 波瀾文	ナデ	—	(黒褐色)	にぶい褐色 (7.5195/4)	黒色化 炭化物付着	—	
S3	22	13	K-19区	Ⅱ層	0709	—	2	3	胴部	100.8	深緑	Ⅱ群	—		
			K-21区	Ⅱ層	0708	—	1								
極多量						細粒・少量	胎石主体 重円状の 面付?	R.L.陶文	ナデ	—	にぶい黄褐色 (10195/2)	にぶい黄褐色 (10196/4)	赤色化 明赤褐色 (2.5195/6)	黒色化 炭化物付着	黒色化
S3	23	13	K-21区	Ⅱ層	0702	—	1	3	胴部	26.6	深緑	Ⅱ群	—		
			L-21区	Ⅱ層	0528	—	2								
多量						細粒・ 少～多量	胎物主体?	波瀾文 内凹文	ナデ	—	(黒褐色)	にぶい黄褐色 (10196/4)	黒色化 炭化物付着	—	春日町式
S3	24	13	K-21区	Ⅱ層	0630	—	1	胴部	15.1	深緑	Ⅱ群	—			
多量						細粒・少量	胎物主体?	波瀾文 内凹文	ナデ	—	にぶい黄褐色 (10197/4)	(黒褐色)	赤色化? 褐色 (5196/6)	黒色化	春日町式
S3	25	13	K-22区	Ⅱ層	0703	—	3	4	胴部	42.6	深緑	Ⅱ群	—		
			K-21区	Ⅱ層	0706	—	1								
無						細粒・少量	胎石主体? R.L.陶文	R.L.陶文?	ナデ	—	にぶい褐色 (7.5196/4)	にぶい褐色 (7.5196/4)	赤色化 褐色 (5196/6)	黒色化 炭化物付着	黒色化
S3	26	13	L-19区	I層	0528	—	2	胴部	25.7	深緑	Ⅱ群	—			
中～多量						細粒・少量	胎石主体 重円状の チャート	R.L.の条? ナデ	ナデ	—	にぶい黄褐色 (10196/4)	にぶい黄褐色 (10197/4)	黒色化	—	
S3	27	13	M-13区	Ⅱ層	0716	—	1	胴部	31.2	深緑	Ⅱ群	—			
多量						細粒・少量	胎石主体	R.L.陶文 波瀾文	ナデ	—	にぶい黄褐色 (10195/2)	にぶい黄褐色 (5195/4)	黒色化	—	
S3	28	13	M-18区	Ⅱ層	0709	—	2	胴部	18.3	深緑	Ⅱ群	—			
多量						中粒・中量	胎石主体 細粒岩 面付?	R.L.陶文 縦文 波瀾文	ナデ	—	(赤褐色した色)	にぶい黄褐色 (10196/3)	赤色化 褐色 (5196/6)	—	春日町式
S3	29	13	M-18区	Ⅱ層	0709	—	1	胴部	21.5	深緑	Ⅱ群	—			
多量						胎～中粒 ・中量	胎石・胎物 ともにあり 重円状の チャート 面付?	R.L.陶文 波瀾文 波瀾文	ナデ	—	にぶい褐色 (7.5196/4)	にぶい黄褐色 (10196/2)	赤色化 褐色 (5196/6)	—	春日町式

表24 共立2遺跡 包含層出土破片土器観察表(3)

図	番号	図版	出土地点	層位	取上日	遺物 番号	破片数		破片部位	重量 (g)	器種	分類		備考
							小計	合計						
胎土(混和材)						文様・調整			色調		使用の痕跡		土器 型式	
織理		粘性・量		種類	外面		内面		(部位)	外面	内面	外面		内面
53	30	13	M-21区	II層	0722	—	1	—	胴部	17.0	深鉢	II群		
多量		細粒・少量		岩石・灰物 ともあり	和文文 附引文		ナデ	—	—	褐色 (7.5387/6)	灰黄褐色 (10193/2)	赤色化 褐色 (5387/6)	黒色化 灰化物付着	春日町式
54	31	13	M-21区	I層	0514	—	1	—	胴部	73.4	深鉢	II群		
多量		細粒・少量		岩石・灰物 ともあり	L.R・R.L 羽状溝文		ナデ	—	—	(赤色化 した色)	にぶい・褐色 (7.5386/4)	黒色化 赤色化 にぶい・赤褐色 (5385/4)	黒色化	
54	32	13	I-13区	II層	0728	—	2	—	胴部	40.8	深鉢	II群		土器片群 ：外面からの取り2か所
多量		細粒・中量		岩石・灰物 ともあり [海綿骨針]	L.R・R.L 羽状溝文		ナデ	—	—	(黒褐色)	にぶい・黄褐色 (10196/4)	黒色化 灰化物付着	黒色化	
54	33	13	O-15区	I層	0821	—	1	—	胴部	35.0	深鉢	II群		土器片群 ：外面からの取り1か所
中～多量		細粒・中量		岩石・灰物 ともあり [海綿骨針]	L.R・R.L 羽状溝文		ナデ	—	—	にぶい・黄褐色 (10196/4)	にぶい・黄褐色 (10196/4)	—	—	
54	34	13	Q-15区	II層	0522	—	1	2	胴部	12.9	深鉢	II群		補修孔
				不明	0522	—	1							
無?		中粒・中量		岩石主体 海綿骨針の 非確認	R.L.溝文		ナデ	—	—	(暗灰色)	(黒褐色)	黒色化 灰化物付着	黒色化 灰化物付着	
54	35	13	Q-15区	II層	0708	—	1	—	胴部	19.3	深鉢	II群		
無		細粒・中量		岩石・灰物 ともあり	R.L.溝文		ナデ	—	—	にぶい・黄褐色 (10197/4)	にぶい・黄褐色 (10197/4)	赤色化 褐色 (7.5387/6)	—	
54	36	13	N-15区	II層	0521	—	1	—	底部	5.4	深鉢	II群		
中量		細粒・少量		岩石・灰物 ともあり	(底外面) ナデ		(底内面) ナデ	—	—	にぶい・黄褐色 (10197/4)	褐色 (7.5387/6)	—	—	
54	37	13	L-17区	I層	0522	—	1	2	胴部	22.2	深鉢	I群		
				P-15区	II層	0522	—	1						
無		細粒・少量		岩石・灰物 ともあり	条痕文		ナデ	—	—	にぶい・黄褐色 (10197/4)	灰黄色 (2.536/2)	黒色化 灰化物付着	黒色化 灰化物付着	
54	38	13	J-21区	II層	0703	—	2	—	胴部	77.6	深鉢	II群		
多量		細粒・少量		岩石・灰物 ともあり	L.R.溝文		ナデ	—	—	にぶい・黄褐色 (10197/4)	灰黄色 (2.537/2)	黒色化 灰化物付着	黒色化 灰化物付着	
54	39	13	L-18区	II層	0702	—	1	—	胴部	57.5	深鉢	II群		
多量		中～粗粒・ 中～多量		岩石主体 海綿骨針の チャート [海綿骨針]	L.R.溝文		ナデ	—	—	にぶい・黄褐色 (10197/4)	褐色 にぶい・黄褐色 (7.5387/6)～ 10197/4)	—	—	
54	40	13	L-21区	II層	0708	—	1	—	胴部	30.2	深鉢	II群		
細多量		細粒・少量		岩石・灰物 ともあり	L.R.溝文		ナデ	—	—	(赤色化 した色)	にぶい・褐色 (7.5386/4)	赤色化 褐色 (5386/6)	黒色化	
54	41	13	Q-14区	I層	0515	—	1	—	胴部	20.1	深鉢	V群?		
無		細粒・多量		岩石・灰物 ともあり	R.L.溝文 (縦引割取)		ナデ	—	—	にぶい・黄褐色 (10197/4)	にぶい・褐色 (7.5387/4)	—	—	

表25 共立2遺跡 遺構出土石器觀察表

期	曜日	時間	演出名称	演出	組立人数	人数	設備	特徴	計算時間			重量 kg	材質		加工費	保険料	備考	
									原稿	長さ	高さ		部材	部材				
第 1	日	14	出立準備時間 (20分程度)	不演	0000	3	1	フタリ型組立	—	原稿時間	5.0	5.0	5.0	5.0	鉄板	鉄板組立	—	
第 2	2	14	出立準備時間	鉄・不演	0000	3	3	フタリ型組立	—	原稿	15.0	15.0	5.0	5.0	鉄板	鉄板組立	—	
第 3	3	14	出立準備時間	鉄・不演	0000	9	1	フタリ型組立	観覧	—	5.0	5.0	5.1	25.0	鉄板	鉄板組立	—	有線放送機に 接続可能
第 4	4	14	出立準備時間	鉄・不演	0000	14	1	フタリ型	—	原稿	4.0	5.0	5.1	5.1	鉄板	鉄板組立	—	
第 5	5	14	P-1	観客との交流	0000	—	1	観覧	—	原稿	5.0	5.0	4.0	100.0	鉄板	鉄板組立	—	
第 6	6	14	P-1	観客との交流	0000	—	1	観覧	有線放送機	原稿	5.0	5.1	5.1	5.0	鉄板	鉄板組立	—	
第 7	7	14	P-2	観客との交流	0000	—	3	フタリ型組立	—	原稿	2.0	4.0	5.1	2.3	鉄板	鉄板組立	—	有線放送機に 接続可能
第 8	8	14	P-3	観客との交流	0000	—	3	フタリ型組立	—	原稿	4.0	5.0	5.0	5.1	鉄板	鉄板組立	—	
第 9	9	14	P-4	観客との交流	0000	—	3	フタリ型組立	—	原稿	4.0	5.0	5.0	5.1	鉄板	鉄板組立	—	
第 10	10	14	P-5	観客との交流	0000	—	3	フタリ型組立	—	原稿	4.0	5.0	5.0	5.1	鉄板	鉄板組立	—	
第 10	10	14	P-5	観客との交流	0000	—	3	フタリ型組立	有線放送機に 接続可能	原稿	4.0	5.0	5.1	26.0	鉄板	鉄板組立	—	
第 11	11	14	P-6	観客との交流	0000	3	1	有線放送機	原稿時間	原稿	15.0	15.0	11.0	10.0	鋼管	鋼管組立	—	有線放送機に 接続可能
					0000	3	1											
					0000	3	1											
					0000	3	1											
					0000	3	1											
					0000	3	1											
第 12	12	14	P-7	観客との交流	0000	3	1	有線放送機	原稿時間	原稿	15.0	15.0	11.0	10.0	鋼管	鋼管組立	—	有線放送機に 接続可能
					0000	3	1											
					0000	3	1											
					0000	3	1											
第 13	12	14	P-8	観客との交流	0000	3	1	有線放送機	原稿時間	原稿	15.0	15.0	11.0	10.0	鋼管	鋼管組立	—	有線放送機に 接続可能
					0000	3	1											
第 14	12	14	P-9	観客との交流	0000	3	1	有線放送機	原稿時間	原稿	15.0	15.0	11.0	10.0	鋼管	鋼管組立	—	有線放送機に 接続可能
					0000	3	1											
第 15	14	14	P-10	観客との交流	0000	3	1	有線放送機	原稿時間	原稿	15.0	15.0	11.0	10.0	鋼管	鋼管組立	—	有線放送機に 接続可能

表26 共立2遺跡 旧石器調査出土石器(写真のみ) 観察表

計測箇所	出土地点	層位	取上日	透物番号	点数	調理	残存状態	計測値(cm)			重量(g)	石材		特徴観察事項	備考
								長さ	幅	厚さ		岩石名	特徴		
14	新石器調査	Ⅱ～Ⅳ層	0806	5	1	フレイク	—	1.8	3.2	0.8	7.1	頁岩	灰褐色(10YR5/2)～暗灰色(暗灰色)黄白色の筋(層理)	—	
14	新石器調査	Ⅱ～Ⅳ層	0806	7	1	フレイク	—	3.3	2.3	0.5	4.3	頁岩	褐色(10YR4/3)	—	
14	新石器調査	Ⅱ～Ⅳ層	0806	10	1	フレイク	—	2.6	2.4	0.4	1.7	頁岩	褐色(10YR4/3)	—	
14	新石器調査	Ⅱ～Ⅳ層	0806	6	1	フレイク	—	2.4	1.7	0.4	1.4	頁岩	暗灰色黄褐色(暗灰色)～(2.5)黄褐色(暗灰色)	—	
14	新石器調査	Ⅱ～Ⅳ層	0806	4	1	フレイク	—	2.8	1.7	0.4	1.2	頁岩	灰黄褐色(10YR5/2)	—	
14	新石器調査	Ⅱ～Ⅳ層	0806	13	1	フレイク	—	1.7	2.1	0.5	1.3	頁岩	(褐色)厚緑面：2.5～黄褐色(10YR6/D)	—	
14	新石器調査	Ⅱ～Ⅳ層	0806	11	1	フレイク	—	2.2	1.3	0.3	0.5	頁岩	2.5～黄褐色(10YR5/3)	—	
14	新石器調査	Ⅱ～Ⅳ層	0806	12	1	フレイク	—	1.9	1.2	0.3	0.7	頁岩	褐色(10YR5/3)	—	
14	新石器調査	Ⅱ～Ⅳ層	0806	2	1	フレイク	—	0.5	0.9	0.3	0.2	頁岩	褐色(10YR6/1)	—	
14	新石器調査	Ⅱ～Ⅳ層	0806	8	1	フレイク	—	1.8	1.0	0.3	0.2	頁岩	(黒色)	磨痕(不規則な溝)	

表27 共立2遺跡 黒曜石原産地分析試料一覽表

原 番号	図原	試料番号	造跡	葬種	葬式状態	石材	出土地点	層位	遺物 番号	取上 年月日	点数	時代	計測値(cm)			重量 (g)	備考
													長さ	幅	厚さ		
56-01	口	口3-14	1	粘土土直断	不腐	定形	黒曜石	K-135K	1層	—	20090716	3	縄文時代	2.5	1.9	6.9	
56-02	口	口3-14	2	粘土土直断	不腐	定形	黒曜石	M-135K	1層	—	20090523	1	縄文時代	1.7	1.2	0.3	
56-03	口	口3-14	3	粘土土直断	不腐	定形	黒曜石	—	—	20090513	3	縄文時代	1.7	1.3	0.3		
56-04	口	口3-14	4	粘土土直断	不腐	定形	黒曜石	N-146K	1層	—	20090514	1	縄文時代	3.2	2.5	1.4	
56-05	口	口3-14	5	粘土土直断	不腐	定形	黒曜石	O-135K	1層	—	20090730	3	縄文時代	4.1	3.2	1.1	7.0
56-06	口	口3-14	6	粘土土直断	ステンレーパー	不定形	黒曜石	L-146K	1層	—	20090523	1	縄文時代	5.2	3.0	0.7	7.1
56-07	口	口3-14	7	粘土土直断	ステンレーパー	不定形	黒曜石	I-131K	1層	—	20090625	3	縄文時代	5.1	3.2	1.6	24.7
56-08	口	口3-14	8	粘土土直断	ステンレーパー	不定形	黒曜石	L-129K	1層	—	20090513	3	縄文時代	3.6	2.9	1.2	13.3
56-09	口	口3-14	9	粘土土直断	ステンレーパー	不定形	黒曜石	I-165K	1層	—	20090624	3	縄文時代	2.8	3.1	0.8	6.7
56-10	口	口3-14	10	粘土土直断	不腐	—	黒曜石	N-135K	1層	—	20090619	3	縄文時代	3.4	3.1	1.3	13.0
56-11	口	口3-14	11	粘土土直断	U・ホフレイト	—	黒曜石	I-165K	1層	—	20090623	3	縄文時代	3.9	3.7	1.0	8.3
56-12	口	口3-14	12	粘土土直断	U・ホフレイト	—	黒曜石	N-135K	1層	—	20090623	3	縄文時代	3.8	3.1	0.5	1.7

表28 共立 2 遺跡 包含層出土石器観察表

順	発掘番号	出土地	層位	出土時期	品名	器種	特徴	保存状況	計測値(cm)	重量(g)	石材	特徴	加工痕	使用痕	備考		
順	発掘番号	出土地	層位	出土時期	品名	器種	特徴	保存状況	長さ	幅	厚さ	新石器	特徴				
37	1	15	ア-1502	遺跡	0731	—	1	石鏃	先端	5.0	3.3	6.9	1.8	磨製	—	—	
37	2	15	ア-1502	遺跡	0617	—	1	石鏃	三角形 短茎	先端	5.0	3.3	6.9	0.8	磨製	通身打削	磨製
37	3	15	ア-1502	遺跡	0714	—	1	石鏃	三角形 短茎	先端	1.9	3.3	6.8	1	磨製	通身打削	磨製
37	4	15	ア-1502	遺跡	0630	—	1	石鏃	先端	5.0	3.4	6.8	1.5	磨製	小断面 磨製	磨製	
37	5	15	ア-1502	遺跡	0714	—	1	石鏃	三角形 短茎	先端	5.3	4.2	6.2	0.7	磨製	—	—
37	6	15	ア-1502	遺跡	0715	—	1	石鏃	先端	5.1	3.3	6.7	1.4	磨製	(短茎一面打削)	磨製	
37	7	15	ア-1502	遺跡	0628	—	1	石鏃	三角形 短茎	先端	5.2	3.4	6.8	1.8	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	8	15	ア-1502	遺跡	0702	—	1	石鏃	三角形 短茎	先端	5.4	3.4	6.8	1.5	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	9	15	ア-1502	遺跡	0714	—	1	石鏃	先端	5.2	3.4	6.7	1.2	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製	
37	10	15	ア-1502	遺跡	0703	—	1	石鏃	—	先端	5.4	3.4	6.8	1.2	磨製	(長さ187cm)	磨製
37	11	15	ア-1502	遺跡	0714	—	1	石鏃	—	先端	5.31	3.4	6.8	1.1	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	12	15	ア-1502	遺跡	0716	—	1	石鏃	—	先端	6.5	3.4	6.7	1.3	磨製	—	磨製
37	13	15	ア-1502	遺跡	0706	—	1	石鏃	短茎 通	先端	18.11	3.4	6.8	0.8	磨製	磨製	磨製
37	14	15	ア-1502	遺跡	0621	—	1	石鏃	短茎 通	先端	6.1	3.5	6.8	1.8	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	15	15	ア-1502	遺跡	0626	—	1	石鏃	短茎 通	先端	1.8	2.9	1.1	13.0	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	16	15	ア-1502	遺跡	0729	—	1	石鏃	短茎 短	先端	6.4	3.1	1.2	18.7	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	17	15	ア-1502	遺跡	0721	—	1	石鏃	短茎 短	先端	6.4	3.1	1.2	18.8	磨製	(短茎一面打削)	磨製
37	18	15	ア-1502	遺跡	0729	—	1	石鏃	短茎 短	先端	5.9	3.0	0.8	7.9	磨製	(短茎通)	磨製
37	19	15	ア-1502	遺跡	0629	—	1	石鏃	短茎 短	先端	3.7	3.2	0.8	5.7	磨製	磨製	磨製
37	20	15	ア-1502	遺跡	0621	—	1	石鏃	短茎 短	先端	1.3	3.5	1.9	35.3	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	21	15	ア-1502	遺跡	0622	—	1	石鏃	短茎 短	先端	4.8	3.5	1.7	31.2	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	22	15	ア-1502	遺跡	0625	—	1	石鏃	短茎 短	先端	15.11	3.2	0.8	4.1	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	23	15	ア-1502	遺跡	0619	—	1	石鏃	短茎 短	先端	18.41	4.2	1.3	35.1	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	24	15	ア-1502	遺跡	0721	—	1	石鏃	短茎 短	先端	7.1	3.4	1.6	4.4	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	25	15	ア-1502	遺跡	0618	—	1	石鏃	短茎 短	先端	8.2	4.7	1.4	46.9	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	26	15	ア-1502	遺跡	0605	—	1	石鏃	—	先端	11.8	4.3	3.3	187.8	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	27	15	—	0628	—	1	石鏃	—	先端	15.31	4.2	1.4	108.3	磨製	磨製	磨製	
37	28	15	ア-1502	遺跡	0712	—	1	石鏃	短茎 短	先端	11.21	4.2	1.2	136	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	29	15	ア-1502	遺跡	0710	—	1	石鏃	短茎 短	先端	10.21	14.21	11.41	95.7	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	30	15	ア-1502	遺跡	0625	—	1	石鏃	短茎 短	先端	11.41	4.4	1.4	112.8	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	31	15	ア-1502	遺跡	0614	—	1	石鏃	—	先端	12.1	5.5	1.8	128.3	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	32	15	ア-1502	遺跡	0720	—	1	石鏃	短茎 短	先端	8.4	6.4	3.2	106.9	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	33	15	ア-1502	遺跡	0622	—	1	石鏃	短茎 短	先端	18.31	7.5	1.9	188.8	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	34	15	ア-1502	遺跡	0620	—	1	石鏃	短茎 短	先端	5.4	5.9	2.7	84.4	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	35	15	ア-1502	遺跡	0701	—	1	石鏃	短茎 短	先端	6.8	6.1	2.7	113.3	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	36	15	ア-1502	遺跡	0622	—	1	石鏃	短茎 短	先端	6.5	6.1	2.7	112.2	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	37	15	ア-1502	遺跡	0630	—	1	石鏃	短茎 短	先端	16.11	12.41	8.5	9.7	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	38	15	ア-1502	遺跡	0619	—	1	石鏃	短茎 短	先端	15.31	12.41	1.7	35.4	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	39	15	ア-1502	遺跡	0625	—	1	石鏃	短茎 短	先端	4.8	3.5	2.4	46.3	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	40	15	ア-1502	遺跡	0714	—	1	石鏃	短茎 短	先端	6.9	10.5	5.7	405	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	41	15	ア-1502	遺跡	0605	—	1	石鏃	短茎 短	先端	6.5	12.41	6.8	484	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	42	15	ア-1502	遺跡	0715	—	1	石鏃	短茎 短	先端	8.4	11.5	6.2	436	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	43	15	ア-1502	遺跡	0630	—	1	石鏃	短茎 短	先端	6.8	10.1	3.7	298	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	44	15	ア-1502	遺跡	0616	—	1	石鏃	短茎 短	先端	5.4	12.1	6.2	350	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	45	15	ア-1502	遺跡	0630	—	1	石鏃	短茎 短	先端	1.6	12.5	6.4	386	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	46	15	ア-1502	遺跡	0624	—	1	石鏃	短茎 短	先端	6.9	18.1	6.8	1330	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	47	15	ア-1502	遺跡	0608	—	1	石鏃	短茎 短	先端	18.1	18.1	6.8	1300	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	48	15	ア-1502	遺跡	0625	—	1	石鏃	短茎 短	先端	6.7	3.7	2.5	108.6	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	49	15	ア-1502	遺跡	0708	—	1	石鏃	短茎 短	先端	11.3	5.9	3.9	296	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	50	15	ア-1502	遺跡	0621	—	1	石鏃	短茎 短	先端	11.11	5.5	3.4	236	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	51	15	ア-1502	遺跡	0621	—	1	石鏃	短茎 短	先端	15.31	5.8	3.8	279	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	52	15	ア-1502	遺跡	0604	—	1	石鏃	短茎 短	先端	14.9	6.1	5.5	279	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	53	15	ア-1502	遺跡	0625	—	1	石鏃	短茎 短	先端	11.5	4.2	3.5	194.7	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	54	15	ア-1502	遺跡	0625	—	1	石鏃	短茎 短	先端	15.81	10.1	10.1	8.10	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	55	15	ア-1502	遺跡	0710	—	1	石鏃	短茎 短	先端	15.3	12.1	4.2	210	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	56	15	ア-1502	遺跡	0621	—	1	石鏃	短茎 短	先端	11.11	11.11	10.3	3.30	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	57	15	ア-1502	遺跡	0714	—	1	石鏃	短茎 短	先端	11.3	10.4	14.5	15.90	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	58	15	ア-1502	遺跡	0716	—	1	石鏃	短茎 短	先端	11.3	10.4	14.5	15.90	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	59	15	ア-1502	遺跡	0717	—	1	石鏃	短茎 短	先端	11.3	10.4	14.5	15.90	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	60	15	ア-1502	遺跡	0718	—	1	石鏃	短茎 短	先端	11.3	10.4	14.5	15.90	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	61	15	ア-1502	遺跡	0719	—	1	石鏃	短茎 短	先端	11.3	10.4	14.5	15.90	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	62	15	ア-1502	遺跡	0720	—	1	石鏃	短茎 短	先端	11.3	10.4	14.5	15.90	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	63	15	ア-1502	遺跡	0721	—	1	石鏃	短茎 短	先端	11.3	10.4	14.5	15.90	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	64	15	ア-1502	遺跡	0722	—	1	石鏃	短茎 短	先端	11.3	10.4	14.5	15.90	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	65	15	ア-1502	遺跡	0723	—	1	石鏃	短茎 短	先端	11.3	10.4	14.5	15.90	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	66	15	ア-1502	遺跡	0724	—	1	石鏃	短茎 短	先端	11.3	10.4	14.5	15.90	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	67	15	ア-1502	遺跡	0725	—	1	石鏃	短茎 短	先端	11.3	10.4	14.5	15.90	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	68	15	ア-1502	遺跡	0726	—	1	石鏃	短茎 短	先端	11.3	10.4	14.5	15.90	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	69	15	ア-1502	遺跡	0727	—	1	石鏃	短茎 短	先端	11.3	10.4	14.5	15.90	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	70	15	ア-1502	遺跡	0728	—	1	石鏃	短茎 短	先端	11.3	10.4	14.5	15.90	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	71	15	ア-1502	遺跡	0729	—	1	石鏃	短茎 短	先端	11.3	10.4	14.5	15.90	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	72	15	ア-1502	遺跡	0730	—	1	石鏃	短茎 短	先端	11.3	10.4	14.5	15.90	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	73	15	ア-1502	遺跡	0731	—	1	石鏃	短茎 短	先端	11.3	10.4	14.5	15.90	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	74	15	ア-1502	遺跡	0732	—	1	石鏃	短茎 短	先端	11.3	10.4	14.5	15.90	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	75	15	ア-1502	遺跡	0733	—	1	石鏃	短茎 短	先端	11.3	10.4	14.5	15.90	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	76	15	ア-1502	遺跡	0734	—	1	石鏃	短茎 短	先端	11.3	10.4	14.5	15.90	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	77	15	ア-1502	遺跡	0735	—	1	石鏃	短茎 短	先端	11.3	10.4	14.5	15.90	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	78	15	ア-1502	遺跡	0736	—	1	石鏃	短茎 短	先端	11.3	10.4	14.5	15.90	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	79	15	ア-1502	遺跡	0737	—	1	石鏃	短茎 短	先端	11.3	10.4	14.5	15.90	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	80	15	ア-1502	遺跡	0738	—	1	石鏃	短茎 短	先端	11.3	10.4	14.5	15.90	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	81	15	ア-1502	遺跡	0739	—	1	石鏃	短茎 短	先端	11.3	10.4	14.5	15.90	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	82	15	ア-1502	遺跡	0740	—	1	石鏃	短茎 短	先端	11.3	10.4	14.5	15.90	磨製	磨製(長さ187cm)	磨製
37	83	15	ア-1502	遺跡	0741	—	1	石鏃	短茎 短	先端	11.3	10.4					

V章 豊野4遺跡の調査

1. 令和2年度の調査の概要 (図63)

令和2年度の調査で検出された遺構はなかった。出土遺物は石器・礫類、計430点で、土器は出土していない。剥片石器はすべて頁岩製で、黒曜石製は出土していない。Ⅰ層除去後、Ⅱ層、Ⅲ層を手掘りした。台地の先端という地形的条件により、Ⅱ層の層厚は10～30cmと一定せず、またⅢ層は部分的にしか確認できなかった。地山のⅣ層はローム層中に凝灰岩・硬質頁岩・チャート礫を多く含む。

2. 出土遺物 (図64・65 表29・30 図版24)

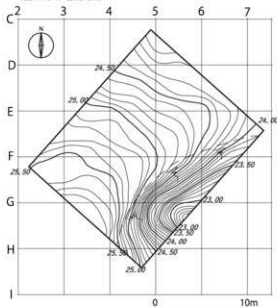
遺物は南側で多く出土した。主にⅡ層黒色土層、一部Ⅲ層漸移層からも出土している。掲載した石器類はすべてⅡ層から出土したものである。土器の出土がないため、時期は不明であるが、縄文時代のものと思われる。Ⅲ層から出土する頁岩製のフレイクや礫片から、本遺跡は縄文時代の石器の材料である頁岩の獲得地であった可能性がある。また、遺物の出土状況から (図64)、本遺跡の主体部は今回調査した調査区の南にあると推定する。

掲載石器 (図65 表29・30 図版24)

計8点掲載した。1・2は頁岩製スクレイパーである。いずれも全体に摩滅が顕著である。1は縦長剥片の側縁に刃部をもつ。2は横長剥片の長側縁を使用している。3は頁岩製U・Rフレイクである。薄手の縦長剥片の両側縁に使用によると思われる剥離痕がみられる。4は凝灰岩製すり石である。偏平楕円形の礫の長軸に並行する一縁辺が機能面になっている。表面には若干の擦痕が観察される。5は花崗岩製すり石である。礫を片手に収まる大きさに成形し、広い一面を使用している。6はチャート製偏平打製石器の未成品または未使用品である。打ち欠きにより、平面形が半円状になるように、偏平礫の周縁を成形している。機能面は図中の長軸に沿った一辺と思われるが、すり石や石鋸としての使用痕はみられない。7は砂岩製たたき石である。楕円礫の周縁約3/5に使用痕がある。図表面に黒色物質の付着がみられる。図裏面は部分的に磨かれ、ややなめらかになっている。8は安山岩製たたき石である。形状が四角柱の礫の先端角を使用している。

(新家)

Ⅱ層上面地形図



最終面地形図

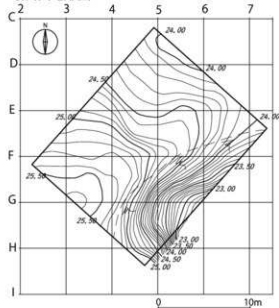
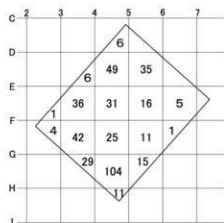
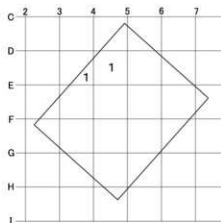


図63 豊野4遺跡 地形測量図

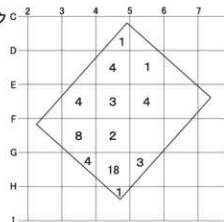
石器・礫
合計



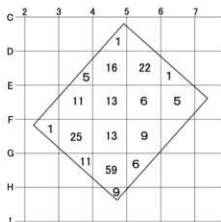
スクレイパー



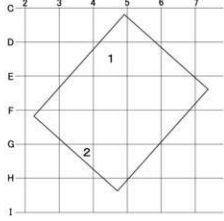
U・Rフレイク



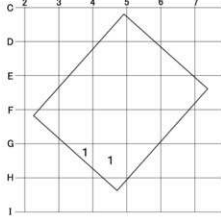
フレイク



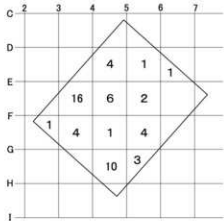
すり石



たたき石



U・Rレキ



レキ

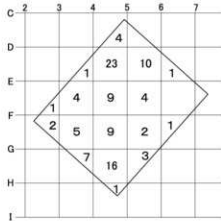


図64 豊野4遺跡 出土遺物分布図

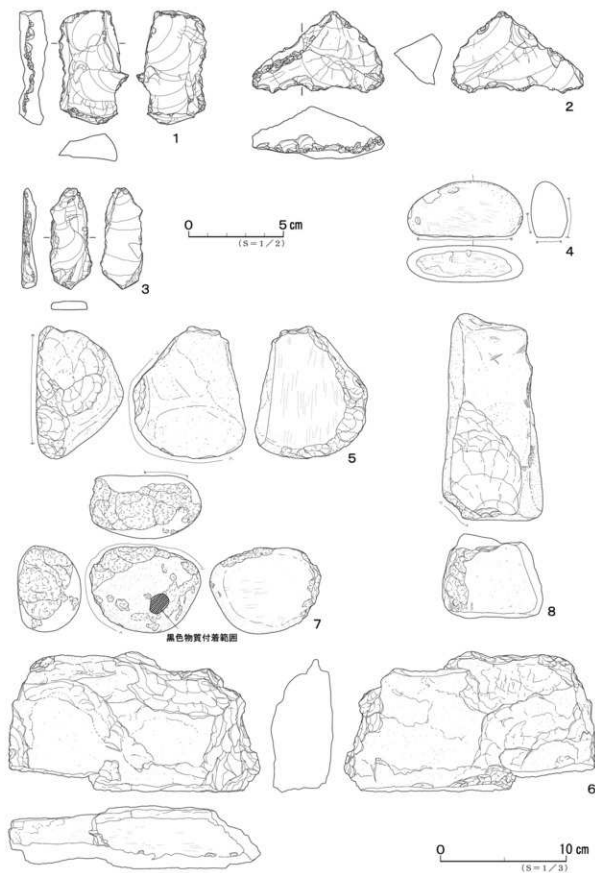


図65 豊野4遺跡 出土石器

表29 豊野4遺跡 包含層出土石器点数表

器種名・分類／層位				Ⅱ層		Ⅲ層		合計			
器種	残存状態	岩石									
剥片石器	スクレイパー	完形	頁岩	2	2		0	2	2		
		準完形						0			
		半形						0			
		片						0			
	U・Rフレイク		頁岩	31	32	21	22	52	54		
			凝灰岩	1		1		2			
	フレイク	頁岩	115	127	80	86	195	213			
		チャート	10		6		16				
		凝灰岩	2				2				
	小計				161	108		269			
礫石器	すり石	完形	チャート	1	3		0	1	3		
			凝灰岩	1						1	
			花崗岩	1						1	
		準完形						0			
		半形						0			
	たたき石	完形	安山岩	1	2		0	1	2		
			砂岩	1						1	
			準完形								0
		半形						0			
		片						0			
	小計				5	0		5			
	レキ	U・Rレキ	完形	頁岩	18	20		4	22	53	
チャート				1					1		
凝灰岩				1					1		
片			頁岩	15	10		25				
			チャート	3	1		4				
			凝灰岩				0				
レキ		完形	頁岩	5	23		17	10	40		
			チャート	15				8		23	
			スコリア					3		3	
			溶岩	1				1		2	
			安山岩	2						2	
			花崗岩							0	
		片	頁岩	19		37		26	32	63	
			チャート	17					13		30
			スコリア								0
			溶岩								0
			安山岩								0
			花崗岩	1							1
小計				98	58		156				
合計				264	166		430				

表30 豊野4遺跡 掲載石器一覧

掲載番号	産出区	層位	点数	分類	石材	残存状態	大きさ (cm)			重量 (g)	備考	取上日
							長さ	幅	厚さ			
1	E3	Ⅱ	1	スクレイパー	頁岩 (Sha)	完形	6.0	3.7	1.5	29.4		2020/5/28
2	D4	Ⅱ	1	スクレイパー	頁岩 (Sha)	完形	4.3	7.0	2.8	52.2		2020/5/29
3	D5	Ⅱ	1	U・Rフレイク	頁岩 (Sha)	完形	5.3	2.2	0.8	9.2		2020/6/5
4	G3	Ⅱ	1	すり石	凝灰岩 (Tuf)	完形	4.5	9.2	2.9	166.4		2020/5/28
5	D4	Ⅱ	1	すり石	花崗岩 (Gra)	完形	10.5	9.0	6.9	757.5		2020/6/1
6	G3	Ⅱ	1	すり石?	チャート (Cho)	完形	11.2	19.9	5.0	1250.0	扁平打製石器?	2020/6/4
7	G4	Ⅱ	1	たたき石	砂岩 (San)	完形	6.9	8.8	5.0	396.6		2020/6/4
8	G3	Ⅱ	1	たたき石	安山岩 (And)	完形	8.0	16.5	6.7	1150.0		2020/6/4

Ⅵ章 結 語

1. まとめ

(1) 共立2遺跡 (図35 表1・2)

共立2遺跡でみつかった遺構は、土坑6基、Tピット4基、土器集中5か所、フレイク集中2か所、礫集中1か所である。土坑は概して南側に位置し、P-1は頁岩裂石核と、接合した台石が出土した。P-2は黄色土主体の覆土が堆積していた。P-3は円形で浅く、被熱したレキが出土した。P-4は楕円形で浅い。P-5は長方形で坑底が平坦である。P-6は斜面に位置する円形の浅い土坑で、縄文時代前期の土器が出土した。Tピットはすべて北側の斜面に位置する。細長い溝状で、覆土最下層には黒色土が堆積する。出土遺物はTP-1から頁岩裂石鏃、TP-2からは安山岩製のU・Rレキである。TP-3・4は北側でみつかり、これらの坑底面は斜面と同じ北側へと傾斜する。

土器集中とフレイク集中は概して南側に位置する。PS-1は口縁部と胴部が出土し、縄文時代前期である。PS-2は縄文時代前期で、黒曜石と頁岩製フレイクが出土した。PS-3の土器は脆弱で取り上げることができなかった。PS-4は土器が最も多く出土し、縄文時代前期の復原個体が得られた。PS-5は薄手の底部がまとまって出土し、縄文時代早期と考える。FC-1・2は頁岩製フレイクのまとまりである。S-1は被熱した礫石器が出土した。また、N-13区周辺の旧石器調査では、ナイフ型石器と頁岩製フレイクが地層IV層から出土した。石器の特徴からは旧石器と断定し難いが、出土層位からその可能性が考えられる。

出土遺物は土器1,518点、石器1,520点である。土器は一次整理でⅢ群に分類したが、二次整理の結果多くがⅡ群である。剥片石器は石鏃、石錐、つまみ付きナイフ、スクレイパーが出土し、礫石器は磨製石斧、たたき石、すり石、石錘、砥石、台石である。石材は、磨製石斧は緑色泥岩、これ以外の多くは安山岩製で、石製品は加工しやすい軟質な凝灰岩が多用される。本遺跡の主眼的な時期は縄文時代前期前半と考えられる。

(末光)

(2) 豊野4遺跡 (図63 表1・2)

遺跡の北東端と考えられる場所を調査した。南東側には深く落ち込む谷があり、遺構は検出されなかった。剥片石器の素材である頁岩が多く出土し、これらのうちで人為的な遺物と判断したものに、スクレイパー、U・Rフレイク、フレイクが269点ある。礫石器は、すり石やたたき石と考えられるもの5点である。長万部町は頁岩の産地で、国縫川や茶屋川の河原では頁岩を採取することができ、本遺跡は、頁岩を容易に獲得できる採取場所であった可能性がある。

(新家)

2. 共立2遺跡出土の黒曜石と豊浦町豊泉の原産地について

共立2遺跡の遺構出土(旧石器を含む)の剥片石器101点のうち、黒曜石はフレイク1点のみで(表18)、包含層出土682点中の黒曜石は118点を数え、剥片石器総数に対する黒曜石の割合は14%である。さらに包含層出土の石器で器種ごとの黒曜石の割合をみると、石鏃は完形8点、準完形4点、片1点で72%である。石錐は完形3点の100%で、つまみ付きナイフは半形2点で10%である。スクレイパーは完形2点、準完形2点、半形1点、片2点の31%である。U・Rフレイクは16点で19%、石核は1

点で11%、フレイクは67点で14%、(被熱)フレイクは5点で38%、原石は0%である(表20)。

以上のように、石鏃や石錐については、黒曜石の利用が圧倒的に多く、器種により石材を使い分けていた可能性がある。

共立2遺跡で出土した黒曜石について原産地を分析した(表27・31 付篇1)。試料は定型的な石器のうち、原礫面や球果、赤色部分等の肉眼で認識できる特徴を有するものとした(IV章10節2項)。分析前に肉眼で観察し、「豊泉産」、「赤井川産」とこれら以外に分類し原産地を予想した。目的は肉眼観察で認識可能な特徴による分類の有効性を確認することである。肉眼観察と分析結果を踏まえた黒曜石の特徴を記す。

豊泉産の特徴：オ9・オ10 オ4？

- ・原礫面：光沢なし 暗灰色 球果が脱落した穴 ざらつき
- ・小球果：粗粒(長径1mm程度) 無作為あるいは筋状
- ・その他：リング・フィッシャーへの影響が顕著＝石器製作に影響がある

赤井川産の特徴：オ1・オ7・オ8 オ5？

- ・原礫面：光沢なし 黄灰色 球果に対応する平行な筋 ざらつき(目の細かい紙ヤスリ状)
- ・小球果：細～微粒 筋状に並び密集する 中粒(長径1mm程度)もあり
- ・石基：黒色透明部分に、乳白色の平行する筋がみえるものもある
- ・原礫面の形状：平坦＝素材礫の形状は角礫～亜角礫状 多面体

上士幌産の特徴：オ2・オ3・オ6・オ11・オ12

- ・原礫面：綿あめ状(網状)に透明なガラス光沢の部分が見られる
- ・小球果：無
- ・石基：赤色部分を有するものもある
- ・原礫面の形状：曲線的＝素材礫の形状は円礫～亜円礫状(転礫)

小球果を含有する豊泉産と赤井川産の肉眼判定は比較的容易で、さらに粒径から両者の識別も簡単である。共立2遺跡に最も近い原産地は隣町の豊泉原産地である。これについて平成5～7(1994～1996)年度に高速自動車道の建設工事に伴い当センターが発掘調査した豊浦町の高岡1・2遺跡、東雲遺跡の調査報告書の内容を再点検し、豊泉黒曜石の生成環境について考察する。

豊浦町 高岡1遺跡(J-05-17)・高岡2遺跡(J-05-18) 北埋調報88・91・106

主たる時期は縄文時代早期後半、中期後半である。これらの報告書には、黒曜石の遺物は豊泉産と推定されるものが多く、黒曜石の肉眼観察を行い、原産地推定に提供可能な試料採取を近辺で行ったと記載がある。黒曜石が採取できる場所は、高岡1遺跡の西北方3kmほどの豊泉川の中で、河床や壁の粘土の中に亜角礫状や拳大の礫が見つかる。また、年度ごとの地区別で、豊泉産の黒曜石が占める割合(百分率)が記述されており、これから豊泉産黒曜石の出土点数を推計する。高岡1・2遺跡では、豊泉産の黒曜石は石質が悪く石器製作に適さないため、定型的な石器(器種)の出土はきわめて少ないとあり、このことから、豊泉産の黒曜石の多くはフレイク・チップと判断される。計算式は次のとおりである。

(包含層の) 石器総点数×フレイク・チップの割合÷「豊泉産の黒曜石の割合」

平成5(1994)年度 高岡1遺跡

川東地区：「50%」・包含層出土36,378点 フレイク・チップ94.5% 豊泉産黒曜石：19,247点

平成6(1995)年度 高岡1遺跡

川東地区：「50%」・包含層出土10,983点 フレイク・チップ97.5% 豊泉産黒曜石：5,354点

川西地区：「95%」 ・ 包含層出土118,595点 フレイク・チップ96.9% 豊泉産黒曜石：109,172点
 北地区：「90%」 ・ 包含層出土110点 フレイク・チップ47% 豊泉産黒曜石：46点
 中央地区：「90%」 ・ 包含層出土3,929点 フレイク・チップ98.7% 豊泉産黒曜石：3,490点

平成7（1996）年度 高岡1・2遺跡

川西地区：「60%」 ・ 包含層出土153,103点 フレイク・チップ98.7% 豊泉産黒曜石：90,667点
 高岡2遺跡：「60%」 ・ 包含層出土909点 フレイク・チップ86.5% 豊泉産黒曜石：471点

東雲遺跡（J-05-16）北埋調報107

主たる時期は縄文時代後期中葉で、高岡1・2遺跡と時期が異なるためか、豊泉産黒曜石はほとんどないと記載がある。

高岡1・2遺跡の報告書では、豊泉産黒曜石のフレイク・チップの出土が非常に多いにもかかわらず、石器の器種にきわめて少ないことについて考察されていない。この百分率は黒曜石を産地ごとに分類して算出したものでなく、発掘調査をとおして感じた調査担当者の印象であろう。掲載石器で豊泉産の黒曜石が用いられたと記載があるのは石核である。これらは剥片剥離後の「残核」で、高岡1遺跡の川西地区（北埋調報91・106）と東雲遺跡（北埋調報107）で報告されている。

また、自然科学的分析は2カ年度実施された。

・平成5（1994）年度（北埋調報88）

Ⅶ章1節 「豊浦町高岡1遺跡出土の黒曜石製遺物の原産地分析」（217～225頁）

Ⅶ章1節 「黒曜石の原産地推定について」（230～232頁）

川東地区出土の試料50点中のうち過半数の27点が豊泉産との分析結果である。これらは両面加工石器（図Ⅶ-1・2）で、石鏃や石槍・ナイフである。事前に肉眼観察で産地を推定しておき、分析結果と照合することで、肉眼による判定の有効性の程度を知る目的である。豊泉産と推定した試料の結果は、分析不能の試料6点以外、27点すべてが合致した。すなわち、豊泉産は肉眼でかなりの精度で判別できる外観上の顕著な特徴がある。これらは、①：粗雑な感じの材質、②：散在する灰色球果、③：リングやフィッシャーが灰色球果により寸断・停滞するである。

また、先述したように定型的な石器の出土は少ないとの記述があるが、包含層出土の石鏃540点と石槍・ナイフ193点（132頁）の合計733点のうち、豊泉産黒曜石の石器と鑑定されたのは27点で、36%を占め、きわめて少ないと言い切れない。

・平成7（1996）年度（北埋調報106）

Ⅵ．「高岡1・2遺跡出土の黒曜石製遺物の原産地分析」（185～197頁）

豊泉産の割合は、高岡1遺跡は50点のうち石鏃1点、石槍・ナイフ10点の合計11点で22%であり、高岡2遺跡は20点のうち石槍・ナイフ2点、スクレイパー1点、石核3点、フレイク1点の合計7点の37%で、両遺跡とも赤井川産が多かった。

・平成7（1996）年度（北埋調報107）

Ⅵ．「東雲遺跡出土の黒曜石製遺物の原産地分析」（77～84頁）

分析試料75点のうち、豊泉産は8点（Rフレイク3点、Uフレイク1点、フレイク4点）で11%、あとはすべて赤井川産であった。

この年度に行った3つの遺跡の産地推定では、分析試料について図や写真が掲載されておらず、詳細は不明である。遺跡全体での黒曜石産地の傾向を知る目的で分析試料をサンプリングして抽出したと仮定すれば、先に百分率で表した遺跡や地区における豊泉産黒曜石の割合は、高岡1・2遺跡では大きく異なり、東雲遺跡ではやや合致する。

調査担当として携わった高岡 1・2 遺跡の発掘調査での豊泉産黒曜石の記憶を記す。

・平成 7 (1996) 年度、高速道路のトンネル (高岡トンネルと思われる) の掘削工事で黒曜石の自然礫が多数みつかった。工事担当者が、実物を高岡 1 遺跡の調査員までみせにきた。黒曜石は直方体～楕円体の形状で最大長さ 5 cm 程度であった。

・豊泉川で黒曜石を採取した地点は中流域付近である。流れは緩やかで水位も低く、ゴム長靴で深みも歩けた。黒曜石は長径 5 cm 程度の楕円体で円礫～亜円礫状である (口絵 3)。

自然礫状態の豊泉産黒曜石の特徴をまとめる。

・自然礫の外観は、黒～黒灰色の楕円体の形状で、球果の痕跡である円形の穴が多数ある。

・球果は粗粒 (長径 1～1.5 mm) で多く (面積割合 5～10%)、帯状に並ぶものがある。

・手にした時、見た目の重量感より軽く感じる。⇒球果部分が多いからと考えられる。

・石器製作では、球果でリングやフィッシャーが影響を受ける。

⇒粗粒で多量の球果があるため、均質な素材でなく、精巧な石器や小さなものは製作困難、または不可能と考えられる。

黒曜石 (岩) は、流紋岩あるいはデイサイト (石英安山岩) の仲間、マグマが結晶化する前に急激に冷えることでガラス質になる。このガラス質の石基に平行する筋がみえることや、球果が筋状に並ぶのは、液体の状態であるマグマの名残の「流理構造」である。豊泉黒曜石の特徴である粗粒の球果は「クリストバライト」 (方珪石) という高温型石英の結晶で、石英に富む地質環境での産出が考えられる。

5 万分の 1 地質図幅「豊浦」 (図 66 部分掲載 任意縮尺) に高岡 1・2 遺跡と東雲遺跡の位置を示した。海岸に「フレベシ (ツ)」とあるのは、位置から高岡 1 遺跡の中を流れる「古別川」と考えられ、右岸は川西地区、北地区、中央地区で、左岸は川東地区と高岡 2 遺跡である。

高岡 1・2 遺跡と豊泉川の間の地点で、逆 L 字状に広がる「高岡熔岩」 (TL: Takaoka Lava) がある。この熔岩は豊泉川上流の左岸付近から南方向に続く山体を形成し、海岸付近は西側にのびている。この山間部の最高標高点は四等三角点「浜高岡」 (265.9 m) である。黒曜石が豊泉川へ流れ込んでいること、道央自動車道高岡トンネルの位置から考えて、豊泉産の黒曜石の起源は「高岡溶岩」と考えられる。この溶岩は新第三紀鮮新世 (500 万年～258 万年前) の石英を含む玄武岩質安山岩である。上位は第四紀の留寿都層 (未固結の火山噴出物等) に不整合でおおわれる。現在の高岡溶岩の分布を山体の周囲と仮定すると、山頂は三等三角点「豊泉」 (標高 187.4 m) が考えられ、ここには同じ鮮新世の「礼文華石英粗面岩」 (RL: Rebunge liparite) がみられ、暗灰色～灰色の流紋岩 (= 石英粗面岩) で、2～3 mm の石英の斑晶がみられる。

以上の地質環境から、豊泉産の黒曜石の産出起源は、高岡 1・2 遺跡と豊泉川の間にみられる「高岡熔岩」とこれに関わる「礼文華粗面岩」等の火成岩と推測する。加えて、これらの岩石は石英に富み、粗粒で多量の球果をもつ豊泉産の黒曜石の特徴に合致する。

表31 共立2遺跡 黒曜石原産地分析試料観察表

試料番号	遺跡	器種	残存状態	素材の形状	原産面			石基の特徴	産地予想	分析結果
					部位	色調	特徴			
オ1	共立2遺跡	石器	準完形	—	—	—	—	・小礫 ・縦紋 ・底面 ・多量	赤井川	赤井川
オ2	共立2遺跡	石器	完形	—	—	—	—	・小礫なし	赤井川・豊泉産でない	上土曜
オ3	共立2遺跡	石器	完形	—	—	—	—	・赤色部分 (緑赤斑～色)	白滝?	上土曜
オ4	共立2遺跡	石器	完形	—	—	—	—	・無色透明 ・小礫 ・縦～平紋 ・底面ではない	?	豊浦?
オ5	共立2遺跡	石器	完形	—	裏面左側	(黄灰色)	・直線的なくぼみ ・ザラつき	・小礫 ・中粒 ・底面	?	赤井川?
オ6	共立2遺跡	スクレイパー	準完形	—	表面右側	(黄灰色)	・わたあめ状 ・粗い ・ザラつき	・小礫なし	赤井川でない	上土曜
オ7	共立2遺跡	スクレイパー	完形	角柱状?	背面	(灰色)	・光沢なし ・くぼみなし ・ザラつき	・小礫 ・中～粗粒 ・底面 ・多量	赤井川	赤井川
オ8	共立2遺跡	スクレイパー	完形	角柱状?	左側面 下端面	(灰色)	・光沢なし ・縦線に対応する ・平行な筋 ・ザラつき弱い	・小礫 ・細～微粒 ・底面 ・少量	赤井川	赤井川
オ9	共立2遺跡	スクレイパー	半形	角柱状?	背面	(青灰色)	・光沢なし ・くぼみなし ・ザラつき	・小礫 ・中～粗粒 ・底面ではない ・リンダ・フィッシャーへの影響	豊泉	豊浦
オ10	共立2遺跡	石核	—	角柱状?	上面 表面・裏面 左右側面	(青灰色)	・光沢なし ・縦線に対応する ・平行な筋(光沢) ・ザラつき	・小礫 ・中粒 ・底面ではない ・リンダ・フィッシャーへの影響	豊泉	豊浦
オ11	共立2遺跡	U・Hフレイク	—	円錐状	表面	(灰色)	・縁部のくぼみに光沢 ・ザラつき	・小礫なし	十勝? 河川	上土曜
オ12	共立2遺跡	U・Hフレイク	—	—	背面 下端面	(黄灰色)	・くぼみ ・ザラつき	・赤色部分 (緑赤斑～色)	白滝?	上土曜

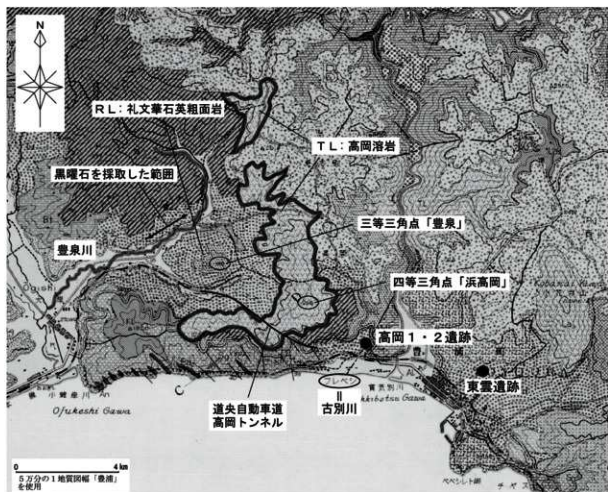


図66 豊浦町豊泉黒曜石原産地

3. 寛文9年蝦夷の乱（シャクシャインの戦い）における長万部

豊野4遺跡から国縫川をはさんだ対岸の国縫小学校跡地（平成26（2014）年閉校）に、平成28（2016）年9月に建立された「シャクシャイン古戦場跡碑」がある。説明文によると寛文9（1669）年の蝦夷の乱すなわちシャクシャインの戦いで、鉄砲を構えた松前藩と弓矢を武器とするアイヌ軍勢が、国縫川をはさんで対峙し合った古戦場とある。また、国縫川河口から約3km上流の右岸、標高161.4mの山中に「国縫チャシ」（登録番号7）がある。「増補改訂 アイヌ伝承と砦」（宇田川 2005）には、①：この戦いの時に松前藩の蠣崎作左衛門が国縫にかまえた城、②：シャクシャイン率いるアイヌ勢が最後まで抵抗したチャシとの二つの説明がある。これら内容が相反しているのは根拠とする引用文献の違いである。すなわち、①：松前軍の城との説は、松宮観山が宝永7（1710）年に記した『蝦夷談筆記』（高倉編 1969）であり、②：アイヌが籠城したチャシとの説は、北海道教育庁の包蔵地一覧の「番号：7 アイヌ砦跡 国縫 アイヌ古戦場」等との情報からである（北海道教育庁 1967）。

このように伝えられる内容が異なるので、当時の長万部での戦況を明らかにしたい。ここでは享保16（1731）年に津軽藩がまとめた記録『津軽一統志』巻第十之上・中・下（『新北海道史』第七巻史料一）を用い、「くぬい」（国縫）、「もんべつ」（紋別川流域＝中の沢・平里）、「おしやまんへ」（長万部市街）、「しずかり」（静狩）の地名がみられる文章を解釈する。旧字体は新字体で記述し、現代語解釈は内容の理解に重点をおいたので、文法等の細かな間違いがあることを断っておく。

＊地理情報

●「くぬいよりしふちやり迄の間、秋罷有候所の覚 ーくぬい もんべつ おしやまんべーしつかり（略）」（『津軽一統志』巻十 142頁 下段 以下、文献名略す）

⇒国縫から静内までの間でアイヌがいる地域 ・国縫・紋別（中の沢・平里）・長万部（市街）・静狩（略）

●「下の国道積 ー松前よりくぬい迄 四日 ーくぬいよりうす迄 二日 但 七里の渡有（略）（しふちやりまで）都合十一日の道積」（169頁 下段）

⇒太平洋岸の道の行程

・松前から国縫まで4日、・国縫より有珠まで2日、約27kmの海上移動（略）（静内まで）11日の行程である。

●「くぬいよりせたいへの山越口 くぬいより金山なるこや迄馬足の自由に御座候。金山よりせたいへ参候には、せたい川流に随ひ小船にて通路仕候、水の高下により、一日にも一日半にもせたいへ参候。せたいより金山え登り候には、急候て二日も二日半にも又三日にも参候。陸の通筋は無御座候由の事。」（169頁 下段～170頁 上段）

⇒国縫からせたいへの山越えの道

国縫から金山の小屋（今金町美利河付近）まで馬で行ける。美利河付近の金山からせたいへ行くには、せたい川（後志利別川）を小船でいく。水位により1日～1日半でせたいに至る。せたいから金山への登りは急で2日～2日半～3日かかる。陸の道はない。

●「しつかりよりすつつへの山越口 ー しつかりの川の流に随ひ登候て、野山を少し越候へは、すつつの川へ出申候。又すつつの川の流に随ひ下候へは、すつつへ出候由。さのみ難所は無御座候由申候。しつかりよりすつつ迄急候へは一日にも越申候。此度松前の人數此越口一日半に越申候。足場能候間、馬も通可申由申候事。」（170頁 上段）

⇒静狩から寿都への山越えの道

静狩の川の流れ(長万部川と知来川)沿いに登って、(JR函館本線の旧蔵谷駅付近)の小山を越えて、寿都の川(黒松内川と朱太川)沿いに下っていくと着く。難所はない。静狩から寿都は急げば1日である。今回の松前軍勢も1日半で踏破した。足場はよく馬も通れる(8月26日～9月3日、チメンバを討ち取るため、松前軍が日本海側へ行った時のことであろう(後述))。

●「松前より下国への道積(略)のたい村迄 家数四つ五つ 海辺砂浜 川有 一のたい村より六里 くんぬい村迄 川有 のたいより半里計行 ほろもい村狄居る たろい村迄 くんぬいより一里半計手前に家数二つ三つ 馬留村なり くんぬい浜小屋数四十計 金山は三り四り計も奥の山に有由 一くんぬいより二十丁 もんへつ迄 一もんへつより一里二丁 をしやまんべ迄 一をしやまんべより二里 しつかり迄 一しつかりより三日路 うす迄 此間れふんけ一村べ、一村舟路四里有之由 一うすより十里 ゑとも迄(略)」(170頁 下段～171頁 上段)

⇒(略)のたい(野田生)まで 家が4～5軒、海は砂浜、野田追川あり 野田生から国縫まで約24km、国縫川あり 野田生から約2kmでほろもい(山越か?)、アイヌがいる たろい(不明)まで 国縫から約6km手前に家2～3軒 馬留(黒岩か豊津)である。

国縫の浜に小屋が40軒、金山(今金町美利河付近)まで3～4里奥の山である。

・国縫から紋別(中の沢・平里)まで約2km、・紋別から長万部(市街)まで約4km、長万部(市街)から静狩まで約8km、・静狩から有珠(伊達)まで三日 この区間に礼文華、豊浦(ペンベ)あり、海路約16kmである。・有珠(伊達)から室蘭まで約40kmである。

●「松前より下狄地所付(略) 一くんぬい 川有 青山弥左衛門商場 狄おとなベルフレ 一もんへつ くんぬいより一里 川有 狄おとなマシマ 家五軒 一おしやまんへ 是迄一里 川有 狄おとなアマリ 家五、六軒 一へべ 小川有 家十軒 一れふんけ 狄おとなツヤシヤイン持分 家二軒 一しつかり 【おとなマシマ】是より山越うすへ出る 道のり五里 (略)」(176頁 上段)

⇒松前から太平洋岸のアイヌ地

・国縫、国縫川あり、青山弥左衛門商場、アイヌ首長ベルフレ
・紋別(中の沢・平里)、国縫から約4km 紋別川あり アイヌ首長マシマ、家5軒
・長万部(市街)、ここまで約4km、長万部川あり アイヌ首長アマリ、家5～6軒
・ペンベ(豊浦)、貫文別川あり、家10軒
・礼文華、アイヌ首長ツヤシヤイン持分、家2軒
・静狩、[アイヌ首長マシマ]、是より山を越え寿都(うすは誤記)へ至る、道のり約20km。

●「ゆふらつふ くんぬいの入江、西南の風に船出する。登りにはあい山瀬にて吉。ゑさんの崎より くんぬい迄上二日路。此間山瀬風にてくんぬいへ渡海仕候。」

⇒遊楽部(八雲)、国縫の入江は西南の風に船出する。松前に向かうには北風と山瀬(東よりの風)がよい。恵山岬から国縫まで2日で、この間山瀬の風に国縫に至る。

内容

国縫川がある国縫は、浜に小屋が40軒あり、この地域では大きな村である。紋別川流域の中の沢・平里は家が5軒、長万部市街は5～6軒である。日本海側の寿都へは静狩から山を越えるとあり、地理条件に当てはまるのは長万部川で、当時は左岸が静狩、右岸が長万部と呼ばれていた。礼文華と豊浦の記載は順序の誤認であろう。国縫から山奥に「金山」すなわち「砂金地」があり、これは今金町美利河付近で多数みつつかっている砂金跡の遺跡である。金山にある小屋は「クンナ井砂金山 御役所」(図67)と考えられる。国縫から御役所までは馬が通れる道が続き、砂金地からせたなへの道筋も記

載があり、日本海側へ至る重要なルートの一つであった。国縫への海路や操船のための風向きも早くから知られている。当時の国縫は重要地であり、その理由は「砂金地」である。

*アイヌのチメンバ 6月の動き

●「一 当六月中旬、シャクシャイン縁類チメンバと申秋、くんぬいの山を踏越、上の国へ参、いそや辺の狄共へ右蜂起の次第語聞せ候に付き、上の国の狄共一味仕候事。」(131頁 下段)

⇒・6月中旬、シャクシャインの遠戚チメンバが、国縫の山中を越えて、日本海側へ行き、磯谷(蘭越町)近辺のアイヌに戦いの蜂起について言い伝え、日本海側のアイヌが仲間になった。

●「一 シャクシャイン三番目の子、六月初頃くんぬいの山中を直に上の国磯矢と申所へ、狄三拾人計同心引越、磯矢近所の狄共皆々語[り]なひけ候事。」(135頁 上段)

⇒・6月初旬、シャクシャインの三番目の子チメンバが、国縫の山中を越えて、日本海側の磯谷(蘭越町)へ行き、総勢30人と引越してきた。近所のアイヌはみんな話している。

内容

日本海側での蜂起のため、シャクシャイン親族のチメンバが日本海側の蘭越町磯谷に移動した。静内からは長万部・静狩を通して寿都へのルートが近いが、遠回りして国縫を通っており、チメンバは国縫の砂金地を偵察したと考えられる。

*国縫の備場

●「一 くんぬいにおみて、備場可陣取場所の事 ○不参候に付様子不存候。乍去聞及絵図御座候事。」(125頁 下段)

⇒・国縫で備場や陣地となりうる場所について ・行ってないので様子がわからない。しかしながら、絵図があると聞いた。

内容

松前藩の砦や館といった陣地は存在しなかったと考えられ、存在を耳にした絵図は、現在の今金町美利河地区にあった「クナ井砂金山 御役所」(図67)であろう。

*松前の防御拠点

●「一 くんぬいえ雑兵都合千人計差遣候事。」(123頁 下段)

⇒ 国縫に兵士1000人集めて派遣した。

●「一 くんぬいにては金堀小屋の廻り橋を付、其内に人数差遣候由」(123頁 下段)

⇒ 国縫では(美利河にある)砂金小屋、すなわちクナ井砂金山の御役所の廻りに橋をめぐらし、中に防御のための人員を配置した。

●「一 下はくんぬい 亀田両所、上はいぬま(沼) 熊石 関内(右)三ヶ所」(132頁 上段と146頁 下段)

⇒・松前の防衛拠点は、太平洋岸は国縫と亀田(両館)、日本海岸は相沼、熊石、関内(八雲町熊石)の三ヶ所である。

内容

国縫に送られた兵はやや正確には先発隊約530人、蠣崎藏人に伴い350人、松前八左衛門が率いた90人であり(後述)、およそ1000人と記したのであろう。クナ井(国縫)砂金山の御役所の周囲に橋を設け、内部に防御人員を配置した。また、松前藩の防御地点は、太平洋岸は国縫以外に亀田に200

人（七飯町峠下付近と推測）、日本海側は関内～熊石～相沼に500人の兵が守った。

*国縫への先発派兵

●「一 当六月時分（末頃）蠣崎作左衛門（人名四つ略）雑兵八拾人程にてくんぬい参、其後新（井）田瀬兵衛（人名五つ略）雑兵百人程にてくんぬい参候。右の外金堀三百四、五拾人はまたくんぬい参候事。」（132頁 上段と147頁 上段）

⇒・6月末時点、蠣崎作左衛門らが兵80人程で国縫に行き、その後、新井田瀬兵衛らが兵100人程で国縫に行き、これら以外に砂金坑夫340～350人が国縫へ行ったとあり、147頁の記述での時期は6月末頃である。

*蠣崎蔵人の国縫への出発

●「一 蠣崎蔵人七月廿六日松前発足、上下八拾人*在々 所所の人数百貳拾人計召連、くんぬい参候。同廿八日、松前の者共百五拾人程参候事。」（132頁 上段と147頁 上段）

⇒・蠣崎蔵人は7月26日松前を出発し、直属の部下80人、いろんな場所で120人を集め国縫へ行った。7月28日には松前の兵150人ほどが出発した。

内容

この乱（戦い）はシコツ（千歳）で松前の船の人員が殺されて勃発し、その知らせが松前に届いたのが6月22日である。藩は速やかに出兵し、6月末には兵が国縫に常駐している。加えて国縫砂金地の労働者（砂金坑夫）を動員した。蠣崎蔵人は7月26日に松前を出発し、国縫に到着したのは8月3日頃と推測される（理由は後述）。南下してくるであろうアイヌの軍勢と、たまたまこの地で衝突したというよりは、砂金地を守るため、松前側が国縫で迎撃する計画であったと考えられる。

*国縫での戦況の概要

●「松前よりくんぬいと申所え人数詰候。已後シヤクシヤ（イン）方の狄共三百人程あとも申所迄詰候、其後もんへつと申所迄詰候、七月廿八日の晩より八月三日の晩まで五〔人〕 十人宛トバリを付申由」（122頁 上段）

⇒松前から国縫に人員が詰めている。シヤクシヤイン側のアイヌ300人がえとも（室蘭）まで進み、後、平里まで詰めている。7月28日夜～8月3日夜まで5～10人の見張りをつけた。

内容

松前軍は国縫において、シヤクシヤインのアイヌ軍勢はえとも（室蘭）から紋別川流域（長万部町中の沢～平里）まで進んできた。7月28日夜から5～10人に見張りを付け8月3日まで続けた。

*7月28日国縫での戦況

●「七月廿八日の夜トバリの狄を鉄砲〔にて〕打散〔候〕事。」（123頁 下段）

⇒7月28日夜、（国縫で）夜襲のアイヌを鉄砲で討ち取った。

●「松前勢くんぬいにて働様子の覚

一 七月廿八日の夜くんぬい要害の所へ狄共忍参候を張番の者共見付、鉄砲を放し可申と火縄を吹込候を狄目当て仕、毒矢を射懸候由。然共、矢除の頭巾に当り申候由。則矢の参候方を目当てに鉄砲放候由。夫より鉄砲度々打申候に付、狄逃散候由。翌日見申候へは、めのこし一人おつかい一人うたれ申候由。其外狄矢 火矢共に六本、弓四挺、今織の糸付たる羽織一ッ落置候由。右の外にもうたれ候

と相見得、道具なども捨置候得共、死骸は引取哉見へ不申候。其後味方の狄風聞申候は、メナシクルの頭ツノウシ マクワ チメンバ ウエンツタシ四人の内〔ツノ〕ウシ マクワ二人の内〔狄〕討れ候哉、〔其後〕見へ不申候由申候事。」(147頁 上・下段)

⇒松前軍勢の国縫での動き

・7月28日の夜、国縫の守備陣地にアイヌが隠れてやってきたのを見張の者が見つけ、鉄砲を撃つことにし、火縄を吹いたところにアイヌがめがけて毒矢を射った。しかし、矢を防ぐ頭巾に当たった。すぐに矢の来た方に鉄砲をうち、それから複数回射撃したので、アイヌは逃げ去った。翌日見に行ったところ、女性アイヌ1人と若輩の男性アイヌ1人が撃たれていた。その他にアイヌの矢、火の矢が6本ずつ、弓4挺、今織の襟をつけた羽織が1着落ちていた。これ以外にも撃たれた様子があり、道具等が捨て置かれて、死体は引き取られたので見られなかった。その後、味方のアイヌが伝え聞いたのは、メナシクルの首長ツノウシ、マクリ(マクワ)、チメンバ、ウエンツタシの4人のうち、ツノウシとマクリ(マクワ)が討たれたのではないかと、その後姿をみないからである。

内容

7月28日にアイヌの夜襲があった。松前軍の守備陣地にアイヌが弓矢で夜襲にきた。見張りの兵は鉄砲で迎え撃ち、これを撃退した。翌朝見に行くと、女性アイヌと若いアイヌが撃たれて死んでいた。弓矢は全部で4挺あったので、もう2人いたと考えられた。遺体が回収されたのかもしれない。その後、別の日に、シャクシャインが率いる「メナシクル」アイヌの首長ツノウシとマクリ(マクワ)が姿を見えないから、2人は討ち取られたのではないかと松前に味方するアイヌが聞いた。この2名が討ち取られた様子は後述する。

※ 8月4日国縫軍勢の動き

●「八月四日、おしやまんべよりしつかり迄、人数六百計にて押懸参候事。」(123頁 下段)

⇒8月4日、長万部から静狩まで、松前軍600人の軍勢で攻め入った。

●「一 八月四日、おしやまんべと申所に狄人二百余集罷有候処、松前人数雑兵六百計にてくんぬいへ押寄候へは、狄共皆散々に山中へ逃込申候に付、山中へ押懸相尋候へとも、足はやに逃散候故、討捕不申候由。右の時分狄二人海辺へ逃込候を、鉄砲にて討捕申候。」(137頁 上・下段)

⇒・8月4日、長万部という所にアイヌ勢200人ほど集まっていたところ、松前軍は兵600人で国縫へ押し寄せたので、アイヌ勢は山中にちりちりになって逃げ込んだ。山の中へ搜索に押し入るも足早く逃げ去り、討伐できなかった。この時、アイヌ二人が海辺へ逃げ出たので、鉄砲にて討ち取った。

●「一 えともへ相詰候、もんへつ おしやまんへ迄押詰、くんぬい口とばかりを付申候由。八月四日、くんぬい勢先手蠣崎作左衛門、二の手蠣崎藏人、三の手松前儀左衛門 佐藤権左衛門。雑兵六百人程にておしやまんへへ押寄候の処、もんへつと申す所に狄共小屋餘多懸置、メナシクルの狄共三百人程有候歟、松前勢押懸候に付、道具喰物をも捨置散々に逃失申候に付、狄小屋皆々焼捨候由。」(147頁 下段)

⇒・えとも(室蘭)に進んでいたアイヌは、紋別、長万部まで進み、国縫の入り口に見張りをつけていた。8月4日、国縫の軍勢、一番手に蠣崎作左衛門、二番手に蠣崎藏人、三番手に松前儀左衛門と佐藤権左衛門。兵士600人で長万部へ進んだところ、紋別でアイヌの小屋が多数あり、メナシクルアイヌが300人程いた。松前軍勢が来たら、道具や食物をおいて逃げ去ったので、アイヌの小屋を焼き捨てた。

●「一 うすの狄共二、三拾人おしやまんへの川向にひかへ罷有候を、浜へ呼出し、様子相尋候得は、右より味方を仕候間、此度くんぬいへ寄申候狄共方え扱を入可申と存是迄参候得とも、敵に隔てられ

候由申候得共、うろんに付、頭立候狄共拾人計繩を懸、くんぬいへ越申候由。」(147頁 下段～148頁 上段)
⇒・有珠(伊達)のアイヌ20～30人が長万部の川の対岸にいたのを、浜に呼び出して、様子を尋ねたら、この地で松前の味方でいました。今回、国縫へ来たアイヌに仲間入りしたいと思行こうと試みたが、敵に隔てられていたため行けなかったと話した。真実が疑わしいので、親方アイヌ10人に縄をかけ、国縫へ来させた。

●「一 松前勢しつかりと申所迄押参候処、狄船廿四、五艘しつかりの浜に揚置候を皆々打破捨申由。近辺に狄共見へ不申候由に付、くんぬい勢おしやまんへ迄帰り、川端に一宿仕候事。」(148頁 上段)
⇒・松前軍勢、静狩まで推し進んだ。アイヌの船が24～25艘静狩の浜に揚げ置かれていたのをすべて打ち壊した。近くにアイヌはみられなかったので、国縫から来た軍勢は長万部に帰り、長万部川の川岸で野営した。

内容

8月4日に松前軍は攻撃を開始した。松前軍の攻撃順序は、一番手に蠣崎作左衛門、二番手に蠣崎蔵人、三番手に松前儀左衛門と佐藤權左衛門で、兵は総員600人で、中の沢～平里と長万部市街に攻め込んだ。これらには、室蘭から進んできたメナシクルのアイヌ軍勢200～300人がおり、アイヌ軍勢は松前軍の攻撃に反撃することなく、道具や食料を置いて山中にちりちりになって逃げ込んだ。山中を搜索したが、さらに逃げ足が早かった。浜辺に逃げたアイヌ二人を鉄砲で撃ち、中の沢～平里に多数あったアイヌ小屋を焼き払った。

長万部川の対岸(左岸)に有珠(伊達)のアイヌが20～30人いたので、浜(旭浜)で状況をたずねたところ、松前藩の味方ですが、長万部にいる敵対アイヌにささぎられて国縫まで行くことができなかったと話した。疑わしかったので、10人のアイヌを縄で縛り国縫へ連れてきた。

松前軍は静狩の浜に陸揚げされたアイヌの船24～25艘を破壊した。近辺にアイヌはみえなかった。この国縫から来た軍勢は長万部川で野営した。

* 8月5日国縫軍勢の動き

●「同五日、しつかりより帰るさに、近辺の山々狄狩仕候事。」(123頁 下段)

⇒8月5日、静狩からの帰途に、近くの山でアイヌを搜索した。

●「一 五日の朝右の勢くんぬいえ帰候節、四、五人に鉄砲持たせ山際通候処に、山中より狄矢少々射懸候に付、夫より惣勢川上に廻り山を狩申候へは、方々より毒矢を放し申候て、草の中を忍び逃申候由。狄二人浜へ押出申候を、金堀の者共鉄砲にて打捕申候事。」(148頁 上段)

⇒・5日の朝、これらの軍勢が国縫へ帰る時に、4～5人に鉄砲を持たせ山際を通ったところ、山中からアイヌの矢が少し射られたので、そこから総勢で川上に回り込み、山狩りをしたところ、あちこちから毒矢を放ち、草むらに隠れて逃げた。アイヌ2人を砂浜へ追い詰めたのを、砂金坑夫が鉄砲で討ち取った。

内容

静狩から帰途、長万部での野営明けの朝、国縫への帰りに、鉄砲を持った4～5人に山際の道を歩かせたら、山中からアイヌの矢が飛んできた。そこで多くの人員を川上に回り込ませ、山中を搜索すると、アイヌは方々から矢を射って、草の中に身を潜めて逃亡した。砂浜へ追い込んだアイヌ2人を砂金坑夫が鉄砲で撃った。

*有珠アイヌのインレンカについて（8月4日以降）

●「一 うすの狄、兼てより味方可仕と申候に付、うすの狄の内インレンカと申狄人質に取、くぬいに差置候。右の通八月四日にうすの狄七〔十〕人計縄下に仕候に付、インレンカ申付ては、敵の狄何方に如何程有之候哉聞立註進可仕候。又下口へも参候て様子見可申旨申付、うすへ通申由、此狄うたり狄有之に付、方々へ差遣候メナシクルの様子、聞申候由。」（148頁 上段）

⇒・有珠（伊達）のアイヌは、かねてから味方ですというので、有珠のアイヌのインレンカを人質にとり、国縫に置いた。先に述べたよう8月4日に有珠のアイヌ10人を縄でしばり捕らえ、インレンカに命令、敵のアイヌがどこにどれくらいいるのか聞きだすように。また、松前より下る（東へ）もいって様子をみてくるよう申しつけ、有珠へいくのに通る、このアイヌや手下のアイヌをこの命令につかせて、あちこちへ差し向けメナシクルの様子を聞き出すようにした。

内容

8月4日に長万部の浜で拘束し国縫に連行した、伊達のアイヌの一人インレンカに、敵のアイヌの潜伏先や人数を諜報してくるよう命じ、伊達に戻るまでの道筋で彼や彼の手下を遣わし、メナシクルアイヌの動きを知らせるよう命じた。

*アイヌのマクリ（マクワ）とツノウチのこと

●「一 蠣崎作左衛門 佐藤權左衛門両組にて八月十五日おしやまんべにて狄と取合候節、權左衛門様より押入、狄七、八人打取申由。其日首二つ蠣崎藏人家来の者捕申候。其外は死骸狄共方え引取申由。右の内、マクリと申狄權左衛門家来の者、鉄砲にて打申候。然共、死骸は右の外狄共え引取自由。此狄はシャクシャイン手の者の内にては頭立候者の由。右の子細はシャクシャイン人数打もられ、奥狄え逃退申時分、しらおいと申所にて、右のマクリ見え不申候と、其所の狄共申候。此所の狄は松前の味方の者にて御座候。弥權左衛門家来にマクリ打れ申所紛無御座候。右の外狄共七、八拾人御座候由。」（141頁 上段）

⇒・蠣崎作左衛門と佐藤權左衛門が、8月4日または5日（15日は誤り）長万部でアイヌと対峙した時、佐藤權左衛門から突撃しアイヌ7～8人を討ち取った。その日、首を2つ蠣崎藏人の家来が捕ったと言ってきた。その他の遺体はアイヌに引き取らせた。先に述べたうち、マクリ（マクワ）というアイヌを、佐藤權左衛門の家来が鉄砲で討ち取った。しかし、死骸はアイヌに引き取らせた。このアイヌはシャクシャインの地位のある部下である。この詳細はシャクシャインがアイヌ地の奥へ逃げた時、しらおい（白老）で、マクリがいないと、その場所のアイヌが言った。ここのアイヌは松前の味方である。佐藤權左衛門の家来にマクリが討ち取られたことは紛れもない事実である。この他にアイヌが70～80人いる。

●「一 ツノウチと申狄も、シャクシャイン手の者にして御座候。右のマクリと同所の者の由。是も鉄砲にて脇の下討れ申候。然とも今に相果不申候由。」

⇒・ツノウチというアイヌも、シャクシャインの手下であり、先のマクリと同じ場所の者である。この者も鉄砲で脇の下を撃たれた。しかし今は2人とも死んだと言わなかった。

内容

8月4日あるいは5日の紋別または長万部と思われる。蠣崎作左衛門と佐藤權左衛門が同地でのアイヌとの対決で、先に攻撃した佐藤權左衛門はアイヌ7～8人討ち取り、同じ日、蠣崎藏人の家来が2人を討ち取った。死体はアイヌに引き取らせたのでわからないが、佐藤權左衛門の家来が討ち取った1人はマクリ（マクリ）というアイヌで、シャクシャインの有力な手下であった。彼が撤退した時、

白老で同地のアイヌにマクリがいないと指摘された。同じく部下のツノウチは鉄砲で脇の下を撃たれた。マクリ（マクワ）とツノウチが討ち取られたことは、7月28日にも記載がある。

*シャクシャインの撤退

●「一 しふちやりのシャクシャイン方より船五十艘計にてしこつと申所迄狄共押参候処、八月四日、五日くんぬいの勢しつかりと申す所まで押参候を及承、右押参候狄共、しふちやりへ引取申事。」(139頁 下段)

⇒・静内のシャクシャイン側から50艘の船で支笏（千歳）までアイヌが進んできたところ、8月4・5日、国縫の軍勢が静狩まで押し進んだのをうけ、進んできたアイヌ勢は静内に引き返した。

内容

シャクシャインは50艘の船で海路をしこつ（千歳）まで進んでおり、太平洋岸の苫小牧付近と推測する。8月4・5日に松前藩の国縫の軍が静狩まで進んできたので、静内に引き上げた。

*総大将 松前八左衛門泰広の動き

●「松前八左衛門様八月九日松前え着船、同十六日くんぬいえ御越、上下八、九拾人。一 鉄砲拾五挺 一 長柄鎗 持柄鎗共に四本 一 弓立三張*家老の鉄砲三挺」(164頁 下段)

⇒松前八左衛門泰広様は8月9日に船で松前に着き、16日に国縫へ到着した。直属の部下80～90人鉄砲15挺、二種類の槍合計8本 弓3張、家老の鉄砲3挺である。

●「一 松前八左衛門、くんぬいより二日路下うすと申所迄押参候得共、狄悉く逃散申候由。兵糧も不足に御座候故、先くんぬいへ罷帰候由。」(139頁 下段)

⇒・松前八左衛門泰広が、国縫から二日の行程、有珠（伊達）まで進んだところ、アイヌはみんな逃げ去った。兵糧も不足したので国縫に帰った。

内容

総大将である松前八左衛門泰広は、8月9日に江戸から松前に来て、16日に国縫へ到着した。武器は鉄砲18挺、槍8本、弓3張である。

（8月16日以降）日にちは記載がないが、松前八左衛門泰広は、海路を二日かけて伊達に進軍した。アイヌはみんな逃げてしまい、食糧も不足したので国縫に戻った。

*松前の味方のアイヌ

●「一 八月廿八日、くんぬいより松前え申来候、さる、しこつの狄共松前え味方可仕由申来候事」(138頁 下段)

⇒・8月28日、国縫から松前へやってきた沙流（日高・平取）、支笏（千歳）のアイヌが、松前に味方すると言ってきた。

内容

8月28日に国縫から松前に味方するアイヌが来た。国縫から松前までの行程は四日かかるので、25日頃に国縫を出発した。

*アイヌのチメンバ 8月のこと

●「一 上の国しこつと申所より国縫へ申来候は、チメンハと申狄七、八人にて同所の兄弟所え引越、右のチメンハ殊外成いたつら者にて、方々を走廻り狄共へ徒党仕せ候由。依之くんぬいえ相詰候人数

三百四、五拾人にてしこつへ押寄、チメンハを討殺候。其序に、いそや しりふかと申所へ寄候て商船盗賊仕候共討殺し可申由相談にて、八月廿六日右の人数くんぬい発足仕候由申候事。」(139頁 上段) この本文中のしこつは寿都の誤り

⇒・日本海側の寿都(支笏は誤)から国縫へきたのは、チメンハとはかのアイヌ7～8人で、ここにいる兄弟のところに引越してきた者である。チメンハは困った者で、あちこちに走り回りアイヌ同士を团结させようとした。このため、国縫へ詰めていた340～350人で寿都に押しかけ、チメンハを討ち殺した。その前に、磯谷、しりふか(共和町堀株)に行つて、商船を襲い盗みをしたアイヌを討ち殺してよいか相談し、8月26日、右の人数で国縫を出発した。

●「一 くんぬいよりすつと申所に、チメンバと申狄罷有候に付、人数を遣候処、チメンバ第*母其外四、五人生捕、くんぬいえ九月三日に罷帰候由風説及承候事。」(139頁 下段)

⇒・国縫から寿都に、チメンバというアイヌがいるので、兵を遣わして、チメンバの弟、母親と他4～5人を生け捕りにし、国縫に9月3日に帰ったと耳にした。

内容

シャクシャインの親族チメンバ(チメンハ)と他7～8人は、寿都にいる兄弟の下に引越した。チメンバは各地に団結し蜂起しようと働きかけた。これは国縫砂金地を日本海側から狙う計画があったと考えられる。このため国縫にいる松前の軍勢は、8月26日に340～350人で国縫を出発して、先に蘭越町磯谷と共和町堀株に行つて、商船を襲ったアイヌを討ち殺した。寿都にも行きチメンバを討ち殺し、他にチメンバの弟や母親、他4～5人を生け捕りにして、9月3日に国縫に戻った。

*国縫軍勢の静内への進軍について

●「一 松前の人數くんぬいよりしふちやり迄、押詰可参と、兵糧 船杯支度仕候由。」(138頁 上段)

⇒・松前の人員を国縫から静内まで進められるよう、兵糧船の準備をしている。

●「一 今月三日松前八左衛門*兵庫家来蠣崎藏人くんぬいを発足仕、下の国狄シャクシャイン居所、しふちやりと申所へ押参候由。」(140頁 上段)

⇒・今月(9月)3日、松前八左衛門泰広と兵庫の家来の蠣崎藏人が国縫を出発し、太平洋岸のシャクシャインの居場所、静内へと進軍した。

●「(略) 若くんぬいよりしふちやり迎えも押被参候や、頃日便不承無心元在候。併今時分は船の通路無之、兵糧運送不能成候間、大形延引可仕かと申候事。」(140頁 下段)

⇒もし、国縫から静内あたりまで押しかけられたら、日ごろから心元なく思うでしょう。また、今頃は船での通路がなく、兵糧を運送できない期間は、長く引き伸ばす作戦が可能である。

●「一 下の国くんぬいえ松前八左衛門 蠣崎藏人雑兵千人余に相詰罷有候。先日頃の相談には、シャクシャイン居所しふちやりえ押寄候筈に相突候。其後は何共不申候様。何も存候はくんぬいよりうすえの取付、尤陸地に御座へとも、難所に御座候て、縄杯下け越申山などに御座候に付、兵糧 諸道具持参候事不自由御座候故、船にて不参候へは不叶様に申候。」(141頁 下段)

⇒・太平洋岸の国縫へ松前八左衛門泰広と蠣崎藏人が1000人の兵で駐屯している。先日の相談ではシャクシャインのいる静内へ進軍することに決まった。その後は誰も何も言わない。いずれも、国縫から有珠への道のり、もっとも陸地でも難所で、縄をつけて越えなければならない山であり、兵糧やいろいろな道具持参することは不自由であるので、船で行くしかない。

●「一 シャクシャイン松前よりの手段同心不仕候は、くんぬいに罷有候諸勢を順にくり寄せ、彼狄居所え被懇申にて可有之候。然共、狄共山中え逃入可申候間、押寄候ても無詮事の由申候。」(143

頁下段)

⇒・シャクシャインは松前側の打つ手に同調しないだろう。国縫にある軍勢を順に送り込んで、シャクシャインの居場所へ到達させる。アイヌが山中に逃げ込むと、軍勢を進めても搜索できない。

●「一 くぬい勢、しふちやりシャクシャイン居所へ押〔寄〕可参由にて、其支度有之由。依之、兵糧船、五百石積二艘下口へ廻し申候由。」(148頁 上段)

⇒・国縫の軍勢が、静内のシャクシャインの居場所へ進軍するにあたりその支度をする、これは、500石の米を積んだ兵糧船2艘を松前より東に向かわせる。

内容

国縫からシャクシャインの本拠地の静内に9月3日、松前八左衛門泰広、蠣崎藏人が進軍した。松前からの兵糧船2艘も東に出発する。有珠(伊達)までは険しい山道なので、食糧や武器を携帯して進軍はできないので、船で進む。松前軍が静内に到着して、アイヌが山中に逃げてしまうと搜索しきれない。

*国縫でのその他のこと

●「一 悪狄共、米飯つまり、くぬいの馬を三つ打ち殺し食申候。」(141頁 上段)

⇒悪いアイヌが、米の食糧が尽きて、国縫の馬を3頭殺して食した。

●「一 今度おしやまんへにて殺され候狄二人切ちらし置候を、敵の狄いつの間に参候て、彼二人の狄をぬい合理置候由。 右の狄はしこつのトウケン、一人はさるの狄の由。」(167頁 下段～168頁 上段)

⇒今回、長万部で殺された(味方の)アイヌ2名が切られたのを放置していたら、敵のアイヌが知らない間に来てその2名を埋葬した。このアイヌは支笏(千歳)のトウケン、一人は沙流の者である。

内容

食料の米がなくなったアイヌが、国縫で馬を三頭殺して食べた。また長万部で戦死した千歳のトウケンと日高のアイヌを、敵のアイヌが死体を引き取り埋葬した。

まとめ

これらの内容を場所ごとに分け、時系列で表32にまとめた。当時の国縫は、金山すなわち砂金地(今金町 美利河付近)があり重要な地であった。シャクシャインの親族(あるいは子供)チメンバの事への動きは、国縫砂金地を日本海側から狙う意図が感じられる。国縫～長万部の地が戦場になったのは、互いに移動する両軍勢がたまたまこの地で衝突したのではなく、松前藩は城下までの道と砂金地を守るため国縫を防御地点と定め、6月末に派兵した兵力を現地に待機させアイヌ軍勢を迎え撃った。国縫で守備することは、砂金小屋(御役所)に備わる金堀(人員)の動員、備蓄された食糧や道具を利用でき、進軍するより利点大きい。

・7月28日の戦況

アイヌ軍勢は室蘭から中の沢・平里～長万部に進んでおり、松前軍の陣地は弓矢による夜襲を受け、これを鉄砲で撃退している。

・8月4日の戦況

前日に蠣崎藏人が国縫に到着したので、松前軍はこの者の到着を待って、その翌日に攻撃を開始したと思われる。総勢600人を三手に分けて中の沢～平里に進軍した。300人を数えるアイヌ勢は戦わずして山中に逃げ、松前軍はアイヌ小屋を焼き払い、さらに静狩まで進軍し海浜にあったアイヌの船を破壊した。その後、長万部川の川岸で野営した。

・ 8月5日の戦況

長万部から国縫への帰り、山中からアイヌの矢の攻撃を受けたので、川の支流へ兵を向かわせて山を捜索したとある。背後が開けていて回り込める山という地理条件から、富野地区の「坊主山」と「トド山」と考えられ、河川はオバルベツ川やフラノベツ川とその支流であろう。山中を捜索したが、アイヌは逃げてしまい、軍勢は国縫に帰着した。

その後、8月16日に総大将の松前八左衛門泰広が到着し、国縫を拠点に、日程は不明であるが伊達に進軍し、8月26日～9月3日には、チメンバがいる日本海側の寿都他に350人が進軍している。そして、9月3日にシャクシャインの本拠地の静内に向けて船で国縫を出発した。

『津軽一統志』の記述では、攻め入られたアイヌ軍勢は中の沢～平里と長万部で多くが戦わずして逃亡し、組織として戦闘しておらず、集団を統率し戦いを指揮する者の不在を感じる。さらに松前軍は自分の支配地域で山頂に籠城する必要はない。おそらく、国縫チャシや国縫川が戦いの舞台になったとは考え難い。時間の経過等で言い伝えが変容することは珍しくなく、特に戦史は物語的に誇張される傾向がある。複数の文献を照らし合わせて整理することが必要で、さらにいえば、文献のみから客観的な史実を明らかにするには限界がある。この戦いの痕跡を考古学的に発見することができれば、史実を裏付ける有力な証拠にできる。例えば松前軍が駐屯した跡、中の沢～平里で焼かれた多くのアイヌチセ（焼土、炭化材）等は遺構として、鉄砲の銃弾等は遺物として土中に残されているよう。松前軍が構えた陣地を現地地形から強いて推測するなら、中の沢からの海岸沿いの道と国縫砂金地への山道を見張ることができる、坊主山（125m）麓の高台（四等三角点「円通寺」付近）に前衛陣地をおき、本陣地は少し下がった見晴らしの良い場所、国縫川右岸の高台で国縫墓地がある段丘が適地であろう。また『津軽一統志』にはアイヌの戦死者の遺体を引き取らせた記述がいくつかある。中の沢と国縫の間の花岡地区、ワルイ川河口にアイヌ墓地の花岡遺跡（登載番号12）があり、この戦いの戦死者がここに埋葬されている可能性が指摘されている（長万部町史 57頁）。（末光）

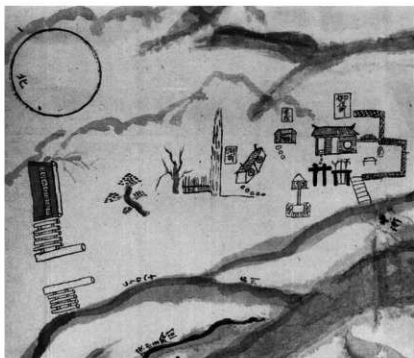


図67 クンネ井砂金山 御役所

表32 寛文9年蝦夷の乱における長万部

西暦	元号	月	日	松前	今金町 美利河 国蔵砂金地	長万部町 国蔵 中の沢～平里 長万部市街 静狩	日本海側 舟部	備考	
1669	寛文	6	初～中旬		シャクシャイン 親族チメンバが 国蔵砂金地を通り 蜂起のため 日本海側の舟部へ		チメンバが 引越してくる	チメンバ 舟部に蜂起	
			22	シロツツ(千歳)で 後撃した船が返く 直ちに国蔵に 先軍部隊を派兵					
			月末	クナナ丹砂金山 御食所(砂金小堀) 七郎蔵 船の設置 人員配置	国蔵に先発の兵が到着 蝦夷作左衛門1番手・最大300人 静狩(舟部)最大300人・最大300人 赤根(砂金産地)最大300人				
		7	25						
			26	蝦夷軍人 船の出発					
			28	松島の舟120人 国蔵へ出航 シロツツ	国蔵の陣地が、 アイヌ軍勢から 弓矢での攻撃を受ける 国蔵軍勢は蜂で応戦 アイヌ2人を射殺	シャクシャインのアイヌ軍勢 (メナシムアイヌ) 最大300人が 国蔵から 長万部・中の沢～平里 まで進む			
			～		国蔵軍勢は 国蔵の陣地で、 松島へ出航して 松島に到着する				
			3		蝦夷軍人 部下90人と 集めた120人で 国蔵到着				
		8	4		国蔵軍勢最大600人が 中の沢～平里 長万部・静狩に進軍 一番手：蝦夷作左衛門 二番手：蝦夷軍人 三番手：松前藩左衛門と 松前藩左衛門と 松前藩左衛門と	アイヌ軍勢最大300人が 攻撃される アイヌは 食糧・道具を置いて 山中に逃げ込む 国蔵軍勢は 両方に逃げ出した アイヌ2人を射殺	国蔵軍勢が、 有珠のアイヌ (インレンカ他) 最大20人を 船で討伐して 静狩の地で アイヌの船 最大2隻を破壊	千歳まで進出した シャクシャイン軍勢 空軍(船) 国蔵砂の北方山への 進軍を受け 静狩に引き返す	
			5		国蔵軍勢が、 有珠のアイヌ (インレンカ他) を連れて 国蔵に到着	静狩市街の南りの アイヌ小堀 (ヤセ)を 焼き払う			5日の戦いで シャクシャインの 部下 マツリ(マツリ) ブノウシ(マツリ) 戦死
			9	総大将 松前八左衛門重成 (江戸から派遣に到着)					
		9	16		総大将 松前八左衛門重成 国蔵に到着				
			26		国蔵軍勢が 日本海側の舟部 に到着して 最大300人出航		国蔵軍勢が、 日本海側の 舟部・山中から 蜂起したアイヌを 討ち取る	この頃 総大将 松前八左衛門重成	
			28	国蔵から 千歳・千歳(成方) のアイヌが見る				舟部でチメンバを 討ち取る	伊達に渡軍して、 国蔵に到着
		9	3		日本海側の舟部から チメンバの舟・母屋 最大10人の舟が到着して 国蔵に到着		チメンバ・母屋 他最大10人を 生け縛る	住吉所 (4月以上)	

松前軍勢の動き

両軍の衝突・戦況

アイヌ軍勢の動き

付篇 1. 共立 2 遺跡出土の黒曜石製石器の産地推定

竹原弘展 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

山越郡長万部町字共立に所在する共立 2 遺跡から出土した黒曜石製石器について、エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

2. 試料と方法

分析対象は、黒曜石製石器 12 点である (表 1)。試料は、測定前に超音波洗浄器やメラミンフォーム製スポンジを用いて、測定面の表面の洗浄を行った。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光 X 線分析計 SEA1200VX を使用した。装置の仕様は、X 線管ターゲットはロジウム (Rh)、X 線検出器は SDD 検出器である。測定条件は、測定時間 100sec、照射径 8mm、電圧 50kV、電流 1000μA、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタに Pb 測定用を用いた。

黒曜石の産地推定には、蛍光 X 線分析による X 線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた (望月, 1999 など)。本方法では、まず各試料を蛍光 X 線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム (K)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe)、ルビジウム (Rb)、ストロンチウム (Sr)、イットリウム (Y)、ジルコニウム (Zr) の合計 7 元素の X 線強度 (cps: count per second) について、以下に示す指標値を計算する。

- 1) $Rb \text{ 分率} = Rb \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$
- 2) $Sr \text{ 分率} = Sr \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$
- 3) $Mn \text{ 強度} \times 100 / Fe \text{ 強度}$
- 4) $\log (Fe \text{ 強度} / K \text{ 強度})$

そして、これらの指標値を用いた 2 つの判別図 (横軸 Rb 分率 - 縦軸 Mn 強度 $\times 100 / Fe$ 強度の判別図と横軸 Sr 分率 - 縦軸 $\log (Fe \text{ 強度} / K \text{ 強度})$)

表 1 分析対象

分析 No.	地区	層位	器種	分類	備考
1	K13IX	III 層	石鏃	準定形	
2	M15IX	III 層	石鏃	定形	
3	—	—	石鏃	定形	
4	N16IX	I 層	石鏃	定形	
5	O12IX	I 層	石鏃	定形	石鏃・ナイフ転用品
6	L10IX	I 層	スクレイパー	準定形	
7	I21IX	II 層	スクレイパー	定形	
8	L22IX	I 層	スクレイパー	定形	
9	I18IX	II 層	スクレイパー	半形	
10	N15IX	III 層	石核	—	
11	I18IX	II 層	i-R フレイク	—	
12	N15IX	III 層	i-R フレイク	—	



図 1 黒曜石産地分布図 (東日本)

の判別図)を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、産地を推定する。この方法は、できる限り蛍光X線のエネルギー差が小さい元素同士を組み合わせ、指標値を算出するため、形状、厚み等の影響を比較的受けにくく、原則として非破壊分析が望ましい考古遺物の測定に対して非常に有効な方法であるといえる。ただし、風化試料の場合、log (Fe強度/K強度)の値が減少する(望月, 1999)。試料の測定面には、なるべく平滑面を選んだ。

原石試料は、採取原石を削って新鮮面を露出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。表2に判別群一覧とそれぞれの原石の採取地点および点数を、図1に各原石の採取地の分布図を示す。

3. 分析結果

表3に石器の測定値および算出した指標値を、図2と図3に黒曜石原石の判別図に石器の指標値をプロットした図を示す。視覚的にわかりやすくするため、図では各判別群を楕円で取り囲んだ。

分析の結果、3点が赤井川群(北海道、赤井川エリア)、5点が上士幌群(北海道、上士幌エリア)、1点が豊浦群(北海道、豊浦エリア)の範囲にプロットされた。また、分析No.5は図2では赤井川群の範囲にプロットされたが、図3では赤井川群の下方にプロットされた。これは、先述したように遺物の風化による影響と考えられ(望月, 1999)、赤井川群に属する可能性が高い。同様に、分析No.4、No.10の2点は豊浦群(北海道、豊浦エリア)に属する可能性が高い。

図2、3の判別図では、赤井川群と上士幌群の範囲の一部に重複があるため、区別が困難な場合がある。そこで、以下に示すY分率を算出した。

$Y分率 = Y強度 \times 100 / (Rb強度 + Sr強度 + Y強度 + Zr強度)$

赤井川群および上士幌群の原石および石器について、横軸Y分率、縦軸Mn強度 $\times 100 / Fe強度$ をプロットした判別図を図4に示す。図4においても、4点は赤井川群、5点は上士幌群と判断された。

表2 東日本黒曜石産地の判別群

都道府県	エリア	判別群名	原石採取地
北海道	白滝	白滝1	赤石山山頂(43)、八号沢遺跡(15)
		白滝2	7号沢川支流(2)、15号沢遺跡(10)、10号沢沢尻遺跡下河床(11)、アジサイの滝遺跡(10)
	赤井川	赤井川	曲川・土木川(24)
	上士幌	上士幌	十勝三股(4)、タウシバツ川右岸(42)、タウシバツ川左岸(10)、十三沢(32)
	釧路	釧路山	釧路山(5)
	所山	所山	所山(5)
	豊浦	豊浦	豊浦(10)
	旭川	旭川	近文台(8)、近文台(2)
	名寄	名寄	近文布川(19)
	秋田	秋田別1	
		秋田別2	中山(65)
		秋田別3	
	遠軽	遠軽	社名(源)河床(2)
	生田原	生田原	仁田布川河床(10)
	留辺蘂	留辺蘂1	ケシマツ川河床(9)
		留辺蘂2	
青森	御路	御路	御路市宮スキー場(9)、阿寒川右岸(2)、阿寒川左岸(6)
	本道	出来島	出来島遺跡(10)、鶴ヶ坂(10)
	深浦	八森山	八森山遺跡(7)、八森山公園(8)
	青森	青森	天田内川(6)
	秋田	男鹿	金ヶ崎遺跡(10)、金ヶ崎海岸(4)
岩手	北上川	北上新居1	北上川(9)、森城(33)
		北上新居2	
		北上新居3	
宮城	仙台	宮崎	湯ノ倉(40)
		色麻	根岸(40)
		仙台	秋保(18)
		塩竈	秋保2
		塩竈	塩竈(10)
山形	羽黒	月山	月山荘前(24)、大蔵沢(10)
		鶴引	たのき代(19)
		板山	板山牧場(10)
新潟	新津	新津	金津(7)
		佐渡	佐渡(4)
		真光寺	真光寺(4)
栃木	高野山	甘藷沢	甘藷沢(22)
		七尋沢	七尋沢(3)、宮川(3)、枝持沢(3)
		西新屋	美香バーライト土砂堆積場(30)
		廣山	廣山(14)、東新屋(54)
		小深沢	小深沢(42)
		土屋橋1	土屋橋西(10)
		土屋橋2	新和トンネル北(20)、土屋橋北西(58)、土屋橋西(11)
		古崎	和田峠トンネル上(28)、古崎(38)、和田峠スキー場(28)
		ブドウ沢	ブドウ沢(20)
		牧ヶ沢	牧ヶ沢(20)
		高松沢	高松沢(19)
		星ヶ台	星ヶ台(35)、星ヶ塔(20)
		冷山	冷山(20)、寒峠(20)、寒峠東(20)
		戸ノ湯	戸ノ湯(20)
		横須	横須(51)
神奈川	箱根	箱根	箱根(20)
		上多賀	上多賀(20)
		上多賀	上多賀(20)
静岡	天城	天城	天城(20)
		砂神崎	砂神崎(20)
		久見	久見バーライト中(6)、久見探検現場(5)
東京	神津島	神津島	神津島(20)
		久見	久見バーライト中(6)、久見探検現場(5)
		真浦	真浦南岸(3)、加茂(4)、岸田(3)

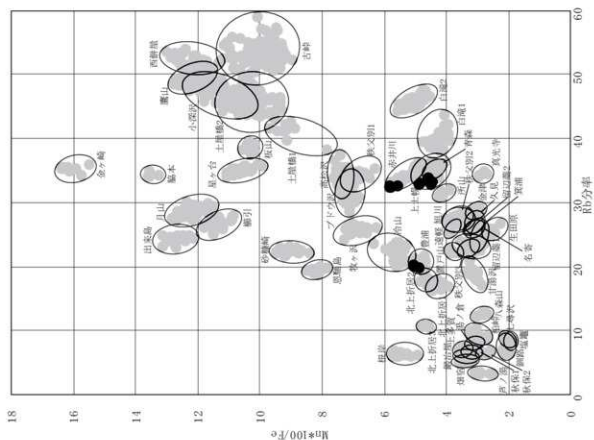
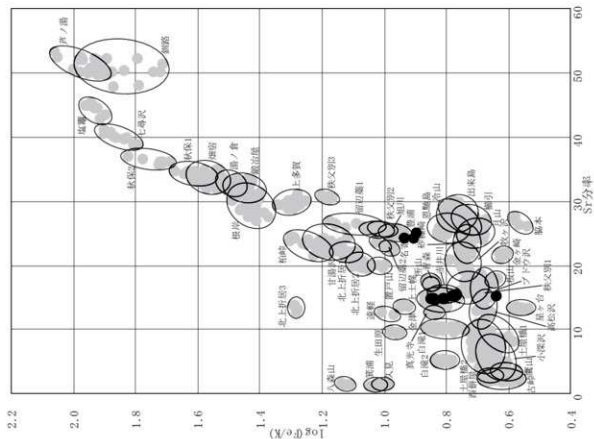


表3 測定値および産地推定結果

分析 No.	K強度 (cps)	Mn強度 (cps)	Fe強度 (cps)	Rb強度 (cps)	Sr強度 (cps)	Y強度 (cps)	Zr強度 (cps)	Rb分率	Mn*100 Fe	Sr分率	log Fe K	Y分率	判別群	エリア	分析 No.
1	278.8	94.1	1696.3	273.9	361.1	396.3	843.9	32.58	5.58	15.20	0.78	16.69	赤井川	赤井川	1
2	256.1	79.7	1783.1	848.5	377.6	462.5	861.1	33.28	4.47	14.81	0.84	18.14	上土幌	上土幌	2
3	252.2	79.5	1740.4	799.8	342.8	432.5	790.9	33.80	4.57	14.49	0.84	18.28	上土幌	上土幌	3
4	256.6	102.8	2035.6	557.8	602.0	368.5	1145.9	20.18	5.05	25.03	0.90	13.33	豊浦?	豊浦?	4
5	263.4	67.0	1147.6	547.6	257.7	281.3	599.4	32.48	5.84	15.28	0.64	16.69	赤井川?	赤井川?	5
6	218.1	67.8	1401.4	647.8	296.6	337.0	665.6	33.03	4.84	14.82	0.81	18.20	上土幌	上土幌	6
7	315.3	110.1	1904.6	842.4	398.9	431.0	931.2	32.36	5.78	15.32	0.78	16.55	赤井川	赤井川	7
8	335.9	115.9	1981.7	882.1	416.6	452.5	949.3	32.66	5.85	15.43	0.77	16.76	赤井川	赤井川	8
9	253.3	106.8	2188.8	560.9	685.3	374.1	1202.6	19.87	4.88	24.27	0.94	13.25	豊浦	豊浦	9
10	274.3	112.4	2220.5	585.3	708.0	386.8	1241.0	20.64	5.06	24.24	0.91	13.24	豊浦?	豊浦?	10
11	232.0	73.4	1506.3	700.5	313.9	389.4	725.7	32.89	4.87	14.74	0.81	18.29	上土幌	上土幌	11
12	165.2	52.7	1174.6	527.4	237.2	292.3	550.1	32.82	4.48	14.76	0.86	18.19	上土幌	上土幌	12

表3に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。また、表4に出土層位、器種別の産地を示す。I層、II層、III層ともに、赤井川、上土幌、豊浦エリア産の石器が確認された。

4. おわりに

共立2遺跡より出土した黒曜石製石器12点について、蛍光X線分析による産地推定を行った結果、4点が赤井川、5点が上土幌、3点が豊浦エリア産と推定された。

表4 出土層位、器種別の産地

出土層位	器種	赤井川	上土幌	豊浦	計
I層	石鏃			1	1
	石鏃	1			1
	スクレイパー	1	1		2
	小計	2	1	1	4
II層	スクレイパー	1		1	2
	U・Rフレイク		1		1
	小計	1	1	1	3
III層	石鏃	1	1		2
	U・Rフレイク		1		1
	石核			1	1
	小計	1	2	1	4
不明	石鏃		1		1
	小計	0	1	0	1
計		4	5	3	12

引用文献

望月明彦 (1999) 上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定. 大和市教育局委員編

「埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書2—上和田城山遺跡編—」: 172—179. 大和市教育局委員編.

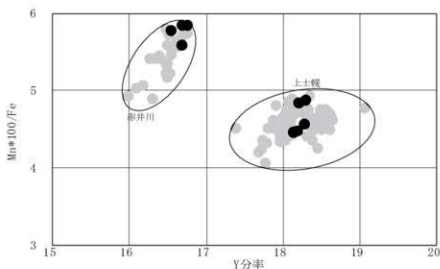


図4 黒曜石産地推定判別図(3)

(令和2年12月25日受領 内容点検・編集 末光)

写真図版



調査区東側表土除去作業（南から）



調査区西側表土除去後（南東から）

図版 2 共立 2 遺跡



調査区北側調査状況（南から）



調査区北側斜面部調査状況（北から）



調査区西側調査状況（東から）



調査区南側調査状況（南東から）

図版 4 共立 2 遺跡



P-1 遺物出土状況



P-2 セクション



P-2 完掘



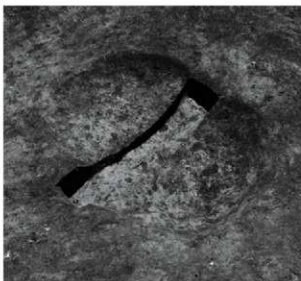
P-3 セクション



P-3 完掘



P-4 セクション



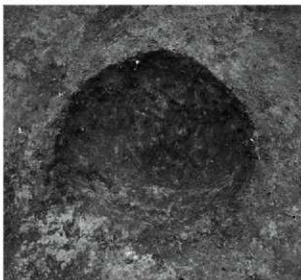
P-4 完掘



P-5 セクション

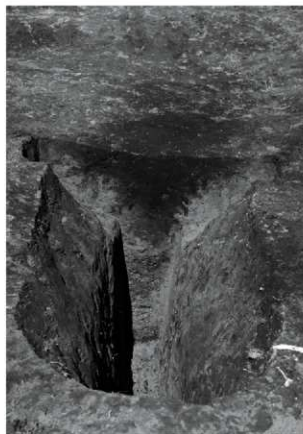


P-6 セクション



P-6 完掘

図版 6 共立 2 遺跡



TP-1 セクション



TP-1 完掘



TP-2 セクション



TP-2 完掘



TP-3 セクション



TP-3 完掘



TP-4 セクション



TP-4 完掘

図版 8 共立 2 遺跡



P S - 1 検出



P S - 2 検出



P S - 3 検出



P S - 4 検出



PS-5 検出



FC-1 検出



FC-2 検出



S-1 検出

図版10 共立2遺跡



旧石器調査範囲



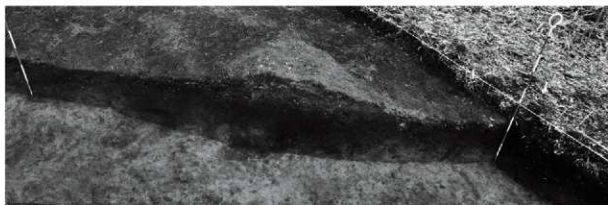
旧石器調査



旧石器出土状況



L 19・20区メインセクション



Lライン東側メインセクション



調査区完掘

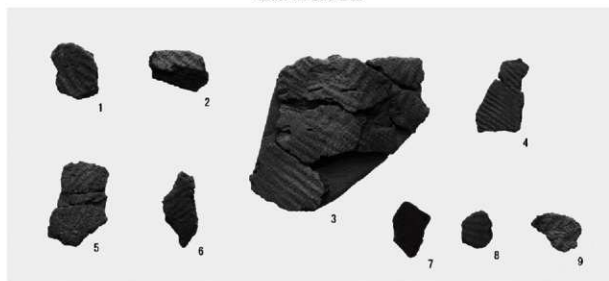


1

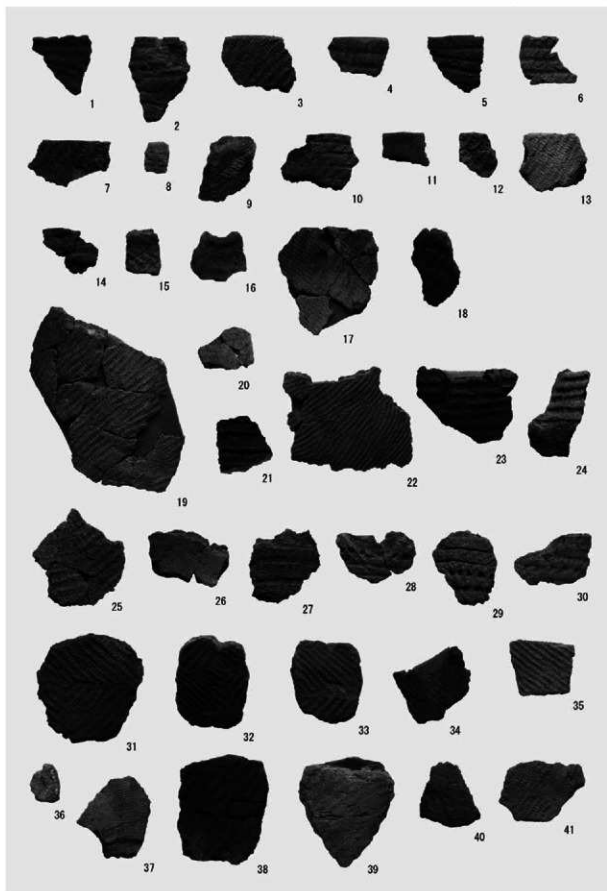


2

遺構出土復原土器

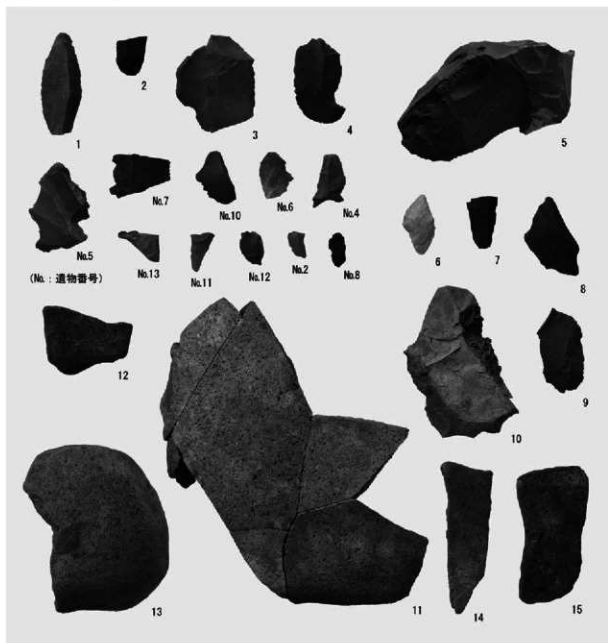


遺構出土破片土器

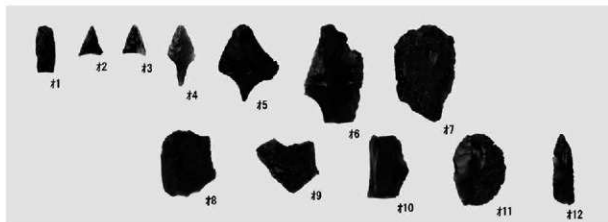


包含層出土破片土器

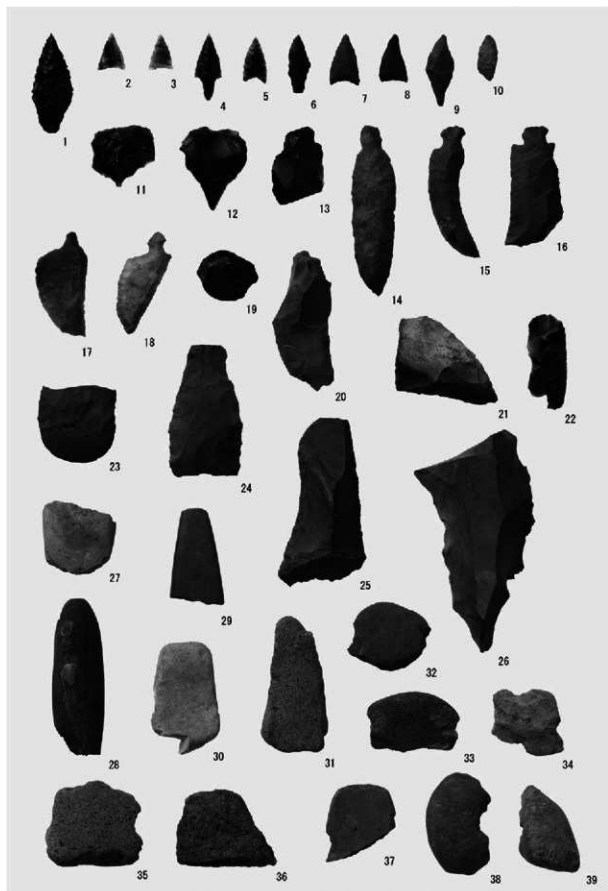
図版14 共立2遺跡



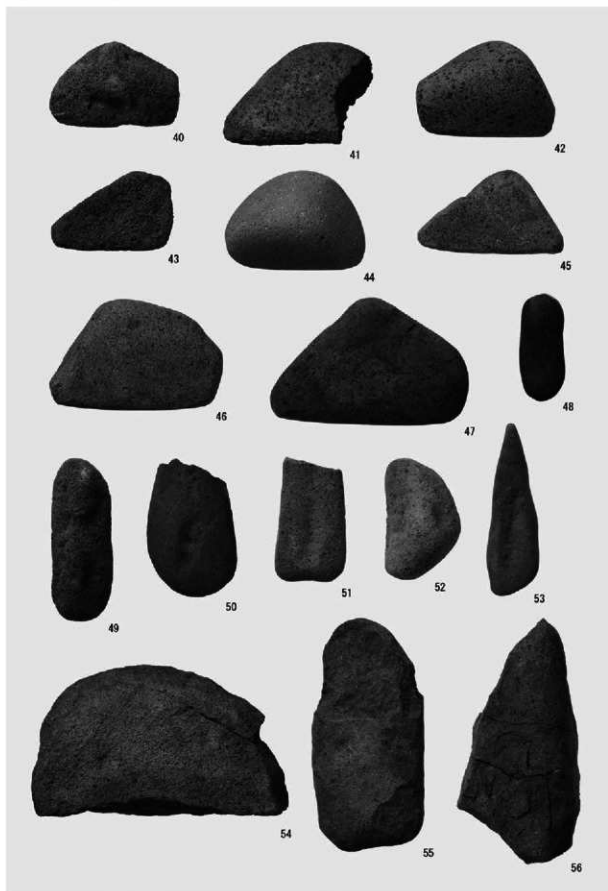
遺構出土石器



黒曜石原産地分析試料



包含層出土石器(1)



包含層出土石器(2)



57



58

図版18 豊野4遺跡



調査前状況（北から）



調査前状況（南から）



表土除去作業（南から）



表土除去作業終了（北から）

図版20 豊野4遺跡



包含層検出（北から）



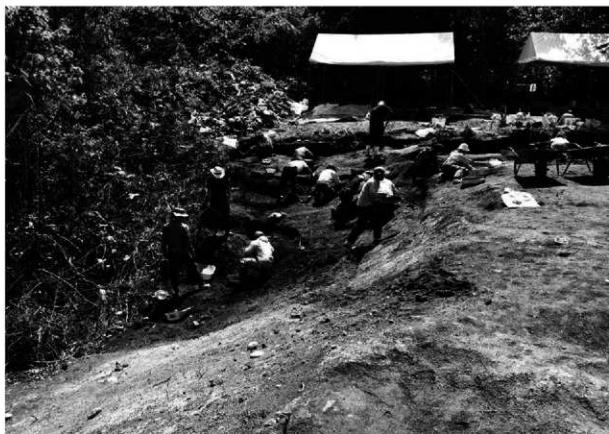
包含層検出（南から）



包含層調査（南西から）



包含層調査（東から）



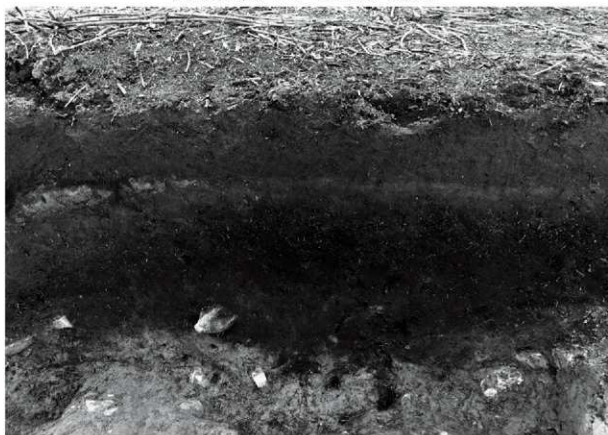
沢地形調査状況（北東から）



沢地形土層断面（北東から）



地山礫出土状況 (F 2・3区付近) (東から)

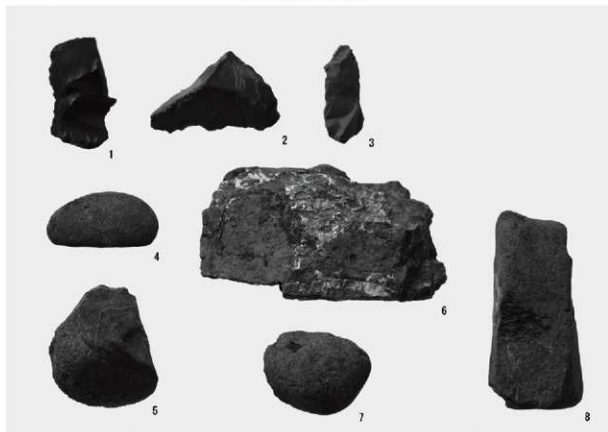


土層断面 (G 3区) (北東から)

図版24 豊野4遺跡



調査区完掘（東から）



出土石器

引用参考文献

団体・組織刊行物

- 長万部町 1977 『長万部町史』
 国縫小学校開校百周年記念協賛会 2000 『国縫校』開校百周年記念誌
 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 2001 『アイヌ語地名ハンドブック』北海道環境生活部
 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 2001 『アイヌ語地名リスト』北海道環境生活部
 静内町 1975 『静内町史(増補改訂版)』
 地学団体研究会道南班 2002 『道南の自然を歩く』北海道大学図書刊行会
 ベドロジスト懇談会 1984 『土壌調査ハンドブック』博友社
 北海道 1969 『新北海道史』第七巻史料一「津軽一統志」巻第十
 北海道 1970 『新北海道史』第二巻通説一
 北海道開発庁 1958 「豊浦」(札幌-第49号) 5万分の1地質図幅
 北海道教育庁社会教育課 1967 『北海道道跡埋蔵文化財包蔵地一覽』昭和42年3月
 北海道教育委員会 1979 『有珠川2・植苗3道跡』北海道縦貫自動車道建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
 北海道教育委員会 1983 『北海道のチャシ』

長万部町教育委員会 埋蔵文化財調査報告書

- 長万部町教育委員会 1985 『史跡 東蝦夷地南部藩陣跡ヲシヤマン陣屋跡』昭和59年度発掘調査事業報告書
 長万部町教育委員会 1995 『オハルベツ2道跡 栄原2道跡 ナイベコシナイ2道跡』
 平成6年度 縦貫自動車道長万部町埋蔵文化財発掘調査概要報告書
 長万部町教育委員会 1996 『オハルベツ2道跡 栄原2道跡』
 平成7年度 長万部町埋蔵文化財発掘調査概要図版集
 長万部町教育委員会 1997 『オハルベツ2道跡 栄原2道跡』
 平成8年度 長万部町埋蔵文化財発掘調査概要図版集
 長万部町教育委員会 1998 『オハルベツ2道跡』 平成9年度 長万部町埋蔵文化財発掘調査概要図版集
 長万部町教育委員会 1996 『ナイベコシナイ2道跡』 長万部町埋蔵文化財調査報告
 北海道縦貫自動車道(虻田-長万部)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
 長万部町教育委員会 1997 『栄原2道跡(1)』 長万部町埋蔵文化財調査報告2
 北海道縦貫自動車道(虻田-長万部)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
 長万部町教育委員会 1999 『オハルベツ3道跡 オハルベツ4道跡』 長万部町埋蔵文化財調査報告3
 道営農林業用揮発油税財源身替農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
 長万部町教育委員会 2000 『富野6道跡 富野7道跡』 長万部町埋蔵文化財調査報告4
 北海道縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
 長万部町教育委員会 2000 『共立道跡』 長万部町埋蔵文化財調査報告5
 北海道縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
 長万部町教育委員会 2001 『オハルベツ2道跡(1)』 長万部町埋蔵文化財調査報告6
 北海道縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
 長万部町教育委員会 2002 『栄原2道跡(2)』 長万部町埋蔵文化財調査報告7
 北海道縦貫自動車道(虻田-長万部)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
 長万部町教育委員会 2002 『オハルベツ2道跡(2)』 旧石器編 長万部町埋蔵文化財調査報告8
 北海道縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

北海道文化財保護協会 埋蔵文化財発掘調査報告書

- 北海道文化財保護協会 1999 『長万部町 オハルベツ2道跡』北海道文化財保護協会調査報告書第11集
 北海道縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
 北海道文化財保護協会 1999 『長万部町 富野5道跡』北海道文化財保護協会調査報告書第12集
 北海道縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
 北海道文化財保護協会 2000 『長万部町 オハルベツ2道跡(2)』北海道文化財保護協会調査報告書第13集
 北海道縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
 北海道文化財保護協会 2000 『夕張・千歳・長万部 5年間の発掘調査の記録』

論文・書籍等

- 赤木三兵 1972 『アイヌ語小辞典』さんおん文学会
 石井正夫 1983 『国縫地域の地質』地域地質研究報告5万分の1地質図幅札幌(4) 第59号
 通商産業省工業技術院 地質調査所
 宇田川洋 2005 『増補改訂 アイヌ伝承と砦』北方新書007 北海道出版企画センター
 大場利夫・田川賢蔵 1955 『静狩道跡』北海道山越郡長万部町
 大久保雅弘・藤田至則 1984 『地学ハンドブック・新訂版』築地書館

- 久保和也・石田正夫・成田英吉 1983 「長万部地域の地質」
 地域地質研究報告5万分の1地質図幅 札幌(4)第48号 通商産業省工業技術院 地質調査所
 小山正忠・竹原秀雄 2011 「新版 標準土色帳」34版 日本色研事業株式会社
 榎原正文 2011 「データベースアイヌ語地名5」 北海道出版企画センター
 菅江真澄(内田武志・宮本常一編訳) 1966 「えぞのてふり」『菅江真澄遊覧記2』東洋文庫68 平凡社
 添田雄二 2020 「北海道の火山噴火史」・「遺跡発掘調査で重要となる主な火山灰一覧」
 『北海道の防災考古学』『北海道の防災考古学』編集委員会編
 高倉新一郎編 1969 『日本庶民生活史料集成』第四巻 探検・紀行・地誌(北辺篇)
 松宮観山「蝦夷談筆記」下(394~400頁)蝦夷録起(639~650頁)則田安右衛門「寛文十年秋蜂起集書」(651~677頁)
 中村有吾・平川一臣 2004 「北海道駒ヶ岳起源の広域テフラ、駒ヶ岳 G テフラの分布と噴出年代」
 『第四紀研究』43
 藤原哲夫 1962 「北海道の砂チタンおよび含チタン砂鉄鉱石」北海道立地下資源調査所
 藤原哲夫・庄谷幸夫 1975 「北海道西南部美利河〜国縫地域におけるグリーン・タフ中のゼオライト」
 『粘土科学』15-2

- 町田洋・新井房夫 1992 「火山灰アトラス」東京大学出版会
 松浦武四郎(高倉新一郎 校訂 秋葉実 解説) 1982 「丁巳 東西蝦夷山川地理取調日誌」下 北海道出版企画センター
 「報登宇志辺津日誌 巻の一 巻の二」丁巳 第二十一巻・第二十二巻(ほといしべつにっし)
 山田秀三 1983 「アイヌ語地名の研究2 山田秀三著作集」草風館
 山本慎一 1993 「北海道文化財保護あれこれ」北海道図書企画
 山本慎一 1993 「北海道文化財関係年表(付関係資料)」『北海道文化財保護あれこれ別冊』北海道図書企画

北海道埋蔵文化財センター 刊行物

- (財)北海道埋蔵文化財センター 1985 「今金町 美利河1遺跡」
 美利河ダム建設工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 北埋調報23
 (財)北海道埋蔵文化財センター 1989 「今金町 美利河1・2砂金探掘跡」
 後志利別川水系美利河ダム建設工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 北埋調報59
 (財)北海道埋蔵文化財センター 1994 「豊浦町 高岡1遺跡」
 北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 北埋調報88
 (財)北海道埋蔵文化財センター 1995 「豊浦町 高岡1遺跡(2)」
 北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 北埋調報91
 (財)北海道埋蔵文化財センター 1996 「豊浦町 高岡1遺跡(3)・高岡2遺跡」
 北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 北埋調報106
 (財)北海道埋蔵文化財センター 1996 「豊浦町 東雲遺跡」
 北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 北埋調報107
 (財)北海道埋蔵文化財センター 1999 「長万部町 富野3遺跡」
 北海道縦貫自動車道(七飯〜長万部)埋蔵文化財発掘調査報告書 北埋調報131
 (財)北海道埋蔵文化財センター 2000 「長万部町 花岡2遺跡・花岡3遺跡」
 北海道縦貫自動車道(七飯〜長万部)埋蔵文化財発掘調査報告書 北埋調報139
 (財)北海道埋蔵文化財センター 2000 「長万部町 豊野6遺跡」
 北海道縦貫自動車道(七飯〜長万部)埋蔵文化財発掘調査報告書 北埋調報143
 (公財)北海道埋蔵文化財センター 2019 「苫小牧市 高丘8遺跡(2)」
 苫小牧中央I.C雪氷管理施設設置工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 北埋調報361
 (公財)北海道埋蔵文化財センター 2019 「浦河町 向別遺跡・栄丘遺跡・昌平町遺跡・常盤町遺跡」
 上向別浦河(停)線道路改築事業埋蔵文化財発掘調査報告書 北埋調報363
 (公財)北海道埋蔵文化財センター 2020 「テエタ45」
 (公財)北海道埋蔵文化財センター 2021 「調査年報33」令和2年度

(北海道新幹線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書)

- (財)北海道埋蔵文化財センター 2011 「木古内町 木古内2遺跡」 北埋調報278
 (財)北海道埋蔵文化財センター 2011 「木古内町 大平遺跡 大平4遺跡」 北埋調報280
 (財)北海道埋蔵文化財センター 2012 「木古内町 蛇内2遺跡」 北埋調報281
 (財)北海道埋蔵文化財センター 2012 「木古内町 大平4遺跡(2) 蛇内2遺跡(2)」 北埋調報292
 (公財)北海道埋蔵文化財センター 2013 「木古内町 木古内2遺跡(2)」 北埋調報293
 (公財)北海道埋蔵文化財センター 2014 「木古内町 木古内遺跡」 北埋調報304
 (公財)北海道埋蔵文化財センター 2015 「北斗市 押上1遺跡」 北埋調報312
 (公財)北海道埋蔵文化財センター 2015 「木古内町 新道4遺跡(4)」 北埋調報320
 (公財)北海道埋蔵文化財センター 2016 「木古内町 大平遺跡(2)」 北埋調報321
 (公財)北海道埋蔵文化財センター 2017 「木古内町 大平遺跡(3)」 北埋調報328
 (公財)北海道埋蔵文化財センター 2017 「福島町 館崎遺跡」 北埋調報333
 (公財)北海道埋蔵文化財センター 2017 「知内町 湯の里遺跡(2)」 北埋調報334

報告書抄録

[illegible]

(公財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第366集

**長万部町
共立2遺跡・豊野4遺跡**

－北海道新幹線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－
令和3（2021）年3月26日

編集・発行 公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地1
TEL 011(386)3231 FAX 011(386)3238
[URL] <http://www.domaibun.or.jp/>
[E-mail] mail@domaibun.or.jp

印刷 株式会社北海道機関誌印刷所
〒006-0832 札幌市手稲区曙2条3丁目2-34
TEL 011(686)6141 FAX 011(676)6684

